

ヒロシマの彼方

長瀬隆

目次

一章	被爆女性の手記 日本／大分被団協	3
二章	樺太の心的外傷 幼なじみの露日混血者 ロシア語との最初の出会い	11
三章	ロシア語とその文学 ドストエフスキーとチエーホフ、両者の秀抜な注釈者としてのレオーノフ（ソ連作家）	25
四章	マルグリット・デュラス讃 『ヒロシマわが愛』と『愛人』 語りの革新的構造 平田清明『市民社会と社会主義』（キリスト教とマルクス主義）	50 70
五章	新しい酒は新しい革袋へ トリウム熔融塩核エネルギー炉 『日本とロシアー出会いからの200年』（2006） 日本原水協・吉田嘉清「ヴァイソーツキイの詩と歌」 城田俊『ハザールー幻のユダヤ教騎馬民族国家』の意義	73 76 86
六章	マルクス「ユダヤ人問題」の今日 I・ドイッチャー『非ユダヤ的ユダヤ人』 イスラエル批判とウラン軽水炉批判の合致―二人のリリエンソール 西欧語の両義、二義、さらには多義性 佐藤優の迷走と自滅	95 97 97 100
七章	1959年夏 ウイーンの奇蹟 ポール・ロブソンと辛島和子	103
八章	未来への光 Peace & International Friendship	120
索引 人名・事項		130

一章 被爆女性の手記

1954年1月南太平洋ビキニ環礁で静岡県焼津港所属のマグロ漁船が米水爆実験の放射線を浴び、これが契機となって東京杉並区から水爆禁止の署名運動が起こり、全国に拡大した。また東大病院に入院中だった乗組員の最年長者で無線長であった久保山愛吉氏が亡くなり、四月、焼津で葬儀が行われた。

それは、歌人の兄上が亡くなり、その歌集出版の仕事が一段落したあなた、大分県庁の職員であつたあなた、茶の湯を習い初級の名とりになり、油絵に親しんでいたあなたを大きく変えた。県庁の労働組合で何事かを発言したようなのである。他に一人の男子の被爆者とともに焼津での葬儀に送られた。新聞社が撮影した大分駅頭での写真が残っている。

焼津であなたは広島・長崎両県をはじめとする全国の被爆者たちと会い、刺激されることとなった。その一人に東京の行宗一氏がいた。陸軍に召集され広島市の宇品港の部隊にあり、救援のために市内に入って残留放射能で被爆、杉並区に住んでいた。婦人たちによる署名運動の傍らに、マイクをもって立ち、広島での原爆被爆について語り始めた。

これを見た人に当時この区に住んでいた早稲田大学高等師範部の学生がいた。北九州の若松市（当時）の出身で、後に法学部に進み1950年当時全学自治会長であつた人である。同市から広島市内の学校に進学した友人たちがおり、原爆に遭っているはずなのだが、質してもそれをけして口にしないことを不思議に思っていたという。ところがまさにその原爆について声高に語る姿に初めて接し、「驚いた」ということだった。

「水爆だけではない。原爆を含む核兵器全体が問題である」ということになり、「水爆禁止」は「原水爆禁止」へと名を変え、また運動の拡大にともない署名の集計センターが必要になり、杉並の中心者だった公民館長の安井郁氏がその長に就任した。安井氏は東京帝大法学部教授、戦時中大東亜戦争を支持宣伝したことで辞任を余儀なくされて退職、自宅で弁護士生活をしていたのが推挙されて新設の公民館長の任にあつた。婦人たちの読書会を組織していて、取り上げた著作のうちに清水幾多郎訳のE・H・カー『歴史とは何か』その他があつて注目される。カーが第二次大戦後東南アジアの諸国が独立を勝ち取ったことでの日本の寄与を述べていて、これによって己の戦中の活動を弁護したかったためのようであつた。

広島であなたは下宿生活をしていた。食事が粗悪で下痢を起こし近くのひとりの女医の医院に通っていたという。東京出身東邦女子医専卒の人で夫が召集により広島陸軍病院の勤務となり、その近くに移り住み開院していたのだった。戦後は夫の生家がある大分市に

移り住み、あなたはビキニ事件の前後に再会し、「大分県に被爆者の組織をつくろう」ということになったようである。またそれ以前に署名運動組織の日本原水協への発展解消とそれによる1955年の世界原水禁大会の開催があり、その支部としての木下郁知事を会長とする大分原水協の発足があった。そして第二回の長崎での世界大会にはこの大分原水協の一員としてあなたは出席、被爆者の一人として登壇・発言しており、新聞社による写真が残っている。

長崎大会では集まった全国各地の被団協組織の人々が一堂に会し、被爆者団体の全国統一組織としての日本被団協の結成が決められ、大会の最終日に広島森滝一郎氏によって発表されており、大分県でも県被団協の結成が急がれることになった。あなたがそれらの記録を残しているのはこの前後からのことでその最初の一つは時期的には1957年のものとなるが、行動はもっと早くから始められていて、大分県庁の同年10月28日の県庁週報（総務部調査広報課発行）の一面には次の記事が掲載されている。

来月一日から「原爆被害者救済月間」が行われるが、大分県在住の被害者はおよそ千人で、それぞれ大なり小なりに病苦に悩んでいる。

こんど、こうした同じ苦しみを持つ人々が△原爆被爆者大分県協議会△をつくったが、これをつくるについては、農地開拓課の辛島和子さんが大分、別府に居住する被害者のほとんどを自宅訪問して、手を結ぶことを訴えた力が必要になったものである。

なお、別府市天満宮の佐伯富蔵さん（72歳）は体が弱り、毎日鼻血が出て、目はくらみ、歩行にも困難な状態である。三畳一間一軒家の家で寝たきりである。「前の妻が病気になり頭髮が抜け、うみが出だすと近所のひとが梅毒だといって水道も使わせてくれませんでした。いま辛島さんたちがいろいろと手をつくして下さるのがただ一つの便りです。もう誰にも訴える力ありません。」（以下大幅に略）

所属の課の仕事だったのではなく、あなたがほぼ一人で個人的に行っていたようである。この年の四月に被爆者手帳が交付されるようになって、一人一人にその申請をするよう誘い、あわせて県被団協の結成を目指していたのである。やがて東京での第三回の原水禁世界大会に向かうことになり、木下郁知事の指示により、県被団協事務局長候補として、県原水協の事務局長を兼務する秘書課長のもとに同課員として配属され、東京の大会に向かうことになった。

私はあなたよりも四歳以上若く、1931年に樺太に生まれており、ソ連占領下で暮ら当時すでに将来樺太について書くことになるだろうと思っていた。引き揚げて北海道十勝に住み、目的にもっとも相応しい学科と信じて早稲田大学露文科に進んだ。受験当時は知らなかったが、昭和初年に設立されるも1935年に閉鎖され戦後に復活した学科だった。またソビエト・ロシアとの間では国交はまだ樹立されていなかった。それが1956年1

0月に平和条約は棚上げした状態で国交回復宣言がなされ、相互の人事交流趨機ができることになった。

日本原水協は1957年2月、理事会において原爆を所有する米英ソ三か国に対し、核兵器の製造、貯蔵、持ち出しを止めるべく使節団の派遣を決定した。私は卒業を控えていたがそのソ連班にロシア語通訳をかねた事務局員として起用されることになり、事務局入りをした。団長が1953年の映画『ひろしま』の制作に寄与した日教組福委員長今井彰、団員に長崎の被爆者団体代表杉本亀吉、原水禁尾全国市長会議を主催した小倉市長春永誠、その他二人をふくむ5人の人々とともにヨーロッパ経由でモスクワに入り、ソ連の各地をまわり、帰路にはモンゴルと中国に立ち寄って帰る一カ月におよぶ旅をした。

東京ではこの間に第三回の世界大会が開催され大分からは県事務局長以下四十人が団を構成して参加した。私が見ていない大会であるが、あなたは被団協準備委員会での報告が予定されていたために、詳細な記録、というよりは予定されている大分被団協準備会での報告文を残している。長くはなるがここに掲げるのは、私が見ていないあなた、私が出会う前のあなたが文章のうちに存在し、息づいているからである。あなた自身所持し保管していながら絶えて久しく再読することなく逝き、私がごく最近開いて見るようになったものである。

原水爆禁止日本協議会は東京に事務所をもちながらその最初の世界大会を広島で行い、その成功により第二回を長崎で開くことになり、そこで毎年八月に行うことが決まり、1957年東京で第三回へと発展した。

冷戦ではなく熱い戦争だった朝鮮戦争が終わっており、世界大会の名で始まったわけであり、当初から米国をはじめとしたいわゆる自由主義諸国から、主としてキリスト教の団体の関係者なのであるが、参加出席している。ところがこの1957年になってソ連からソ連平和委員会の団が参加しており、また人民中国（当時の呼称）からは魯迅夫人だった許公平女史を団長とした団が参加している。赤十字関係ということで日本外務省も許したのだった。

ちなみに私たちの訪ソ班は団員のひとりである香山健一全学連委員長が「国外での反政府活動の危険」を理由に旅券が下りず、出発が大幅に遅れた。香山が辞退して出発できることとなり、モスクワで私たちはこれから東京の世界大会に向かうソ連代表団員と会っており、帰路の北京では対日関係の責任者である廖承志と東京の大会から帰ったばかりの許公平女史主催の晩餐会に招かれた。

あなたは大分原水協代表団の一人であり、大会初日8月12日都立体育館での総会の出席者を、外国代表92名、日本側代表者出席者3385名、その他オブザーバーを含めて計5千人と記し、冒頭の安井郁理事長の基調報告は（新聞で広く報じられていたので）外し、長崎の被爆者代表（六人が登壇）による「ケロイドの私たちの悲しみは世界最後のものではあつてほしい」とする報告を記し、続いて「中国代表趙樸初^{とつ}の演説を記す。

「広島、長崎に落とされた二つの原爆、ビキニの水爆実験による漁民の方々の災害は、

日本人の災害であるだけではなく、全人類の災害だと思っています。これら 数十人の犠牲者によって得られた教訓は銘記されるべきだと思います。

中国代表の一員として、私も皆様と同様に災害を受けたような気持で被爆者たちのお話を承りました。私たちは悲しみを力に変え、原水爆の脅威と原水爆の基地を永久に歴史の上から取り除かねばなりません。

私はここで一つお願いがあります。ここで広島・長崎の被災者と握手させてください。どうぞ病院で療養しておられる方々にこうお伝えください。私は中国人民を代表してあなたと握手しますと。私はまた久保山夫人に握手したいと思っています。」

この後、広島・長崎の被爆者代表、久保山夫人が登壇し、趙樸初氏と抱擁する感激的なシーンがあり、会場は嵐のような拍手でございました。更に――

「私たちは第三回世界大会の機会を借かりて、つつしんで全中国人民を代表して本大会に参加した中国代表団に託した日本金に換算して約七百万円を日本の原爆被害者に対する援助・慰問金として贈呈いたし、皆様の健康が一日も早く回復されることをお祈りいたします。」

「安井理事長の答礼の言葉があり、熱狂的な拍手のうちに第一日が終わりました」。

第二日には全体がいくつもの階層別に分かれてそれぞれの専門協議会が行われ、あなたはそのうちの一つである「被爆者協議会」に出席している。そして冒頭に行われた日本被団協事務局長の藤井平一氏の一般報告をメモしている。それは「被爆者援護法」の獲得¹¹成立に至る経緯とまたその問題点を指摘するものだった。また八つの都府県の被団協代表がそれぞれの地域の実情を報告し、あなたは大分県の報告をしている。続いて午後には四つの分科会に分かれて討議しているのであるが、あなたはそれを報告にまとめている。

「被爆者代表として第四分科会に出席いたしましたのでその模様をご報告申し上げます。

大会第三日目の八月十四日、早稲田大学大隅講堂において外国代表と日本の各階層代表訳船員が集まりまして、「被爆者対策および被爆というテーマのもとで討議は行なわれました。主題に入ります前に戦後十三年被爆者救援についてなら顧みられなかったのはなぜか、それは占領体制下にあったため、史上例をみない惨事であるにもかかわらず、米国の気兼ねして公言できなかった事情、加えて朝鮮戦争が起こり、平和運動は抑圧されるようになり、平和という言葉さえ変な誤解をうけ、原爆問題はタブーとなり、被害の実相を十分に宣伝できなかったためであることが指摘されました。

しかし一九五四年四月に講和条約が発効し、新聞・雑誌により広島・長崎の被爆の実相が広く伝えられ、さらに一九五三年二月のビキニ被爆により原水爆にたいする日本国民の怒りと憎しみが爆発し、原水爆禁止運動は画期的な前進を遂げることになったのでございます。第五回原水禁世界大会が広島で開催され、その宣言のなかで初めて被爆者の救援がうたわれたのでございます。第二回の長崎大会で広島、長崎、愛媛、長野の四県の被爆者

協議会が発足し、第三回までに十八都府県にこれが結成されまして、国会に請願、各国元首に手紙で訴える等、強力な運動を進め、本年四月「原子爆弾の被爆の医療等に関する法律」が施行されることになったのでございます。

第四分科会の午前中は各助言者の基調報告が行われました。先ず「救援運動の問題点」について（日本被団協事務局長より）医療法実施の問題点が挙げられました。医療法つまり「原子爆弾の被爆に医療にかんする法律」は、平和運動とくに国際的にまた国内的に展開された原水爆禁止運動の発展のなかでその組織化された運動の成果として成立し、被爆者救援運動は明るい見通しをえたのであります。しかしながら全国三十万人に及ぶ被爆者がおかれている様々な困難な状況、法の実施面に問題点があるのでそれにふれてみたいと思います。

「生活の保障が確立されていないこと」

① 被爆者は疾病等による収入源の減少や就労不能等で生活困難の度合いが極めて高いので「医療法」によって治療を要する者でも、それが一家の主人であれば家族の生活が成り立たなくなるために「治療申請」を躊躇する場合が少なくないのであります。今年八月二日「再起不能骨髄性白血病」俗にいう「白血病」の病名で、二十六才で生命を閉じた長崎市の津山さんの例をとってみましょう。

津山さんは長崎市の爆心地から二キロの路上で被爆し全身に火傷を負い、長崎国立病院に入院、退院して家に帰り、二十九年から三菱造船所に臨時工として就職しました。しかし三十一年六月再度発病して入院生活に入ったのですが、治療費はなんとか保障されても、年老いた母親の生活と臨時工のための失業の心配がつきまといました。十一月末に退院してすぐに仕事に出たものも、数日後には症状が悪化してまた入院、三月には白血球が一万二千になりながら本人希望で退院し会社に出たところ「首切り通告」をうけ、「いま自分が仕事を失えば自分の治療はもとより老母を養うすべもなくなる」と県原水協に幹旋を頼み、新規に試験採用として働くことになったのです。しかし七月十九日に吐血して入院。病状は悪化し、苦しみを死をもって（ママ）免れようと、カミソリで首や腕を切りみずから命を絶ってしまわれたのでございます。

これは一例にすぎませんが、大分県におきましても昭和二十五年の国勢調査では被爆者数は一一一六名となっており、去る九月十五日に発足いたしました大分県協議会が把握している数は一七四人にすぎません。現在実体調査を進めつつありますが、生活難を訴える人が多く、失明して働けないため奥さんが失対人夫をして辛うじて食べている家庭がすでに数件判明いたしました。またある家庭は家族四人が被爆し奥さんは失明し、ご主人も視力が弱く極度に疲労しやすく、家族全員が白血病と診断されているお気の毒な状態にあります。これらの方々は生きることと精いっぱい治療も自費では行えない現状であります。

大分県では法の執行はなされましたものの、予算が計上されますのは十月の県議会です。それまでは健康診断もうけられない現況で、病人は大変にあせっております。

す。

私たちは予算的処置を講ずることによって被爆者家庭の生活安定をはかることを、政府当局にとくに要望いたさねばなりません。また「医療法」を「原爆被爆者援護法」に発展させる必要がございます。これは軍人遺家族年金が定められ軍人恩給すら施行され、近くは引揚者給付金がいただける現在、まったく妥当な要求であると思いません。

② 「診察基準が不明確かつ不十分である」

例えば白血球四千以下、一万五千以上でないと治療の対象となっていないのでありますが（ちなみに白血球は普通六千〜八千であります）、このような絶望的状况になつてからからでは手遅れなのであります。根源的治療法のない現在では、早期発見、早期治療こそが何よりも大切なのでございます。また在来の病氣に対しても被爆者は普通の人とは違った反応をし、抵抗力がきわめて弱いのでありますから、原爆症以外の病氣にも適用してほしいのです。

③ 「適用の認定が非現実的かつ範囲が限定されている」

被爆者は四キロ以内および二週間以内に二キロ以内の地点に入った者、その他身体に原子爆弾の放射能の影響を受けるような事業に従事した者等が対象とされていますが、障害はたんに地域的のみで決定されるべきではなく、実質的に身体障害がある者にも適用範囲が広げられる必要があります。

④ 「手続きが煩雑である」

⑤ 「指定医療機関の枠をひろげ受診を簡易化する」

だいたい以上な点があげられました。他に注目すべき発言だったものを挙げます。

「救援運動と原水禁運動の関連、および今後の問題」（医学連・松崎俊夫氏）

原水場悪禁止運動の基礎は何か、救援運動の意味は何か、この両者はどう結びつくかということから考えてゆきたい。今日現在では、救つてやるのだというのではなく、この問題が人類的問題になつていくことを明確にとらえることが必要だ。被爆者分科会で、広島代表が「涙で訴えるときは過ぎた、原子戦争準備に反対し、この運動の先頭に立つてゆこう」という言葉を、力強く思つて聞いた。第一回大会のとき運動の基礎は救援にあるということだったが、第二回大会以来、禁止なくして救援はありえないということが明確化されて、禁止運動と救援運動の関連があきらかになり、大きな成果をあげている。医療法が施行されても、なお生活の問題が抜きにされている、私たちはこれから「援護法」を要求してゆこう。

ウルテル氏（ペルー、医者）

ラテン・アメリカ二十か国の人々は、被爆者の述べられたような苦しみを知りません。

日本の医学者はデータを出しているのですが、世界の多くの人々はこの真相を知らずにいます。これが問題であります。私はここに各国の科学者が国際的な会議をもち、互いに話し合い、その結論を世界に訴えるよう提案します。

「広島における被爆者の実体とその治療対策について」（原田東岷医師）

被爆者は健康そうに見えても、見えるだけの場合が多い。一度損傷した部分は死んで、残された部分で大車輪の活動することになる。こうした被爆者には十分な休養と休息が必要である。血液病は治らないし、放射能の影響は最近肺のガン種にまで及んでいる。アレルギー症も見られ、普通の人よりも刺激にたいして反応の仕方が違う。被爆者は在来の病気に対しても普通の人と違った反応をする。また健康保険程度の治療では治らない。根治療法は不可能である。ケロイドも元通りに直すことはできない。被爆者に対してより豊かな生活を保障すること、医療法をさらに修正、強化、持続すること、国際的な教化機関を設置すること、新しい放射能を人体に及ぼさないこと、言いかえると原水爆使用禁止なくしては被爆者の救済はありえない。

ひとまず議事が終わり、お昼休みになりました。

分散会は午後一時より四つに分かれ、私は第四分散会に出席いたしました。ここでは午前と同じテーマで午前中の各助言者による問題提起をもとに討論が行われました。

アメリカのデラマート氏よりのメッセージ

「日本に来て長崎・広島の被爆者たちと親しく話しあい、その方たちの苦しみや悩みを聞き大いに感銘をうけました。この人たちに私にすべてを捧げたいと心に誓った。私はこれ以上言葉がない。」

長崎医大白根氏

「米英ソ三国に禁止要求の働きかけはもちろんしなければなりません、三国以外の国に呼びかけて平和同盟（相互禁止協定？）を結ぶのも一つの方法だと思えます。理論や理屈で訴えるよりも、まず実情を知らない諸外国の国民に対しては、広島・長崎等の被爆写真を送った方が効果的ではないか」

広島

「『原爆の子』とか『生きていてよかった』とか映画ができていますが、私たち実際にあの惨状に遭った者には、映画に表現されているような生易しいものでは物足りません。映画技術も発達した今日現実に近い状態で映画に再現させていただいて、外国の方に見ていただきたいと思えます」

神奈川（労組代表）

「職場で、みんなで原水爆問題についてこれからどうすべきか話し合いました。私たちは昨年から被爆者救援のため毎月給料日に一円募金をやっています。今年はこれを

川崎市内中に広めようと話し合いました」

大阪代表

毎月一人が一円の労働者のカンパ運動に賛成します、医療法の問題点を原水協がもつと国民に知らせるようにしてもらいたい」。

東京

「原水爆禁止のために闘う十月都議会ですが、私は被爆者に対する最大の慰めであると信じます。そういう考えに立脚して一円募金運動その他の援助活動をそれぞれの団体が創意をもって行うのが良いと思います。戦災者なのですから、それを全国的な統一運動にするのはいかなものでしょうか。国には救援する義務があるのであり、社会保障その他の制度の要求を政府に突きつけるべきです」

被爆者救援運動をやっていて、被爆者だけが戦災者ではなく、日本国民全体が大なり小なり戦争ギセイ者だという声を聴くことがあります。日本国民全体が戦災者であることはもつともです。しかし被爆者は、現在健康者でも一生涯いつ発病するかわからない不安につきまといまわっております、体の中に時限爆弾をかかえているようなものであります。しかもその不安は一世代に止まらないということが普通の方々とは違うのでありますから、皆様の暖かいご理解がいただきたいのでございます。

このようにあなたは個人的感想を述べたあとに整然とした「第四分科会の集約」という文章を残しているのだが、長くなるので割愛する。

こうしてこの年の九月十五日最高顧問に木下郁県知事と県議会議長をいただき、山田都美子女医を会長として原爆被害者大分県協議会が発足し、趣意書を付した案内状が県内有志に送られたが、その事務局の所在が「県庁秘書課内 事務局長 辛島和子」と記されている。

趣意書の事業予告の一つに大分県ならではの特徴的な一つが有る。

「原子病にたいしては的確な治療法がないと云うことは、現在医学の常識となっているが別府市の「丘の湯」「田の湯」「柳湯」温泉が原子病にたいして効果があることが九州大温泉研究所（別府）の研究のよってわかり、現在全国各地より療養者が入湯にきている実情があり、「原爆被害者別府温泉療養所」の設置運動を実施することにいたしました。しかし設立初年度でもありますので、会員の会費のみでは協議会の運営にもこと欠くような次第でございますので、皆様方のご理解ある暖かいご援助によりまして、私どもの企画しておりますこのささやかな事業が遂行できますよう、よろしくご支援のほどお願申し上げま

す」。

利用者に全国の被爆者を想定したこの試みは一九六〇年二月に開所の運びとなり。現存している。まことに当時は全国的に耳目をひいた試みであり、このことが一九五九年ウィーンで行われた世界青年学生平和友好祭日本代表団の二人の日本被団協代表枠の一つが大分に割り振られた理由となったようである。あなたが選ばれてその団のなかで私たちは出会ったことになった。

二章 樺太の心的外傷

私は一九三一年に日本領だった樺太（サハリン）に生まれ、敗戦後ソ連占領下で暮らし一九四七年一月に引き揚げた。樺太について将来書かねばならないとは戦後一年たった夏には思ったのであるが、実現したのは一九八四年の『樺太よ遠く孤独』によってである。

表題にあるごとく樺太での幼少期から始めたのであるが、その最初の章で、在校していた中学校がソ連軍政下で再開されて、その最初の授業で原爆について教えられたことを述べつつ、敗戦と引揚げにつづく大事件が有ったかどうかを自問し、私は「有った」と自答。「それは原爆被爆者の女性との結婚だった」と記し、あなたを紹介した。

全六章の作品の前半は引揚げで終わり、後半では先ず引揚げ後が簡略に記述される。すなわち北海道の高校を終え、東京の大学のロシア文学科に進み、卒業の一九五七年に発足三年目の日本原水協の訪ソ使節団のロシア語要員に起用され訪ソ、その二年後の一九五九年にウィーンで行われた世界青年学生友好祭の日本代表団に加わって行き、帰国後結婚、生まれた長子が重症の心不全で生後四年して没したこと、その後その子を目標に妻との出会いから結婚に至る経緯を書こうと努めることになったこと、「樺太について書く」という十四歳の齢以来の課題が、この時点で「ヒロシマについて書く」という課題に変貌したと、しかしその「ヒロシマ」の物語はどんなに努力しても書けず、書ききれなかったのである。

そうこうするうちに樺太の故郷の村の小学校の同級生たちとの再会が生じ、それが重なりまた拡大し、北海道で一学年四十人弱の小学校の同級生の会が行われることになり、それに出席して、朝、同室雑魚寝の男子の友人たちが枕元で語る声で目覚めつつ、私は幼時に聞いていた、しかし久しく忘却していた二つの囁し言葉をこの上もなく鮮明・鮮烈に思い出したのだった。

細く長く南北に連なる樺太の地形を、チェーホフは生まれ故郷の南ロシアのタガンロー

クに多いチョウザメに似ているとしている。頭を北に垂直に北海道に向かって伸びる大魚の、上下の尾びれに相当する両小半島の東のほうを中知床半島というのであるが、その亜庭湾側に遠淵（とうぶち）という同名の、大きいので内海（うちうみ）と呼んでいた大きな鹹水湖^{かんすいこ}があり、そのほとりの村が、私が物心つき育ち、小学校を終えるまで住んだ村である。そこで薬品を主体とする商店だったわが家に露日の混血のお手伝いさんがいたのであり、その人に手を引かれ彼女の生家に行くことがあり、私は二歳年長のキヨミと交わって遊ぶようになり、やがてその子のはやし言葉を浴びるのに遭遇することになった。

これが契機となって「ヒロシマ」から初元のテーマである「樺太」に戻り、『樺太よ遠く孤独な』を書くことになって、私はこの出来事からは始めた。

△ロスケ（露助） ヨッポイマツ 鼻高ノッポV

幼かった私はこのヨッポイマツの意味が分からず、だれにも質すことなくやがて忘れさるのである。ただしそのことを書く私は、それは崩れたがロシア語で、正しくはヨッポイマーチと記されるのが良く、「汝のおつか（母）さんを犯せ」の三語からなる命令形の罵倒の言葉であることを知っており、そのことを記して先に進んだ。

強調されねばならないのは、忘却が甚だしく、敗戦後ソ連兵同士の会話からヨッポイマーチを覚え、日本語のバカヤローを意味すると正しく理解しながら、遠淵のヨッポイマツを思い出すことはなく、したがって互いの発音の類似に気づくこともなかったことである。

しかしながら四十歳に近づいて鮮明に回復できた記憶は、意識はされてはいなかったが無意識の領域に保存されていたようなのである。そして私が書く書かねばならないと思っていたのは、このヨッポイマツだったことである。「ヒロシマの物語」が書けなかったのもそのためだった。

大泊中学校の私の学年はソ連占領下で二度目の勤労働員で中知床半島先端のS村に送られ、塩蔵魚作りの労働に従事した。遠淵の南であり、同じ海岸であり、そこに在った私は日が重なるにつれて樺太について書かねばならないと思うようになったのであるが、その書かれるべき樺太の物語の主人公は私ではなかった、それは幼なじみの露日混血のキヨミだった。こうして私は願い出て休みをもらいソ連軍の輸送トラックに便乗して遠淵にいった。キヨミにまた一家の人々に会い、二泊してかえったのであるが、しかしそれでもヨッポイマツを思い出すことはなかった。

大泊では接収を免れるべく、移住してきたロシア人（今日私はユダヤ人だったと思っていた）に家の一部を譲って暮らしていた。技術者でわが家の居間でトルストイの『ВОЙНА И МИР』^{ワйна イ ミール}を読んでいて、それを見つつ私は引揚の不条理の思いがこみ上げてき、その思いが重なって、浴びせるのではなく、呟くようにしつつ「ヨッポイマーチ」を口にした。ことばの原義が原義なので、相手は驚愕し「ニエリジャー（いけない）」言

ったのだが、この私の行為は失われていたヨッポイマツの記憶の無意識の働きによるものだったと言えなくなかった。

村で私は、村山（母親の姓）の一家の人々はみなソ連領下に残るといふ印象をうけて去っていた。ところが引き揚げて数年してその消息が知られ、一家は分裂し、母親らは引き揚げたがキヨミは残ったということだった。これは大きな驚きであり、私は反射的にクロポトキンを思い出し、未読だったトルストイの『戦争と平和』を買いに書店に走った。それを読了した時、早大露文科への志望が確定した。

そこでの学生生活を書くのは小説としては三作目となる『微笑の沈黙』（1995）においてであり、そこで私は学科主任だった岡沢秀虎教授による特異な面接諮問について記している。先に学科では先輩になる作家小林勝氏の『断層地帯』があり、これに続くものである。

のっけから「君は共産党員でしょう」から始まり、「入学後共産党に入らず、政治運動はしない、と誓えますか」と問い詰められて私は窮した。場合により共産党に入ることもありうるからだった。私は即答を避け、露文科志望の理由を自問した。私の眼前に現れたのは『戦争と平和』を読むクロポトキンの姿だった。作品のロシア語の世界を知りたいからであり、それが自己確認できて、「誓約します」と言った。

私はヨッポイマーチを忘れずにいたが、どうやらうさん臭い言葉であるらしいとは感じていた。知っていること自体が威張れる言葉ではないようなのである。だからロシア語の先生に質すことはせず、俗語の豊富な辞書で調べていて、その真の意味を知った。しかしそのときも先行するヨッポイマツの方はその記憶は失われたままだった。

面接諮問の控室の教室で、「どんな質問がなされるのだろう」と想像し、「君はどうして露文科を志望したのですか」以外ではありえないと想定し、自分が樺太にかかわっての作家志望であることに気づき、それを話そうとすれば長くなるので、それについては秘め、「ロシア文学が好きですから」で十分と考え、その用意はして諮問室にはいったことを思い出す。のっけから「君は共産党員でしょう」と決めつけられたのは、私に何事かを秘めた人間の雰囲気があったためだと思われる。それを証拠立てる後日談がある。

数年後のある日、同級生間で面接諮問を回想して話が弾んだことがあった。私がそのことを打ち明けて話すと、高倉三郎がからからと笑いだし、「おれも（君について）そう思った」と言った。著名な日共党員文化人、この時期北京に亡命していて日共党学校の校長をしていた高倉テル氏の三男である。1952年は「武装闘争」条項をふくむ新しい徳田綱領が発表された年で、告白によると、彼は任務を与えられて受験していた。先手を打って「父は父、私は私、私はロシア語・文学に専心し、政治活動は一切いたしません」と宣言し、見事に合格した。しかし初対面同士の新入生全員が顔を揃えた教室で、彼がおこなったことは党員探しであった。党員であることを明かして自分に近づいてくる者がいるはずなのであって、候補としてまず最初に挙がったのが私だった、ということだった。

ところが待てど暮らせど私、すなわち瀬川高志は名乗ってこないのである。「それで、

どう考えたと思う」と彼は私に問い、「(党員だが)分派だからだ」と思った」と打ち明けたのであって、これには私が仰天した。共産党は分裂しており、徳田主流派の「分派」攻撃は激烈を極めていたのである。

米占領下で共産党は当初党勢を拡大したのであるが、スターリンのコミンフォルム批判によって分裂、非合法化され、朝鮮戦争が勃発し、徳田・野坂の主流派は宮本顕治その他の合法勢力を「分派」として攻撃していた。私はこの派の蔵原惟人氏の『文化革命』という本に学んでいたがその派に属していたわけではなかった。

宮本顕治の通称「国際派」、自称「統一会派」が力をもっていたのは文学運動、平和運動、学生運動の分野だった。全学連は占領軍のレッド・パージに反対し、朝鮮戦争下での1950年10月早大での闘争で山場を迎えた。全学連は全都学生の早大構内への集結を指令、吉田嘉清委員長の全学自治会は大学側に「レッド・パージを行わない」むねの誓約を迫り、大学本部に入り(後に不法侵入と告訴さる)、大学が機動隊を導入、排除を要請して数百名が逮捕収監され、学籍剥奪(除籍)、停学の処分が行われた。露文科の誓約諮問での強要はその翌年の年の入試から行われるようになったものである。

早大露文科は1931年、二度目のロシア遊学から帰った英文科教授片上伸によって創設され、片上は『中央公論』に立て続けに論文を寄稿、レーニンによる社会主義革命の積極的意義を説いた。これにもっとも強い影響をうけた代表的一人に当時松山高等学校生徒だった宮本顕治があり、その懇望により片上は松山で講演をしている。宮本が世に出たのは芥川を論じた『敗北の文学』であるが、第二作が『片上伸論』であることがその実情を示している。「宮本君は露文に来るつもりでした。片上さんが早稲田を去られたので、東大経済にいったのです」と岡沢秀虎は語っていた。また戦後早い時期の文章で宮本の片上論を賞賛し、「私はこれを超えようと思っている」と意気込んで記しているが、その後長く生きたが不可能と知って断念している。

戦前の日本共産党の運動は激しい弾圧により昭和八、九年ころにはほぼ終息に向かい、これと関連なしとはせずにドストエフスキー熱が起こり、新しくドストエフスキー全集が刊行され始め、揃ってその第一号がドストエフスキー特集である、複数の文学研究誌が発行された。それらにロシアの批評家・文芸学者のペレヴェルゼフの名が散見されるのであるが、そのすべてが一九八九年に拙訳で全訳が刊行された全十八章の『ドストエフスキーの創造』の任意の章を全体の説明抜きで翻訳したものであり、またそのすべてが岡沢による翻訳である。

これらまったく断片的な翻訳からこの著者の本領に気づき、戦後になってであるが「包括的」と評したひとに小田切秀雄氏がいる。まことに適切な評語なのであるが、それではドストエフスキーに関連して「包括的」であるとはどういうことであるか？

すでにペレヴェルゼフは『創造』初版(1912)の第一章「ロシア文学におけるゴリ」のうちで述べていた。「ドストエフスキーは様々な観点から研究され論議されてきた。しかしその大部分はドストエフスキーについて語るのではなく、ドストエフスキーに

「関連して」（かこつけて）語っているにすぎなかった。それらすべての批評において、ドストエフスキーは目的ではなく手段であり、彼のうちに求められているのは自分の思想の代弁者であって、特定の個人的傾向を備えた文学の作者ではない」。

ロシアの近代文学はプーシキンにより貴族文学として始まり、その弟子筋の作家にウクライナ人であるがロシア語で書いたゴーゴリがいた。しかし自身ペテルブルグで下っ端役人の生活をした体験があり、中間層（原語はメシチャーニン、小市民とも訳しうる）を描いた一連の作品で独自の世界を開拓、貴族ではなかったドストエフスキーはこれに学び、大成した作家なのである。

ゴーゴリの「狂人日記」はみじめな下っ端役人の日記の形式をとっている。その中で主人公は自分がイタリアの貴族の青年になったかのように空想し、己の現実から逃れようとするのであるが、リアルな現実との隔離はいかんともしがたく、やがて発狂し日記もまたた終えんする。対するに『鼻』がある。傲慢な傾向のある人物が、目覚めて朝、鼻が無くなっていくことに気づき衝撃をうける。間もなくその鼻が街を徘徊していることを知り、捉えて「元に戻ってくれ」と頼むが、断られ意気消沈し、しかし朝目覚めてそれが戻っていることに気づき悔悛する。この幻想的な作には作中作家ともいふべき床屋が登場しており、かねがね鼻がひときわ目立つ傲慢な客の一人にその鼻を切り落としたい衝動を覚えていた。ところが朝食のパンのなかからその鼻が現れて驚き、難を避けるべくネヴァ河に持って行き捨てる。いずれもファンタジーの世界の出来事である。

中間層の人物の心理は上昇志向と現状維持の間での対立抗争を特徴とするが、対立が激化して分裂（発狂）する場合があり、これを首尾よく描くためには、ゴーゴリにおいてそうであったように作中作家の導入が必要であり、ドストエフスキーはそれを踏襲している。またそれを成功裡になしえたと確信し、兄にあてた手紙で「私はゴーゴリを超えた天才となりました」と書き送った。しかしこれは完全な失敗作であり、作家自身程なくこれを認めることになる。それはやはり兄への手紙に残っているが、その何よりの証左は作家がその後長くこの言葉を避けて使用しなかったことである。作品の表題に掲げられたこの語が、本文中で最初に現れるのは、5章の末尾、上司の令嬢の誕生祝いの席からつまみ出されて帰路に就いた主人公ゴリャートキンが、後を付けてきた人物を、自宅で間近に見るようになった場面においてである。

早大で私淑した松尾隆（木寺黎二）との縁でベレヴェルゼフ『ドストエフスキーの創造』を全訳（1989）した後、2028年に私は『ドストエフスキーとは何か』の表紙に、その箇所を掲げた。

Ночной приятель его был некто иной, как он сам другой господин Голядкин
совершенно такой же, как он сам — одним словом, что на языке называется двойник
его во всех отношениях.

夜の友人は、外でもない彼自身であった、……ゴリヤトキン氏その人であった、もう一人の、しかし彼自身とまったく同じゴリヤトキン氏であった、——一口で言えば、あらゆる点で彼そっくりの、いわゆる分身だったのである。（新潮社全集の江川卓訳）

空想やファンタジーの世界では許されても、リアルな現実の世界では許されないことをドストエフスキーは実行しようとしたのであり、そのためにドヴォイニクの語を拡大解釈し、左右同質のものを外面にのみに限定し、内面（精神）においては互いに相反するものとして作品を書こうとしたのだった。ここには非常な無理があり、作品は失敗したのであるが、ゴーゴリの二作品の主人公にドヴォイニクを見出したのは慧眼であった。そしてドストエフスキー文学の本質がこの一語にあると見定めたことによってペレヴェルゼフは先行、同時代また以後のロシアと世界のすべての批評家・研究者の中にあつて唯一の人であり、傑出しているのである。

ペレヴェルゼフは2章「言葉と文体、および人物」において簡潔ながら的確にそれらを論じ定義している。「言葉の抒情性、莊重、調子の高揚、こうした言葉の音楽は、最後にいたって最初に戻る長複合文において、つまりその際の言葉の和音に、最良の表現となつて現れる」。3章「内容と構成（A）」では、叙述が普通の起承転結ではないこと、事件・出来事から始まり、それがどうして起こったかは、途中で明らかにされ、結末において発端に戻る」と説明される。すでに第一作『貧しき人々』がそうであった。一組の男女の文通が始まっている。どういうきっかけで始まったかは、途中で回想が入って明らかにされ、また同時に一方（女）には作中作家の役割が与えられていて、彼女は文通開始以前に己の過去を回想する物語をすでに作成していて、それが男に送られる。またその過去に内包さされていた事件によって彼女は町を去ることを余儀なくされ、つかの間の文通は終わり、小説は終了する。男はいまや受取人のいない手紙を終えるにあたって、手紙を書き送るく相手を探していたことを告白し、ようやく得られたそれが失われたことを悲しんでいる（ジェーヴシキンの原義は少女）。小説の観点からは、「発端に戻った」ということになるのである。この結末から出てきた第二作が、書くことによる慰めなどとは全く無縁、現実のなかで露骨（ゴリヤトキンの原義）に出世を求める人物の物語になったのは、当然の発展であった。

つづく4章「内容と構成」（B）においては。ドストエフスキーの文学がロシア文学において（だけではないが）真に新しいものであったこと強調するために、文体と内容の調和にふれ、マルクス主義者でありながら「新しい酒を古い革袋に盛ることはできない」（マタイ伝九章17）を掲げ、詳論し、最後に再びこの言葉を掲げて、作中人物の分析に向かっている。

私は先に、遅れた最初の作品である『樺太よ遠く孤独な』に触れ、その中で原爆被爆者の妻に触れていることを述べた。またその延長として第二作は『ヒロシマまでの長い道』というもので、彼女との出会いから結婚にいたる経緯を物語るものになった。樺太から一

気にヒロシマに到着したような作品で、その完成後に私淑した松尾教授の遺構中にドストエフスキー関連の文書が発見され、私が調べることになり、一年を要してペレヴェルゼフの最初の論文『ドストエフスキーの創造』の試訳であることを突き止め、完訳し上梓した（1989）。

樺太の本では、幼なじみの露日混血の人々にふれて書いただけではなかった。「サハリンを発見したのは日本人が最初であり、日本人が最初に南サハリンを領有したのである」という文言を含む一連のチェーホフ『サハリン島』からの文章を冒頭に掲げており、また作品の後半ではこの問題の歴史的考察もおこなった。また日本とサハリンに分かれて生きる兄弟姉妹が再会できるためには、崩壊に近いソ連の変化が必要であることをアマリクの「ソ連は1984年まで生き延びるか」（1996）を援用して述べた。ゴルバチョフの登場はその翌年であり、1986年にはチェルノブイリの事故があり、1989年所屬していた平和事務所の仕事でエストニアの被爆者と医師を招いて広島大原医研に送り、翌年その見返りで招かれることになり、ベルリンに立ち寄ってバルト三国を廻り、ミンスク、キエフで被爆者および医師たちと交わって帰国した。またその年に私に親しい大泊と遠淵にも人が入り、在サハリン邦人一時帰国促進会の努力でかれらの一時帰国が実現し、私はわが原点であったキヨミらとの再会を果たした。私は彼にハロスケ ヨッポイマツ 鼻高ノツポVを覚えていかどうかを尋ねなかった。忘れてはいるはずのことは明白だったからだ。私がロシア語で尋ねたのは、私とその記憶を回復した瞬間、ただちに連続して耳に聞こえた、今ひとつの私への囁き言葉だった。

△タボ たん瘤 十二瘤 十二になっても 瘤だらけ▽

私は幼時、タカシの名の名付け親であった父が「ター坊」と呼んでいて、その影響で近所では「タボちゃん」あるいは簡略に「タボ」と呼ばれていた。キヨミと親しく、いつもともにいるので、打ちのめしてやりたい、という意味の私に浴びせられたはやし言葉であり、それが度重なり、私は身の安全のためキヨミを離れたのである。五歳の選択だった。と同時に私は二つのはやし言葉をわが記憶から抹殺したようなのであり、しかしこれは無意識のなかに残っていて私を動かしていたのだった。

私は低くではあったがはやされた当時のように抑揚をつけて言ってみた。「覚えているかい」と問うた。相手は微笑んで小さくうなずいた。どうやら覚えていたようだった。大きな心的傷害による記憶喪失を抱えながら私は樺太について書こうとしてきた者であった。そしてその樺太とは、狭義の意味では、二泊三日の遠淵行の後、歩いて半島の南を目指し、最後に岡の上から見た湖の青い広がりと対岸の山々のたたずまいであった。それらが掲示した永遠と絶対、そのようなものとしての真実だった。それらは記憶に焼き付いているだけではなく、つねに眼前に揺曳するものとして存在し、私を支配し導いた。

薬品店主だった父が上京し、慶応大医学部内に置かれていたという満州国政府の興亜医

大学進学後も私はこの言葉を忘れなかった。しかしその私は数年後には共產党に入っている。分裂していた党の徳田・野坂の主流派の党であり、しかし一年後に活動を離れてレオノフの読書に集中、さらに一年後第六回全国協議会の党の統一に坎する決議に基づき活動に戻り、指導部のメンバーになり、宮本顕治、蔵原惟人と昵懇の松尾隆教授に就いた。樺太の本ではそのことも簡潔には記した。

大学入学後ソビエト文学を読むようになって最初に熱中したのは詩人のマヤコフスキーである。レーニンを読む前にマヤコフスキーの長編叙事詩、「ロシア共産党に捧げる」を副題にもつ「ヴラジーミル・イリイチ・レーニン」によって1917年の社会主義革命を理解し肯定した。1953年十月早稲田祭での所属する文化団体ソヴィエト研究会は「ロシア十月革命記念祭」であり、この叙事詩の抜粋を三人がロシア語原詩と邦訳を朗読し、ソ連映画『十月のレーニン』を上映して大隅講堂を満席にした。発案者は私であり、ロシア婦人の講師ブゾヴァによる三人の発音指導には終始立ち会った。拙訳を掲げる。

今だ。それは激しい悲しみが、自覚的な確かな痛みに代わったからだ。

ていてはならない。レーニンは今も生きている。だれよりも生きている。ぼくらの知恵

力、そして武器なのだ。

未知の大海であったロシア語にはある程度目安がついていた。またそれだけをやっても樺太を書くことに到達しない（のではなからうか）と思われた。横田瑞穂助教授からは「君は大学に残る人なのだから、共産党には入らないように。もしもの場合は、私に相談してくれたまえ」と言われていたにもかかわらず、相談することなく共産党細胞に入った。

自治会が群馬県妙義の米軍演習地化反対闘争に係わっていて、私はそれに赴いた。

一年後には細胞内の細胞だった中核自衛隊による「総点検運動」なるものが開始され、「党内に潜入した裏切り者、スパイを摘発せよ」ということだったが、それらしきものは見当たらず、一人が関係する労働組合の女性とのトラブルで査問をうけ、それが厳しすぎると言って、一人の女子党員が会議に出なくなった。暗然としながら帰路立ち寄った書店で、表紙の横帯に「ドストエフスキーの悪しき影響を克服した」と謳われているレオーノフの四幕戯曲『襲来』を手にするようになる。

そのように誤った目で見られている人がこの国にはどれほどいることでしょう。

目に入ったのは副人物の共産党員が発するこの言葉だった。私は買って帰り一読、翌日ソ連書籍の専門店に赴いて、六巻選集を求め、細胞会議への出席は止めた。

共産党は1950年のコミンフォルムによる批判以来分裂しており、ソ研は徳田球一の主流派が多かった。また私は第二語学の担任だった松尾隆教授が同派の指導者宮本顕治氏の非転向を賞賛しているのを知っていた。また同派で宮本氏にとっても先輩の蔵原惟人氏の極左冒険主義批判の書『文化革命』の影響を受けていた。したがって入るべき細胞でなかったのに入ってしまったのであるが、これも失われていたヨッポイマツの記憶のためだったと思われる。私はヨッポイマーチの意味が突き止められたのに、樺太が書けるようにならないことにいら立っていた。私は「失われていた記憶（の回復）」を求めて生きていたのである。

△総点検運動△とは、当時党上層で行われていた主流派の極左冒険主義の批判と統一に対する中核自衛隊からの逆流・抵抗であった。これが彼らの敗北で決着がつき、翌1955年7月に「六全協」の決議が発表される。細胞指導部は総崩れになり、分派呼ばわりされていた統一会派の人々が晴れて復帰する。すなわち松尾隆教授や50年の反レッド・パージ闘争を闘い、逮捕され裁判にふせられ、勝訴していたそれに連なるひとびとであった。私も活動に復帰し、この派に連なることになった。

翌1956年ソ連共産党が二〇回党大会で「異なった社会体制の平和共存」を打ち出し、スターリン批判を行った。新しい時代の到来であり、私は喜んだ。

これは私がもっともしばしば松尾教授に接した時期であり、教授は多くのことを話して

くれたが、教授はペレヴェルゼフについては一言も話していない。なぜであったかは、拙訳書の解説でまたその後の一連の評論でも言及してきたが、この人が支持者たちともども二十年代末にソ連文学界から追放されたからである。復権は1982年であり、しかし全面的ではなかった。

自著『ドストエフスキー文献考』（1936）で「画期的名著」と言って紹介し、またそれゆえに戦時下にあつて翻訳に従事しながら完訳せずに放棄し、スターリン批判があつた1956年12月49歳で亡くなった。それがどうしてであつたかは、残された松尾隆遺訳稿の冒頭の章が自身によつて破り捨て去られ、存在しなかったことから明らかになる。知られているように『悪霊』には編集者の反対により、単行本には収録されず、ペレヴェルゼフ自身そのことを知らずに執筆し、革命後に文庫で「発見」、自身が公開した章がある。「スタヴローギンの告白」である。これにより『悪霊』は明快となつて、1922年生誕百年祭で基調報告でもあつた「ドストエフスキーと革命」という講演をおこない、革命後の自著の新版に「（序文に代えて）」と括弧して注記し、冒頭に据えた。拙訳書ではこれを掉尾に置いている。

待望の革命の現実生きながら、すでに現われ始めていた否定面に直面し、ペレヴェルゼフはドストエフスキーがこれを予見していたことに驚いて述べている。

「革命のうちにはなにやら悪魔的に狡猾なもの、悪魔的に悪賢いものがあるのだ。革命の恐怖は、その道徳否定、流血性、残忍性にあるのではない。それがもたらす金塊が悪魔の財宝であつて、それを獲得するためにこそ残虐の限りを尽くしたにもかかわらず、やがてそれが陶器の破片と形骸化することのうちにあるのだ。主人公たちは革命的誘惑を悪魔的教唆として呪いつつ、革命の抱擁から反動のそれへと身を転ずる。問題はドストエフスキーが知っていた革命ロシアが小市民のロシアであつたことである。小市民は同時に革命的でもあり、反動的でもある。小市民には福音書のいちじくの樹がそうであるように呪いのようなものがかけられているのだ。ドストエフスキーはこの悲劇を「悪魔のヴォードヴィル」と呼びたかつたのである」。「小市民的勢力がとくに強く、プロレタリアートの波濤がこの勢力に強く呑み込まれた現下においてこそ、ドストエフスキーを想起し、革命心理に捧げられた彼の洞察に満ちた深刻な頁を再読することは、まこと時宜に適つたことといえよう」

その後の「マルクス主義文芸学の必要な前提」における「政治が文学にとって代わることはできないのは、文学が政治にとって代ることが出来ないのと同じである。双方に必要なのは相互批判と協力である」の主張とともに、「ドストエフスキーと革命」の結びのこの言葉はスターリン派の攻撃をうけ、ペレヴェルゼフは「失脚」し、生地ハリコフの大学に蟄居、『古代ロシアの文学』の執筆に専念、1968年に他界している。ハリコフはロシア人が多いウクライナの第二の都市であり、今日のウクライナ軍事抗争ではハリキューーの名で登場しており、私はそのことおも念頭に置いて執筆している。

長くソ連・ロシアに係わって生き暮らしてきたのだった。1959年の妻との出会いと語らいの最初は伏木を発したソ連客船に始まり、ソ連を通過する列車のなかにおいてだった。後にダークダックスが歌って広く知られることになったソ連歌曲に「モスクワ郊外の夕べ」があるが、ソ連ではこの年に発売され、わが被爆者代表女性は帰路にモスクワで貰うか買うかしてきて、結婚後もしばしばプレーヤーにかけていた。長子が聞き覚えてうたうようになり、私が発音矯正をした。大分の家では「さすが」と褒められ、得意になって繰り返し、ハヴェチエラー坊やVの愛称をうけることになった。歌の最後がハポドモスコヴヌイエ ヴェチエラー(モスクワ郊外の夕べ)のリフレインで終わるためであった。

私と妻との出会と結びつきで重要な役割を果たしたのは、私がその二年前に要因となつたのは日本原水協から出されてソ連に行っており、一方彼女は、一五〇人の団員のほぼ全員ともども外国ははじめてだったことである。私ひとり、当時のことで南回り、ヨーロッパ経由でソ連に入り、招待によりモンゴルと中国に寄り、香港に出て帰る旅をしていた。日ソ国交回復宣言からまだ一年とは経っていない時期のことであった。

一方で「政治運動をしない」誓約を要求する主任教授がいた学科では、新入学の一年生の第一語学のロシア語の最初の授業では、担任の横田瑞穂助教授はその最初の授業で「これからロシア語を教える。一生懸命勉強してもらいたい。しかしロシア語を習得したからといってそれを生かせる職には就けない。卒業時にそうした職を探してくれとは言わないでもらいたい」と述べた。それが、国交回復宣言がなされて変り始めていた。しかしまだ端緒の段階にあった。

松尾教授は1950年4月に露文科教授に迎えられ、しかしすぐに持病の心筋梗塞に倒れ、自身がパージ対象者の一人にされているレッド・パージに反対する闘争では、学生には病床から檄文を発していた。1952年に教壇に復帰、しかし杖を突いて登校する状態で、いくつもの学内外での演説、講演をこなしながら前年の1956年の12月に亡くなり、私は大学院への進学を断念しかけていた。その常任理事を務めていた日本平和委員会と日本ロシア文学会双方の共催という名目で大隅小講堂が借りられ「平和葬」の名で行われた葬儀であったが、仕切ったのは原水協事務局次長の吉田嘉清およびこれと一体の日本平和委員会事務局員の横山浩二(仏文)だった。つまり平和委員会主導のもので、露文科の先生たちは全員出席していたが、送辞は述べなかったと記憶する。注目され記録に残っているのは宮本顕治、古在由重など学外者だった。その露文科学学生を代表して読んだのが私、瀬川高志であり、全学連を代表して委員長の香山健一(東大)が長文の送辞を読んでいる。

1950年共産党が分裂し、全学連、東大、早大が統一一派に属した後、宮本顕治は復党して六全協への道をさぐり、これに東大の上田耕一郎、不破哲三兄弟が従い、他の多数は六全協後に「復党」、望んで復党しなかった人々もあった。1999年に東大、早大が戦後学生運動を総括する季刊誌の製作刊行を始め、相互に寄稿し交流することが重なり、吉田嘉清と私は招かれ年に一度の東大一九会の集まりに出席した。これがどうして生じた

かという、東大と早大の双方にかかわる一つの事件があったためである。

事件の性格上仲間だけに秘められていたこの問題を初めて公開したのは東大の安東仁兵衛であり、その『日本共産党私記』において、自身も参加した全学連委員長武井昭夫の命令による不破哲三を含む一高出身三名の党員のスパイ容疑に基づくリンチ事件である。発端は早稲田にあり、校内で捕獲され、警視庁勤務を「自白」した私服警官Aが、尋問に対して両大学細胞内の内通者の名を挙げたことにある。その中には早大の吉田嘉清らの名もあったのであるが、早大ではあまりの馬鹿々々しさに一笑に付された。しかしこれが早大からの全学連執行役員の口から委員長武井昭夫（東大）に、本富士署への内通者として不破ら三人の名があげられたことが伝えられると、東大では瞬時に凄惨な事件に発展した。武井は細胞総会を招集し、三人に釈明の余地を与えず、一説によるとあたかもその機会を待っていたかのように、いきなり三人を殴打し、全員に従うように求め、安東を含む全員が従ったのだった。一人が遺書を残して自殺をはかり（未遂）、遺書が宮本顕治に届けられ、宮本が一読、無罪と判定、リンチは中止となった。しかし東大の国際派細胞はこれによって内部崩壊し、以後統一を回復せず、それは六全協後も続くこととなった。長い年月の後、雑誌「一九会文集」発行で集いつつ、これには不破ら日共系の人々、および党に復帰はしたが宮本方針には従わず除名処分を受けた武井昭夫のグループは参加せず、この二つ以外の多くが参加していてその中心人物の一人に、六全協では復帰せずにいた辻井喬（堤清二）がいた。1950年10月14日には早大構内にあり、警官隊の侵入に際してはイチヨウの樹によじ登り逮捕を免れたと自著に記している人である。

早稲田の場合は1985年の文集『松尾隆』の継続発展であった。すなわち松尾隆の存命時一体であった統一会派は1984年日本原水協の「分裂」によって消滅していた。吉田は追われて去り、これを擁護して古在由重氏もまた党を離れた。その意味するものを探るべく没後三十年の年にこれが企画実行され、あわせて集会がもたれたのだった。東大と異なるのは、学内者間の対立はそんなに激しくはなく、党書記局員である人々を除いては党員である人々も参加したことだった。

『早稲田・1950年・史料と証言』がその雑誌名であるが、1号に私は「文集『松尾隆』後」を執筆している。ペレヴェルゼフ『ドストエフスキーの創造』を出した後、私は教授の生地である長崎県島原半島の先端北有馬町信蔵寺を訪ねた。島原の乱の舞台である原城跡を望む真宗の寺である。その後2〜5号に四回にわたり「松尾隆」223枚を連載した。

戦前のペンネーム木寺黎二の最後を飾るのは昭和十年代の雑誌『早稲田文学』誌上の文芸評論であり、その基調は日本文芸報国会に向かう文壇の流れの批判であり、「崩壊」したプロレタリア文学の擁護であった。潤一郎の実弟である英文科教授谷崎清二の編集になる雑誌そのものの性格がそうであった。露文科は1934年に閉鎖されるが「早大露文科の閉鎖を惜しむ」の中野重治の文が掲載されており、抵抗の姿勢は貫かれていた。

それはまたソ連でスターリン体制が成立していた時代でもあった。ペレヴェルゼフはス

ターリン派に抗すべく最後の論文「ロシア文芸批評におけるドストエフスキー」を発表しているが、これは『創造』の最終の18章「わが結語 批評に現れた両極偏向の二つの代表的例―ミハイロフスキーとメレジコフスキーの場合 ドブローボフの真正な批評「生きていく人への呼びかけ」をより拡張して論じたものであり、『創造』初版の1912年には帝政との関係で避けられていたマルク主義的用語がスターリン派との闘争に用いられており、「ただマルクス主義のみがドストエフスキーを正しく評価しえたのである」と結んでおり、『創造』における自説を徹底的に擁護したものであった。

ドストエフスキー批評には様々なものがあるが、大別すると二つに分類でき、それはすでに革命前に現れていた。ミハイロフスキーとメレジコフスキーがそれであり、前者はナロードニキの卑俗社会主義的立場の、また後者は帝政Ⅱロシア正教擁護の立場からのものであった。しかし両者はドストエフスキー作品の中心にたつ主人公がドヴォイニク、すなわち二重体の人間であることを見ていないことでは同一であり、ともに一面的観念的なのである。スターリン時代は前者が支配的であり、ソ連崩壊後は後者が圧倒的に優勢となったが、これはかつての反革命の復活でもある。

もっともこのいずれにも属さぬ変種もまた発生する。二十一世紀に入って日本に発生した「父殺しの文学」と言った主張などはこれであり、自身が父に殺意を抱いたことがあることをもって、その根拠とした愚論であった。百歩譲って『カラマーゾフの兄弟』一作はそうであるとしても、しかし全体ではないのであって、包括性には欠けるのである。私に『松尾隆』の結びは次のようなものだった。

「その庭からはキリシタン殉教の地、原城跡が見える。教授の西欧への憧憬の根底にはこれがあつた。しかしその人は同時に背後に親鸞の和讃を聞いていた人だった。そして西欧に深くのめり込みながら、西欧と世界に対して発信するものが日本に無いことを残念に思っていたと思われる。仏教には歴史哲学が欠落しているのである。ビキニ以後の原水爆禁止運動に欣喜雀躍しておられたが、それはこの運動において日本人が史上初めて己を人類の名で語り始めていたからだつた。

相克として存在していたマルクス（その他）とドストエフスキー（その他）は、また西欧と日本は、ヒロシマ・ナガサキを考える過程で、相互に溶解するのを教授は感じていたのではなからうか。人類の歴史はヒロシマ・ナガサキをもってその前史をおえ、私たちが生きている現在は、後史にあたる時代、「ヒロシマ後」とよばれるに相応しい時代である。ビキニ後の原水禁運動の高揚に遭遇して、「この運動は日本のコミュニケーションですのう」と島原言葉で語っていたとき、教授はコミュニケーション（すなわち共産主義―後注）をも新しくとらえなおすヒロシマ黙示録、その哲学の樹立とでもいうべきものを目指していたのである」。

拙稿のこの箇所を2000年にたいへん賞賛してくれ、その後交渉があつた人に1978年にすでに『原爆・原発―絶対否定の理論と運動』（現代の理論社）を上梓していた池山重朗氏（1931～2007、東教大）があつた。元原水協事務局員で原水禁国民会

議を立ち上げた人である。表題に原発が入っており、原発をも否定するもので、2012年つまり11年のフクシマ後に明石書店から協力者の解説が加えられて再版されている。しかし、原発を、事故を起こしたウラン軽水炉のみで捉えている、私とは実はここが異なるのであって、この認識の最初は早く、ペレヴェルゼフ訳書刊行の1989年から、詳しくは公刊されているという意味では「最新刊」の『トリウム原子炉革命——古川和男・ヒロシマからの出発』（2014）に譲るが、絶対安全な原発、正しくは核エネルギーの存在を知っていたからである。しかしそれが確信に到達するまでには永い道程を経なければならなかったのであって、私はもうすこしドストエフスキーに係わることとなる。というのもドストエフスキーの正しい把握にはマルクスのそれが書かせぬからである。

その膨大な作品の中心に立つのは二重人であった。しかし初期作品群のプリミチヴな存在から、己の二重性を哲学的に考察する『地下生活者の手記』に発展し、それを社会関係に適用する『罪と罰』のラスコーリニコフ、そして唯一絶対神の有無という西欧精神の根幹にある世界問題に到達するイワン・カラマゾフがこの系列に属する。

しかしながら二重人たちが我意と温順の間で逡巡するだけなのに対し、その前者に断固として立つものもあるわけで、その初期の現われが『家主の家』の犯罪者の商人ムーリンであった。しかし流刑により作家はそこで様々な犯罪者と同じに接することになり、流刑後の作品『死の家の記録』で記録した。またそれにすこし先立って『虐げられし人々』のヴァルコフスキーにおいて思索する我意の人——「すべてはくだらない、くだらないのは独り、わたし自身だ」と広言し、文学を女々しい所業と蔑視——を創造した。この発展形がピョートル・ベルホヴェンスキーで「自由・平等・社会主義」を掲げ、同志を殺害し、ひとり逃亡する。対するに体制の打倒などは小事であると考えたのが「思想家」であるキリーロフだった。彼は、唯一絶対神が存在するのはそれが必要とする人間がいるからだ、と考えた。そんな存在よりも人間（己個人）は上位にあるのであり、それを証明するには自殺による以外にないという認識に到達した。彼は「神なし」の新しい宗教のキリストになる道を選択した。自殺を選択したのは、伝説のキリストのように磔刑にしてくれるものたちがいなかったからだだった。

これら「我意の人」とは表面的には真逆なのが、やはり原型はゴゴリで『外套』のドストエフスキー的發展である『弱い心』のシムコフという人物である。虐待され滅びるためだけに生まれてきて死ぬ哀れなゴゴリの人物よりも進んで、このタイプに随伴する性的虚弱と不能の問題を併せて提起した。これは発展し、『永遠の良人』ではまだ言葉として明示されていなかったのであるが、『白痴』のムイシキンでは不能であることが明白に告白されている。これはあらゆる宗教がもつ修道僧・修道女に発展する問題であり、『未成年』の修道者を経て、この唯一絶対神信仰の理論家ゾシマ僧正の出現となる。カラマゾフ家の三男アレクセイはこの人物を敬愛する修道士であるが、ゾシマは死後遺体から聖者にはありえない腐臭を発して、アレクセイは動揺する。ここにはドストエフスキーの深いリアリズムがある。

『黙示録（アポカプリス）』は全文がユダヤの秘密の表記法ゲマトリーナで執筆されている。竜と獣が登場、獣の名が666の数詞名で獣が登場しており、一九世紀になってブルーノ・パウアーによって皇帝ネロを指すと解読された。キリスト教弾圧で有名な皇帝であり、ラスコーリニコフの名・父称・姓がそれぞれロシア文字でPであり、これが数字の6と似ていることをもってこの人物をアンチ・キリストと結論して立論した人に江川卓がいる（新潮社『謎解き「罪と罰」」）。ドストエフスキー作品をだしにした単なる遊びにすぎないのであるが、これを「天才的」と誤認して模倣する者まで現われ、日本のドストエフスキー把握に大きな歪みをもたらした。

銘記されねばならないのは、マルクスがパウアーの業績を継承し、666をただ単にNeon Kesarを指すだけではなく、その名を刻印したローマ貨幣であり、「獣」と並べられている「竜」が商品を指すと解読したことである。すなわち同書の当該箇所は人類史における貨幣の発生について記していることを発見し、『資本論』の基礎に据えたのである。マルクス主義とは『ヨハネ黙示録』の止揚であり、そこに記されている人類の到達点としての「新しいエルサレム」をマルクスは「コミュニズム」と書きかえたのだった。日本の傑出した『資本論』学者平田清明氏の著作に教示され、『ドストエフスキーとは何か』（2008）で私はそのように記した。

樺太の本に登場するロシアの作家はひとりチェーホフである。彼はロシア側の発見者の名を冠してブッセ湾の名で幕末期のわが遠淵についても、そこでの日本漁民とロシア部隊の交わりを日本ひいきで記している。ソ連崩壊後に登場したサハリン学者でそのチェーホフに多大に依拠しながら、その名を秘している記述に遭遇し、シーボルトの名著『日本の露訳を調べる必要を覚えた。幸いにそれは神奈川大図書館の貴重書庫にあって披見できたが、国家による検閲のために制作されたものの一冊だった。「何のための検閲か？」といぶかりつつ丹念に読んでゆくと、サハリンが島であることの発見にかんする間宮林蔵以下の日本探検家の業績が完全全面的に削除されているではないか！

ロシア側の探検家クルゼンシテルンはサハリンが大陸と連なる半島であるとする報告を国に出していたのであるが、招聘により訪露したシーボルトが携行した間宮林蔵作成の地図を提示されると即座にそれを正しいと認め、手紙にも記した、その事実が幕末には日本にも伝えられて以来日本では広く知られていた。ところがロシアでは帝国の方針として、それを隠べいする処置が講じられていたのである。これが分かるとその後の日露の関係史が明瞭に見えてくるのであって、私はその立場で『日露領土紛争の根源』を執筆、製本に先立ってサンクトペテルブルグの図書館に飛んだが、それは見本本と実際に出版された本の異同を調べるためだったが、本は一般向けには出版されていなかった。拙訳書はすでに校正済みだった後記にこれを追記して刊行されている。

私がこの書に立ち帰るのは、ソ連崩壊後三十年を経て起こった「ウクライナ問題」を考えたいからである。

三章 ロシア語とその文学

2021年ロシアによるウクライナ攻撃が起こって、世界のいわゆる先進諸国の間でロシア批判が強まり、日本でもマスコミがこれ一色に染まった状況で、注目されることになった著作家に1951年フランス生まれのエマニュエル・トッド氏がいる。私が驚いたのは、邦訳は『最後の転落』（1976）という「ソ連崩壊を予言した」著作によって世に出たひとであるということ、その邦訳書（2013）から読み始め、「最初」ということでは、この人は「最初」ではなくて、その書に二度二わたって署名が挙げられているロシアのアマリクの「ソ連は1984年まで生き延びるか」が最初であることだった。アマリクのこの論文は1969年英誌『サーヴェイ』に発表され、日本では雑誌『自由』（1970・5）に訳載され私は購入して読んでいた。以来、はたしてそのようになるかどうかを考えながらソ連貿易（と若干中国貿易）に従事して暮らした。

職業が職業なので、そこから去る準備なしには決断できなかったので遅れ、アマリクの論文を結論的に援用して1984年に『樺太よ遠く孤独な』を出したのだが、当時はトッドの存在は知らなかったのである。

アマリクは中ソ戦争を必至とみて、これが、ソ連が抱える内外の矛盾を激化させると予測していたが、その通りにはならなかった。代わって崩壊の原因となったのは1987年のチェルノブイリ原発事故である。事故そのものとともにゴルバチョフのクレムリンがこれを隠ぺいしたことが内外の矛盾を露呈させたのである。

チェルノブイリは苦艾（にがよもぎ）を意味し、外でもなく「黙示録」に人間の愚かさとして傲慢の神からの懲罰の意味でこの語が登場していることが、偶然の一致であるにもかかわらず、人心の動揺を惹起した。原子力関係がその当初から国家権力と強力に結びついており、秘密的な特権階層を形成していたことも作用した。ほころびはチェコから始まり、やがてベルリンの壁の崩壊に至った。

私は東京で大学生活を終え、原水禁運動と平和運動に係わって二度ソ連・東欧に行き、結婚後会社員になった人間だった。日本原水協とはそれ以来直接的関係を断っていた者だった。しかし無関心だったのではなく、また妻は声がかかればその行事に参加していた。たとえば第五福竜丸の船体が打ち捨てられていたのを保存する運動で会合が行われた際には出席し、帰路乗り換えの代々木駅で別れるまで、「安井先生の奥さんと一緒だったわ」と語り、それを感慨深く聞いていた。私は顔を合わすことが出来ないと観念している方だったからである。

松尾隆教授の兄弟子にして学部学科は異なったが先輩であり、私を起用した存在である吉田嘉清氏にも長く会ってはいなかったが、路線の対立でその人たちが共産党と日本原水

協を追われ、平和事務所なる団体を立ち上げた。代表となったのは日本被団協結成当時から昵懇、結婚当初は一時その会社で働かせてもらっていたキリスト教団体の行宗一（はじめ）氏でその誘いがあった、妻が健康上の理由で参加できず、私が代るような形で参加することになった。

その会に参加すれば安井夫人にお会いするであろうことはわかっていた。長くお会いできぬと思ってきた方である。原因は私が妻と結婚したことにあった。1960年1月結婚式で大分に向かう直前、偶然事務局でお会いして「結婚することになりました」と言い、「相手は」と言いかけると、「存じています」と遮られ、「姉さん女房ね」と軽蔑的に吐き捨てられた。

息女は父のレーニン平和賞の縁でフルシチョフじかの口利きでモスクワ大留学を目指し、そのむねを私は直接に聞いていた。1958年の夏の八月、早大の新築の別館大講堂で原水禁第四回世界大会があり、その初日の安井理事長の基調演説があった午前の部が終わりみなが外に出かけた途中だった。母堂と同伴の彼女から「モスクワからの返事待ちなのです」と声を掛けられ、「良いことです。ぜひ実現なさい」と励まし、夫人は「瀬川さん、そんなに唆さないください。わたしは困っている」と言われた。私は、私自身がモスクワ留学を目指していることはすでに話していた。翌59年息女は留学が確定し、プラハ経由でモスクワに入り、ウィーン友好祭の団に加わった私はモスクワで顔をあわせウィーンに向かっている。しかし私は予定の留学を断念して帰り、団の中で出会った被爆者女性と結婚していた。

ロシア語の世界は狭い世界であって、モスクワ留学後の息女の話は聞くともなく聴いていた。

やがてモスクワ留学中のイタリア人の留学生と結婚したのであるが、まだその以前だった年のことである。劇団民芸のチェーホフ劇を観にいつて幕間にロビーに出ると吉田嘉清と顔が合い、「おい、安井先生が来ているぞ」と言われ、見ると近くに氏の顔があり、近づいて挨拶した。すると斜め後ろから「長瀬さん！」の鋭く強い声があつて振り向くと息女だった。「どうしているのですか」と問われ、勤務する会社の名を答え、ふと見ると彼女の後ろには夫人の顔があり、その両眼は厳しく私を咎めていた。後に私が恐怖なしには回想できなかったお顔である。以来私は日本原水協事務局にはまったく出向かわなくなった。

モスクワで結婚し、夫君とともに帰国して暮らしていると聞き、そしてまた芝居を観に行っていて、翌朝出張をするので友人たちと別れて帰ったところ、友人たちがその後近くのすし屋で息女夫妻と顔を合わせたことを知り、会わずにすんで助かったと思った。そしてまた。少したって、イタリア人が離婚して日本を去ったと聞くのであるが、1985年平和事務所の忘年会でお会いた時にはまだその前だったと思われる。すこし遅れて到着し、私のまん前のテーブル席についた夫人に私は「お久しぶりです」と一礼した。二十年以上お会いしていなかったのである。夫人は怪訝そうに私を見つめ、ややあつて

「思い出しました」と言われた。

人前もあることであり、この時はそれ以上言葉を交わすことはなかったが、私が樺太の本を贈ると、すぐに上梓されたばかりの自身の歌集を送ってくださった。それからの関係は良好であり愛想がよかった。原水協は世界大会の際に圧倒的に英語であったが、大量に語学要員を公募し使用していた。その同窓会のようなものが持たれて、その時にお会いしたが「ご本はパラパラと読んでいます」と笑顔だった。

樺太を表題に掲げる物語に、妻として原爆被爆者が登場していることを「意外」として驚いた人は多かった。北海道新聞の評は豊原中学校の出身で文学賞の候補になった人だったが、批評に注記していたし、お会いした際にもそれを表明した。逆な場合もあって樺太師範学校教授であり、樺太では学校教育の教科書として使われていた『樺太の歴史』の著者である西鶴定家氏の場合がそうである。著書は戦後も東京の歴史専門の出版社から再版されており、執筆にさいしては目を通しており、謹呈もしていた。旧樺太庁の東京事務所の延長であり、政府からも公認されていた団体に樺太連盟という引揚者たちの親睦交流団体があり、その存在は知ってはいたが、私が加入したのは拙著の賞賛的紹介記事がでたからであった。その新年会でお会いし、「ほとんどの樺太の本は樺太が分かっている人には分かるが、そうでない人には分からない。あなたの本は分からない人にも分かるように書いてあり、そこが良い」と言われた。妻と同じ大分県の生まれで、対岸の愛媛県の松山師範学校出身で樺太中学校（大泊中の前身）に就職、著作により師範学校教授となった人である。

ソ連崩壊後のサハリン史家であるヴィソーコフは、その著書のなかで「小なりといえども世界の不可欠な部分としてのサハリン」と述べている。ロシア語で書く以上全ソ連を意識せざるを得なかったからであるが、私は自分が信ずる樺太というものに依拠して生きてき、ヒロシマに遭遇し、一時（しかし長期にわたり）樺太を忘れるまでにこれにのめり込んでいた。

四十歳に近づいて樺太の魅りがあり、最初にして元々のテーマに目覚め回帰したのであり、その際苦労したのは、妻を紹介しつつその存在をいかに小さく示すかということだった。個人的な体験だけにとどまっていたはならず、樺太問題の歴史的考察もまた必要だったので、それをもまた行った。しかし結びの最後の一行は、四歳十か月で逝った長男に、妻との結びつきにあずかって力があつたマルグリット・デュラスの映画『ヒロシマわが愛』言葉を語らせるものと相成った。

東京で大学は露文科にはいり、学内の文化団体はソビエト研究会、日ソ協会付属のソビエト研究者協会文学部会の会員とソ連一色の生活をするようになって、しかし私は樺太での友人知己を探し訪ねて会うということには不熱心だった。北海道ではどこでも樺太からの引揚者に会うのであり、そういうわけにはいかなかったはずなのだが、東京では会わずにすませたのである。しかし樺太について書くという課題は忘れることがなく、しかし、ヨッポイマツの記憶を失っていたためであるが、樺太が書けるのは、私が結びつく女性と

の関係においてだろうという予感を抱き育んで生きていた。私の眼前には常に別れに望んだ故郷の村の湖と山々、その永遠にして絶対の真実があり、いつの日にかそれを体現した女性に出会うのであり、そのひとを書くことが樺太について書くことになる、と思いかつ願って生きていた。

高校生の時にゲーテ『ファウスト』を読み、その第二部の結びの「永遠なる女性は導きてわれらを高みに昇らしむ」を、そのことを言っていると理解し、また露文科生になって入学後、研究会のテキストとして読んだチェーホフの短編「恋愛について」についての結びの言葉が同様な役割をもった。人妻と恋愛の仲になり、告白できずに、やがて精神の治療のためにヤルタに向かう彼女を見送る羽目になり、別れのち男は述懐するのである。「恋をする以上は、ありきたりの意味での不幸とか、罪とか美德とか、そういったものよりはもっと高い、もっと重要なことから出発すべきである」。チェーホフのこの作品は実体験に基づくもので、相手だったアヴィーロヴァの手記が残っており、またこれを裏返しにした、ということは情事が成立した場合の顛末を描いた作品「仔犬をつれた奥さん」を書くのであるが、それはともかくこの「もっと高く、もっと重要なこと」が何であるかを私は1959年の二度目の外国の旅で知ることになった。

滞在日数で十三日だった平和友好祭が終わり、団は列車で帰路につき、私は国際学連に勤務する二人、私と同学の後輩の一人とともに専用バスでハンガリーのブタペストに向かい、そこでの国際学連拡大評議会なるものに出席した。そこで会場に置かれていた月刊グラビヤ機関誌『World Students News』の最新号を開き、見慣れた日本俳優岡田英次と初見のフランス女優のクローズアップされた顔写真とともに、最新の映画、アウシェヴィッツの記録映画『夜と霧』のアラン・レネが監督の、マルグリット・デュラス原作の劇映画『ヒロシマわが愛』の紹介記事を読むことになり、非常に強い印象をうけた。

前年の1958年に制作され、この年に封切られた映画を私が東京で実際に見たのは、その日から数えて十数日後のことで、東京は一般向けではない特殊な映画を上映する新宿の小さな映画館であった。私が実際に体験したことで、第二作『ヒロシマまでの長い道』に書いた通りなのであるが、作り話、虚構ともみなされるかもしれない出来事である。映画そのものも『二十四時間の情事』と改題されていた。

東京に進学し、北海道の十勝のあいだを歩き来してきた。しかし東京以西は、箱根・熱海止まりでその先には行ったことはなかった。その私が映画を見終えた翌日九州に向かう夜行列車に乗り、朝、広島で下車、まっすぐ原爆資料館に向かった。そして夕刻またもや夜行列車に乗り、大分には到着き、翌日夕べ別府で求婚したのだったが、私は樺太に係わって何事か不明にして隠されたものがあって、それが私を彼女に導いていること、モスクワ留学に向かわせたのも、またそれを断念させたのも、それであることを知っていた。私は奇形児や虚弱児の父親になる場合がありうることを覚悟していた。しかしその場合でも、まさにその子がその不明なものを明らかにしてくれるだろうと思い、かつ願い求婚していた。

「夜と霧」とはナチスが用いたユダヤ人捕縛・連行の暗号名だそうで、映画が有名になり、後に出たフランクの邦訳名は、原題が「強制収容所における一心理学者の体験」であるものが、これにあやかるべく『夜と霧』に改題されたものだそうである。オリジナルのまさにその映画の作者＝監督レネが、続いて広島原爆について劇映画を目指しつつ、その作者にまだそんなに著名ではなかったデュラスを選んだのはまことに慧眼だった。彼女はこの後の『愛人』でマージナルな作家となるのであり、私もこの『愛人』によって愛好する『ヒロシマわが愛』の不明な部分が理解できた者である。

『ヒロシマわが愛』とはどんな作品だったか。

ドストエフスキーの作品がそうであるようにこの作品は一つの出来事＝事件、すなわち一組の男女の情事から始まっている。しかしその肉体は灰を浴びてうごめいており、交わされている言葉、「わたしはヒロシマですべてを見たの」の女声に対する「君は何も見なかった」の男声から原爆による灰と推定される。情事が成立するためにはそこに至る経緯がなければならないのだが、それは説明されておらず、進行する物語がその説明となる。

朝が到来し、フランス女性の仕事に向かう。彼女は平和のための映画撮影のために広島に来てることが明かされる。それはこの日をもって終わり、翌朝（二十四時間後）には広島を去って帰国するのである。日本人のヒロシマの男はフランス語を話す、それは「フランス革命」の勉強のために学んだからであって、技術者であり、外地の戦場であり、原爆には遭ってはいないが家族を失っている。妻帯しており、対話中に男の家には雲仙（長崎を暗示）に滞在する妻女から電話が入る。女は男同様に幸せな夫婦生活をしていると語る。しかしそれらしい兆候はみじんも感じられず、言葉と裏腹に彼女が男に語るのは、いまだにその呪縛から逃れえずにいる、大戦終結当時の故郷のロアル河畔の町ヌヴェールでの占領軍であるドイツ兵との恋愛の体験である。ドイツ兵にしたがってその母国に逃亡すべく待ち合わせの場所に駆けつけた彼女は、狙撃されて死にかけている恋人を見出す。ドイツ降伏の日であり、彼女は捉えられて頭を丸刈りにされ、両親は恥じて娘を地下室に閉じ込める。やがて髪が生えそろうと、町にはもう住めないのでパリに送り出される。到着の朝の新聞一面に広島原爆の記事が大きく出ていた。

ヌヴェールの女性が深く傷ついたのは、ドイツ兵への愛が真実なものであり、罰せられるいわれのないものだったからである。それゆえにいまだに彼女は男を忘れることができない。映画のヒロシマの主題を肯定・賞賛したフランスの評家たちも、このところ躓いたようで、サルトルなども「ドイツ兵は反ナチだったのではなからうか？」といった苦しい擁護を余儀なくされた。いわんやデュラスはれっきとしたレジスタントであり、夫のユダヤ人は収容され、解放された時には性不能者になっているのである。

広島日本人は「ヒロシマに留まりなさい」と彼女に迫るが、それはヒロシマを真に見るためには、資料館その他をすこしばかり見たのでは不十分なのであって、長い時間をかけて見なければならぬからであった。またその日本人はまさにヒロシマを体現している男であるが故に、彼女を広島に留めるためには自分がそのドイツ兵——死んでいるのにま

だ彼女のなかで生きている存在——に成り代わろうとする、そこまで試みる。「そのとき僕（ドイツ兵）はまだ生きていたのかい？」

男は夜の国鉄広島駅で彼女を見失うが、その行き先には心当たりがある。昨夕出会った街中の、これも同名の映画に由来するカサブランカというカフェである。行ってみるとやはり昨夕と同じ席にひとり掛けていた。日本人客の一人が近づき「お一人ですか」と英語で声をかけ、女は無言。やがて席を立ち出てゆく、行き先は自明である。「わたしはあなた（ドイツ兵）のことを忘れるようになるわ」と叫ぶ。「ヒ・ロ・シ・マ。それがあなたの名よ」。男は応える、「それは、僕の名だ。君の名はヌ・ヴェールだね。フラン・スの」。ヒロシマと女主人公の個人的傷痕との前者主導による合体である。

それにしてもデュラスのヌヴェールには今一つ日に腑に落ちないものがあつた。

その初期の作品に『太平洋の防潮堤』というものがあつた。ベトナムで夫の没後有り金をはたいて土地を買った母が、そこが高潮のときには海水を被る不毛の地であつて零落し、一家は貧困にあえぐ。十代の末娘（デュラス）にはムッシュ・ジョーなる得体のしれない裕福な男友達ができ、上の兄などは見下しながら金をせびるという具合だつた。『ヒロシマ』の次作の『愛人』が、これをフランス留学したことのある華僑の銀行家の跡取り息子と明かしたのであつて、これは「ヒロシマの日本人」を、神のごとき存在として成功裡に描きえていたからこそ可能となつたことだつた。

対するに、ベトナム生まれ育ちの作家にとって母国フランスは距離的には遠く離れており、かつ時間的には十八歳以後に暮らすことになつたところである。それぞれが互いに分離した物語を書いてきて、デュラスは『愛人』に至つて時空の関係および順序を混ぜ合わせる手法を採用した。そのことを冒頭で「書くということが、すべてを混ぜあわせ、区別することなどやめて空なるものへと向かうことでなくなつたら、そのときには書くとは宣伝以外の何ものでもない」と宣言している。すでにして『ヒロシマ』がフランスとヒロシマ、戦中と戦後の混ぜ合わせだつた。

彼女には「青春の隠された時期の話」「地下に埋めてしまつた話」が有つた。すなわちムッシュ・ジョーとは中国人だつた。それが隠されねばならなかつたのは「売春」だつたからである、白人の処女の黄色人種の男への「売春」である。しかしそれも、ドイツ兵の交情を描いた作家にとっては今や卑下することなく描くことが出来るのである。書くためには母国の文化的伝統につながらなければならず、そこに行き学び暮らす費用稼ぎの「売春」であるが、「十歳以上年長だつた」中国人はやがてフランスに來、彼女に電話をしてき、最後に「あなたを愛することを止めるなんてけして自分にはできないだろう、生涯あなたを愛するだろう」と言つたとされている。

それに先立つて描出されるサイゴンの連れ込み宿での中国人は常にその若いフランス小娘に怯えている。彼女が何やら得体のしれないものを心中に秘めているのを感じており、魔物に取りつかれたように手を切れずにいて、フランスに向かう客船に彼女を送りながら「助かつた」と思っている節がある。彼女はたつぷり金をむしり取つて別れたはずであり、

『愛人』の結びは、男と女を逆にして、彼女が言ったことにしても可笑しくないのである。『ヒロシマ』の結びと対比すると、私にはそう読める。『ヒロシマ』の結びは、西洋の東洋への賛歌であり感謝なのである。

広島・長崎に原爆が投下された当時、日本は大東亜戦争と自称した第二次世界大戦を戦っていて、敗色濃厚ななかで類焼をふせぐための建物の疎開（取壊し）をしていた。広島でも行われており、多数が作業中に被爆している。ついでに記すが、樺太の大海でもなされていた。もちろん米空軍に備えてのものだった。植民地化されているアジアを米英から解放するための戦争と宣伝教化されていた。私がここでこれを問題提起するのは日本の原水禁運動が何であったかを明らかにしたいからである。

ウクライナ戦争がいつ終結するか不明なままイスラエルvsパレスチナ戦争が起こっており、日本世論の圧倒的多数とは異なって、私は、先にあげたフランスのエマニュエル・トッドと同様にウクライナを教唆して戦争を仕掛けたのは米英であると考えている。その『我々はどこからきて、どこにいくのか』（2022）における米英批判に教えられること多大であった。しかしその結論、「日本を愛する」がゆえ」の「核武装」の提言には大反対であり、己のヒロシマの明確化を志す。結論を先に言えば、すでに著書『トリウム原子炉革命』―古川和男・ヒロシマからの出発』で主張したように、安全・経済的、核兵器廃絶に貢献する核エネルギー炉を提案する者である。またその実現のためには、原水禁運動の成立に多大に寄与した安井郁教授の思想の点検が欠かせないと考える。

安井氏は東京帝大法学部の国際法教授だった時期、戦時下にあつて大東亜共栄圏の思想を支持・宣伝し、戦後占領軍の意向もあつて責任を問われ、辞任・退職を余儀なくされた。居住する杉並区に塾居、弁護士を開業、望まれて新設の公民館館長に就任、婦人たちを対象とする読書会を主催していた。テキストには日本の戦争はアジアの植民地の独立に資するものがあつたとするE・H・カーの著作があつた。そのような1954年、ビキニでの第五福竜丸の被爆を契機とした水爆禁止の機運のなかで、その読書会の婦人たちを中心に水爆禁止の署名運動の発生があつた。広島・長崎が加わって原水爆と名を改め、それらを集約するセンター組織ができ、これが基礎となつて日本原水爆禁止協議会（以下において原水協と略）が成立、毎年世界大会を主催するようになった。

この動きを総括した著書に丸浜江理子『原水爆禁止署名運動の発生』（凱風社、2011）がある。吉田嘉清から数回にわたって聴取するかたちで執筆された著書で、その際吉田はいずれも関連著書を執筆している武藤一羊、そして私が当時を知るものとして求められて同席、本の刊行後はそれぞれ推奨的な文章を発表した。そのなかで武藤氏が全体として肯定しつつ、安井氏について疑問を抱いていたことを述べ、（）括弧を付して「それはこの書によってさらに深まった」と記していて、何を言おうとしているのかは私にはすぐに分かった。しかしそれはインタビューにおいては当の武藤氏をふくめ誰の口からも発されなかったのであつて、それはざばり氏の戦時中の『大東亜戦争と国際法』に露出している行動の評価にかかわることだった。私もまた吉田氏以外ではごく少数の人と話したこと

あるだけのことだった。

事務局員として話はいろいろと聞いていた。中野好夫氏は東大構内を国民服を着て歩いていたことを挙げて、原水協ニュースへの寄稿を拒み、吉野源三郎氏は岩波の雑誌掲載に安井原稿を拒んだ。しかし第一回世界大会の基調演説を安川郁の依頼を受けて、法学部長を経て総長だった南原繁は快諾している。問題は、疑わしい過去をもつ人物がレーニン賞をうけ、フルシチョフから歓待され、毛沢東からも招待される時の人となったことにある。私はといえば当時は日ソの友好関係が促進されとして喜び歓迎していた。フルシチョフは「ソ連は、核実験はしない」と約束、安井がこれを日本で成果として宣伝、しかし軍部の突上げで再開、このために原水禁世界大会が混乱、原水禁国民会議が割って出て独立、責任をとる形で安川は理事に退いた。数年後ソ連でもフルシチョフがまた退いた。それからソ連の長い停滞が始まり、最後はチェルノブイリ原発事故をへての崩壊の到来となった。

樺太に生まれ育ちソ連占領下で暮らして引き揚げたのだった。そうでなかったならば私の人生・生涯は現にあったようにはならなかった。そんなこの風に以前から思っていたのであるが、ロシアのウクライナ侵攻、これを契機としての米英による軽罪制裁の一環としての資本の引き揚げ、これがサハリン天然ガスの液化貿易であるサハリン2などにおよび、日本だけが引き揚げずに留まった。日露間に正式な国交がないため、安全保障のために米英その他に資本参加を呼びかけ、多年の努力のすえに実現したプロジェクトである。日本時代には女麗（めれい）とよばれ、日露戦時の日本軍の上陸地点であり、その記念碑が建立されていて、大泊中学校では四年生になるとここへ表敬の行進が行われていた。この地にサハリン北部からパイプでガスが送られ、日本の技術による液化工場で処理され、そのために建設された港湾施設で専用船に船積みされ日本全国のみならず、東アジアの諸国に運ばれる。米英には有ってもなくてもよい事業で早々に手を切った。フクシマ事故で日本の全原発は操業停止になったが、電力不足を免れたのはこれがあったからだと聞く。

中知床半島の遠淵と大泊の行き来は海路とバスの双方があったが、冬季は馬橇にたより、陸路の行き来には通貨する場所、そこで見られる上陸記念碑は、ソ連時代に戦車により至近距離から弾丸が打たれ破壊され傾いた状態で放置されている。拙著の読者である朝日大阪の記者が写真を送ってくれた。

多くの記念碑が破壊され、なかには海中に放棄されたものもある。西の間宮海峡側に真岡があり、そこで産する昆布に目をつけ、ウラジオストク経由での中国輸出を目指して住みついたスコットランド人船員にデンビーなる人物がいた。長崎を基地にして航行するイギリス船の乗組員でこの発見にいたったもので、チェーホフは会っていて言葉を交わしており、日本側の記述が例外なくイギリス人と記しているものを、チェーホフは流石である。

長崎からお稲なる女性を伴っていて仲睦ましく、夫の没後彼女は真岡を一望に見下ろす高台にその肖像の碑を作り、後に真岡の名所となった。私の読者にこの地からの引揚者で釧路に住み釧路湿原の植物研究家で著作のある荒沢氏があり、帯広に帰省のうちに立ち寄

らせてもらった。「樺太の自然とまったく同じで、樺太研究のためにやっているようなものです」と言われ、その真岡を再訪し、お稲の碑が取り去られていることに抗議したとのことだった。「この次に来られる時までには探しておきます」との返事だった。お稲の純愛は小説にもなっているものなのである。

取り壊しも撤去もできず、頑強に居座っているのが天皇后陛下の御真影を収めた小建造物である。大泊中の場合は、校舎は木造だったので全壊していたがこちらは鉄会コンクリート作りなので残っていて、鶏小屋に使われていたとのことだった。5回生である句集『凍港』の俳人山口誓子氏が「朝日新聞」に手記を発表していたが、緩やかな岡の斜面のに立つ校舎に隣り合って立つ寄宿舎はレンガ作りのロシア軍由来の建物で、これが残っていたので目印になったということだった。小さな遠淵小学校の場合も同様で奉安殿だけが残っていた。この現象は南樺太全域にわたっており、その数は多く、あるいは半永久的に残るのかもしれない。

ブッセと名を代えた遠淵（トウブチ）に最初に入ったのは盛岡の遠山（旧香宗我部）美知さんである。村ではただ一件のなかば樺太庁立の香宗我部病院長の息女で豊原女学校から東邦女子医専に進み敗戦時には岩手県盛岡にあり勤務していた。その旧姓は土佐の長曾我部を連想させるが、ずばりそれが元の姓でその一部が関が原役後南部藩に拾われた際に改名したものである。わが家の露日混血の村山トモ子さんとは同級生で、村山家の長男が一人残り父親のキリル以来の牧場を経営しているのを確かめ、単身で入った。この人が発起してサハリン残留一時帰国促進会が発足したのだが、それに先立ち彼女の報告を聞いて、翌年北海道居住の三十人ほどが団を結成して再訪、その手記を中心に文集『樺太遠淵村』が製作され、その発行記念を兼ねて全国的規模の樺太遠淵会が函館でもたれた。

わが両親も出席した百五十人におよぶこの集まりで、私ははじめて遠山さんに直にお会いした。日ソ協会が米川正夫夫人の肝いりで高見順、川端康成等々の著名人の夫人たちを組織し、団を結成して訪ソしたことがあり、これに加わり以来米川夫人とは昵懇、上京の際にはその世田谷のお宅に宿泊、米川夫人は彼女が経営する盛岡市遠山病院で亡くなっている。顔の広さは格別なもので、後述するが辻井喬（堤清二）氏にまで及んでいた。

この遠山さんの同級生で当時遠淵会会長、やはり函館で初めてお会いした石原二三郎氏から、突然自費出版の書籍の贈呈をうけて驚いた。北海道は十勝出身の代議士で面識のあった中川一郎にかんするものである。

農水省大臣を経て自民党総裁選に立候補して落選、ほどなく遊説中に札幌のホテルで死亡、自殺と報じられ私もそう思っていた。ところがソ連崩壊後のモスクワで東京の大使館発の文書が公開され、そのうちにそれを米CIAによる謀殺と断定する報告があり、これ入手した日本の出版社社員が自社の雑誌にこれを公表したのである。石原は中川とは若年時北海道道庁で同僚、その推挙により自民の大野伴睦の後任の秘書となり、札幌後援会長になるなど中川とは古くから昵懇の間柄である。それを知る遠山美知さんからの知らせで雑誌記事を読み、また当の記者から執拗な取材をうけるようになった。記者は実行犯と

してその朝ホテルにあった中川秘書鈴木宗男を特定していて、その裏づけを探していた。

第一発見者は中川夫人であって、彼女はその夜札幌市内の姉の家に泊まり、朝ホテルに戻り、浴室に首を吊った夫を発見し、錯乱状態のなかで、中川の秘書鈴木とのあいだにあった確執を根拠に、鈴木が殺し自殺に偽装したのだ、と思った。しかし証拠があるわけではなく、言葉には出さずいたものを、当該記者はあぶり出し、石原に同意を求めたが、氏は否定した。

石原にはそれが誤りと確信する根拠があった。というのもその夜午前二時すぎにホテルの中川から電話があり、それは後から思うと自殺を決意していて別れを告げるためのものだったのであるが、話が始まったか始まらぬうちに女性（女声）を伴った男の来客があり、「それでは」と中川が電話を切った。死体解剖ではその一時間後に中川は自殺しているのである。したがってその女づれの来客が事実を証言してくれば鈴木の場合は晴れるのだった。氏の意図はそこにあり、その事実を世に知らせるための著作だった。事実この人物がこれにより名乗り出てくれて、鈴木宗男の「嫌疑」は晴れたのだった。

私が驚いたのはソ連大使館の文書のほうで、それというのも私のほうが先輩格で係わりがあったからだ。しかしそのことは1984年の樺太の本では、先送りする形で私は触れず、また崩壊後の『微笑の沈黙』でもわずかに触れたただけのことで、全貌を知るにいたったのはこの「事件」と、さらに後の、後述するコワレンコの著書によってであった。

ソ連は極東のアムール河の河口に近くに北方から流れてくる支流があり、その出口近くに原木が集積されていた。アムールの源流にちかいシベリアで伐採された原木（一定の長さに伐採された丸太）は積雪中に河岸に輸送され筏に組まれ、春、河の結氷が解けて流出すると曳き船に引かれて河口に向かい、支流のこの地点に係留される。そこに日本から木材専用船が向かい積み取るが満船（積切り）にはできず、河を出て――途中左岸にニコラエフスクがあり、チェーホフはここで河船から海船に乗り換えている――南に向かい、プロンゲという岬近くで停船、潮待をし、同時に岬の測潮所へものを届ける。チェーホフはこれにも同乗し、上陸している。やがて高潮が到来し外海に出、大陸側のラザレフで追積が行われて満船出港となる。船の大型化とともにこれより南の大陸側、デカストリーという湾に入り追積するようになった。チェーホフの客船はここにも立ち寄っており、湾内からの景色の美しさを賞賛している。

深く広い湾であり、その名で明らかなようにフランス語で仏側の発見者の名を冠したものである。フランス海軍のこの船はこの沖まできて海の色が黒に代ってきているのを見て河（中国名は黒龍江）は近いと判断、喫水も限界にきていたのでサハリンを半島と結論、本国に報告、続く英艦もこれに同調した。ロシアのクルゼンシテルンはこれらを知りつつオホーツク海からサハリンの北端を回って南下、アムール河港を目指し、喫水が限界にきて停船、ボートを下ろし望遠鏡では連なっているように見える東のサハリンと大陸が連なっているかどうかを確かめさせ、その報告に基づいて仏英の報告を承認、国に報告、著

書にも記した。シーボルトから林蔵作成の地図を提示されて、即座その場で「正しい」と称賛したのは、描かれている地形を現実に見ていたからである。ボートをもう少し先まで南行させていたならば、大陸とサハリンが切れており、海が広がっているのを見ることができたはずだったからである！

林蔵に幸いしたのは、母艦などは持たず持たされもせず、徒歩で樺太西岸を北上、まさにその地点に到達し、幕禁に触れるのを承知してアイヌに舟を漕がせアムールを上り、清国の勢力圏まで達する地図を作製したことになった。

すなわちアムールは北にも南にも流れて海にはいつているのであるが、プロンゲ岬の場合と同様に高潮を待てばマゴで満載してもオホーツク海に出られることが分かって、とくに大型船はこのマゴ一港積みを目指すようになり、商社乗船者である私はこの停船中にゆくりもなくクルゼンシテルンが迷ったまさにその地点をみたのであり、やがて島の北端を廻り、オホーツクに出た。アムールで形成された流水は親潮に押し返される海峡側を選ばず、オホーツクを南下して北海道に達するが、その一部は樺太の中知床半島を回って北上しわが遠淵湖にも達していた。細い出口を潮の流れに従って行き来しつつ中まで入り、幾つかの小さな川から流れる水でチョウザメも獲れたといわれる水域で形成された氷と合体し、やがて湖全体が馬車も行き来できる分厚い氷の面で覆われ、春先の溶解まで続く。

日露の共有地となった後、軍隊を送り込むにあたってロシアは古くから松前藩が管理していた大泊（コルサコフ）を避け、別名一二フィート湾のこの地に小部隊をおいた。鮭はいうまでもなく鯿が大量に入り陸地に押し寄せる湖で、日本漁民は季節が始まると渡り来り、みがきニシンと肥料を作り、秋の終わりに来ると迎えに来るはしけ船につみ北海道に引き揚げた。その案内のために外海（そとうみ）の見える高台には櫓が立てられており、それは敗戦まで利用されていた（つまり灯台はなかった）。日本漁民たちは近くに住むアイヌ人を使っていたようで、ロシア兵の駐在は迷惑至極でその悪口を言っていた。「ロスケ（ルースキー）なんてヨッポイマツだよ」と彼らが言ったのが、後々伝えられて私が体験することになったのだと思われる。もともとチェーホフは同じ彼ら漁民が、頼みを入れて「気さくに網を貸していた」と記している。彼は同乗してきた船に日本人がいたことも記しており、あくまでも日本ひいきである。言うまでもなくチョウザメは大陸の内海にすむ珍味であり、チェーホフの生地タガンロークのホテルの入り口に「魚あります」の表示があり、確かめるとチョウザメのことだった。私は、しかし、その村に育ち、内海の豊富な水産物を口にして育ったが、チョウザメの名は聞いたこともなく、もちろん口にしたこともなかった。漁師の息子だった友人にたずねると、内海の奥の方にはいたのかもしれないということだった。

北樺太では中心都市のアレクサンドロフスクの北、タンギというところが積出港の一つで二度行っており、接待役の海員クラブの所長の女性に案内されてその街に行っている。やはりチェーホフが来ており、この地方にあった囚人労働者の視察が目的だった。大陸から来た船に女囚がいると騒めきがおこったことを記しており、帝政時代の面影が残る港町

だった。忘れたいのはこの市でグスベリを見たことである。遠淵のわが家の裏手の空き地にこの茂みがあり、秋の終わりにには薄緑の小さな実をなし、だれの所有物でもなかった。私はよく採って食べた。後に英語をまなぶようになり、この名の由来が *goose-berry* 以外ではないと知った。村の大きな沼がポンドと呼ばれ、固有名詞と思っていたのが、*pond* だったのと同じく、樺太庁の調査官が命名した名であると知り、またそれが引き揚げて住んだ十勝にはないことを不思議には思わないでいた。後にテレビで歌手のコマドリ姉妹の釧路の幼時を語るのを聞き、この言葉を耳にし、釧路にはあると知り、チェーホフの「すぐりの実」と訳されている「美味な」すぐりはグスベリのことではないかと疑ったが調べてみたことはなかった。それがここ北サハリンのアレクサンドロフスクにあるということ、遠淵にただ一か所だけわが家の裏手にあったそれはロシア部隊が持ち込んだものに相違ないということである。私の出生を思い知らされるような発見であった。

ある時期から北海道の社会党（知事が所属）とサハリンの交流が起こり、真岡その他にかぎり墓参ができるようになったのであるが、大泊とその周辺は軍事上の理由だったと思うが、最後まで閉ざされていた。ナホトカと近接するウラジオストクの場合と同じだった。しかしその南樺太では北で国境線に近い敷香Ⅱポロナイスクには船で直接に行った。海員クラブの所長が朝鮮人で私の希望を入れて国境近くまで案内してくれた。193年の杉本良吉・岡田嘉子逃亡・脱出事件の「現場」を雰囲気だけでも確かめておきたかったのである。すでに岡田さんとはモスクワで二度お会いしている身だったが、杉本良吉氏の死はKGBによる銃殺だったということは、岡田さんが知ったのがソ連崩壊後であるように、この時期の私はまだ知らなかった。

白系ロシア、赤系ロシアの言葉があり、赤色ロシアからは圧迫を感じていたから、独ソ戦が始まり、連戦連勝してドイツがモスクワに迫ると、小学生だった私は樺太の安全ために喜んだ。ノモンハンで九死に一生をえて帰った兵士の話を直接聞いたことがあり、ソ連恐怖の気持ちは強まっていた。そしてその後、その国に占領されて実際に見ることとなって引き揚げた。

東京に進学し、すこし年長であったとはいえ、わたしの当時とは真逆だった人に出会うことになる。ソビエト研究者協会文学部会で会うこととなった江川卓さんである。戦前活躍した翻訳家・東京外語教授外村史郎氏の長男であるが、一高・東大法学部へと進みロシア文学者になった人である。ロシア語は独学と称していたが、教室では習わなかっただけのことである。東京外語教授だった父親を敬愛していて、ソ連地図の上にドイツ国旗を立て続け、しかしそれらが全部取り払われる時がくると予告し、やがてそのとおりになり、「一本一本抜き取ってソ連国旗に代えていった」と語り、私は「さすが」と感嘆したものだ。外語が定年退職になり、満州にわたり新しい職に就き、一高生になっていた氏は訪ねて会ったという。しかしそれが別れとなって敗戦となった。外村氏は抑留され戦犯容疑で収容され、帰らなかったのである。

今日から考えると不思議なようだが、日本将兵のシベリア抑留を批判する言論が出回る

るのはかなり後で六十年代に入ってからである。やはり戦犯容疑で長期に抑留され、国交回復によって帰国できた内村剛介が登場したところからである。外村氏の長期のそれには江川氏は心痛し、ソ連を愛していた父が戦犯的なことをしたはずがないと確言し、それを読書関係の週刊誌に発表した。ソ連の処置に強い疑問を呈するものだった。日本に送られると信じて大泊まで輸送されてき、樺太の私は、行き先がソ連沿海州と知り脱走してきた兵士を見ており、また中学校長は逮捕されてシベリア送りになり、そこで亡くなっていた。私は江川さんに同感・同情し、互いに親密になった。

ソ連でもスターリンが神格化され絶対者になったのは戦勝によってであり、戦後になってからである。たとえばペレヴェルゼフは1935年当時部分的に翻訳されていたがスターリン派の攻撃により「失脚」していた。しかし当時除村吉太郎氏はその次作の『ゴーゴリの創造』にまで目を通していて、「ペレヴェルゼフ教授」と呼んで敬意を表して書いている。しかし戦後はソビエト研究会の文学部会を指導しながら、ペレヴェルゼフ落として頭角を現し、評論部門の代表者となったエルミローフのドストエフスキーとチェーホフの論を立て続けに部会から出版した。わが松尾隆にしてからも、そのエルミローフの書評を依頼され苦心惨憺した原稿が残っているのであって、戦後の左翼のスターリン（のソ連）の絶対視は今日ではもはや想像できないほど強いものだった。無謬の宮本顕治氏でさえ「マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン主義」と言っていたのであり、スターリンが貶められ、科学的社会主義の呼称に代わり、現代の不破哲三のソ連論に至るまでには長い曲折の歴史があった。

私とて例外でありえたはずはなく、それでも芯にあったのは何だったかと自問するとき、それがソ連占領下で再開された中学校の最初の授業での原爆の教えであったと自覚している。それが有ったので大学進学後、朝鮮での原爆使用に反対するストックホルム・アッピールに呼応する日本平和委員会―その常任理事だった松尾隆に師事したのだった。だからビキニ以降の原水禁運動の高揚はまことに喜ばしかった。その後のフルシチョフによるスターリン批判以上だった。私はしかし、あるいはそれらを知る人々とともに私たちと言うべきかもしれないが、1954年から数えれば五十四年して2011年に起こった地震による原発事故を契機として起こった原発禁止の声、その高揚は往時の高揚を想起させるものであったが、また或る苦々しいものを随伴するものであった。苛酷事故を予告・予言していただけではなく、既往の原発に代わる安全な核エネルギーが提起されていることを、知っていたからだ。

古川和男の一般向けでは最初の書『「原発」革命』（2001）、フクシマ後の改訂版『原発安全革命』（2011）がそれであるが、それは本の帯にある宣伝文句「この原発であればチェルノブイリもフクシマもなかった」が嘘でもなんでもなく、真実そのものである書物なのである。その価値を認めながらも、すでにウラン軽水炉が稼働し五十基を超えるまでになっており、これにとって代わるのは不可能と考えていた人々も、フクシマで変わった。私は1991年にはチェルノブイリ（厳密にはミンスクとキエフ）にも行って

きているのである。私は日露領土問題、マルクスとドストエフスキーの関連の問題に取り組んできていたのだったが、またこの双方で第一人者と自負しているのだが、しかし心機一転勉強して古川和男トリウム熔融塩炉支持の書を著した。

安全で経済的、小型化が可能で操業が容易、わが「原発ムラ」の指導的技術者豊田正敏（東電副社長）が「良いことづくめ」と舌打ちするように著書で絶賛したこの核エネルギー炉の発明者は米国立オークリッジ研ワインバーグ博士であり、古川和男博士はその完成者である。

否、この炉が核分裂による物質の変化（化学変化）に基づく以上、炉は、これまでの物理工学的火力水力炉とは異なって液体の化学炉となると予言した人物、ウィグナー博士である。ワインバーグはそれを実行実現したと言ったほうがよい。しかし事体の進行はその真逆であって、ワインバーグの試みは既往のウラン軽水炉の路線の遂行者からの猛反発をうけたのであり、その中心勢力は世界中のウランを買い占めていたユダヤ系の米金融資本だった。

追いつめられてワインバーグはゲーテの『ファウスト』の言葉を引いてウラン軽水炉を「悪魔の買物」と否定し、このため所長の辞任に追い込まれる。しかし米国ではスリーマイルで事故が起こり、原発の新増設は禁止された。作りかけの原発を抱えていた米メーカーは弱り切り、これの輸出を目指し、日米双方の野心家たちが加担した。

きわめてよく知られているように、米占領者は広島・長崎の原爆被害報道を禁止した。東京での軍事裁判に影響するからだった。サンフランシスコ条約後解除されるが、真に自由になるのはビキニ以降であり、しかし当の投下国であるアメリカへの抗議の声は微弱だった。広島原爆慰霊碑に「過ちはくりかえされません」と刻まれてあるように、災害と悲惨の原因が日本軍国主義にあったことへの反省によるものだった。また米側にも原爆投下を正当化する言論は根強く、謝罪の意思を表明したのは一部のキリスト教団体と個人だけだった。

そのような時にソ連フルシチョフがレーニン平和賞を原水協理事長安川郁法政大教授に呈し、氏が喜んで受賞したことは、米側としては黙過できることではなかった。たまたまアイゼンハワー大統領が原子力の平和利用を宣伝していた時期でもあり、米側に売り込みの動機があり、日本側にも「第二の太陽」（読売新聞）などと命名してこれを受け入れる人物が現れた。広島資料館は一時この原発の宣伝展示場となり、その展示物の一部は終了後も残された。ワインバーグの比喩にしたがえば、悪魔の支配する国になったのである。

これを克服する古川の核炉AMSB（後に愛称FUII）が完成したのは1980年で茅誠司を会長に学術委員会が発足、自民党に二階堂進が会長の促進委員会が発足するが潰され、米ソをはじめ世界中から関心が寄せられ古川は招聘されて行くが、実現には至らず、将来を見据えて、2010年にITEMS（トリウム熔融塩国際フォーラム）、2011年にTTS（トリウム・テック・ソリューション）を設立。フクシマを迎えることになったが、同年12月八十四歳で亡くなった。

古川和男の残した両団体と会社は吉岡律夫、古川雅章らによって運営されており、2022年にはまさに原発ムラの強力な一角である経済産業省から研究資金の交付をうることとなり、以来毎年更新されている。しかし同じ経産省により、自民党岸田内閣の名によって、フクシマ以来停止されていたウラン軽水炉の全面再稼働が決定され、「（実現まで）あと一息」と報じていた古川雅章TTS社長の口から「フクシマ以前に戻った」という嘆きと絶望の声を聴くこととなった。「フクシマ事故が無かったかのような」日本の現状が存在する。

ワインバーグは自身軽水炉の発明者であり、誤りに気付いてトリウム熔融炉に転換しており、「ファウストの買物」と批判しつつも、そのファウストを自身も含む米原発界全体の呼称として用いていた。つまり過ちの責任は自分にもあるものとして軽水炉を否定したのであり、その克服であるトリウム熔融塩炉の実現を日本に期待した。広島を訪ね、平和公園の鐘の音色にこそ動かされ、その四倍の大きさの鐘を発注、それをオクリッジの公園に「International Friendship」と命名して据えた。日米の友好とともに核問題の究極的解決である己と古川の合作である炉の実現を願ったことだった。その自伝はその実現である「第二の核時代」の到来を確信しつつ、「残念なのは、この目でそれを見られぬことである」と結んでいる。しかしワインバーグは、古川和男は見ると思うと思っていなかったであり、フクシマ後の古川和男は、弟のTTS社長古川雅章らを見るだろうと思っていたと回想される。しかしその雅章氏から伝え聞くのは、電力会社は「（トリウム熔融塩炉を説明しても）耳傾けるのは部長までで、その上はだめだ」ということである。これは全銀行の五十四機におよぶ巨大な原発への融資が回収されていないためで、原発をやめられるとそれが焦げ付きとして残り、日本資本主義経済全体が立ち行かなくなるからだだった。その「危機」はフクシマ後すぐに感得されていたのであって、「原発ムラ」は体制の強化を目指し、自民党安倍晋三政権を発足せしめた。標的とされたのは代替え自然エネルギー派ではない。第三の道に立つトリウム熔融塩炉の派だった。

古川家は水戸藩の神官の家柄で幕末志に殉じた志士を輩出しており、その自覚は和男氏に存在していた。私は葬儀に参列したが、その神式で行われていた。TTSのホームページ上に家系図とフランクルの原題『強制収容所における一心理学者の体験』（邦訳名『夜と霧』）のなかの八章「絶望との闘い」のうちの一文が掲載された。太字は当初欠落していたので私が指摘し、補足掲載された箇所である。

「ここに必要なのは人生の意味についての問いの観点変更なのである。すなわち人生から何をわれわれはまだ期待できるかが問題なのでなくて、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである。そのことをわれわれは学ばなければならず、また絶望している人に教えなければならないのである。哲学的に誇張していえば、ここではコペルニクスの転換が問題なのであると云えよう。すなわちわれわれが人生の意味を問うのではなくて、われわれ自身が問われた者として体験されるのである」

私はわが人生において決定的だったデュラス『ヒロシマわが愛』が、西欧におけるホロコースト告発の最初の試みである『夜と霧』のレネによって企画されたものであることを知っていた。その彼がヒロシマへの同行を彼女に求め、その語るところでは「広島市内のカフェにフランス女性が一人座っている」場面以外には要求なしでつくられた虚構の物語なのである。また彼女自身後に『ユダヤ人』（邦訳名）の作があるようなひとである。二人のヒロシマを見る目に、ユダヤが存在しないはずはない。

樺太・サハリンとユダヤと無関係でないことを私は自作で体験していた。北大スラブ研究所出身の私のよき読者である大学教師の紹介で、フランス国籍の女性が訪ねてきたのだった。ユダヤ人とロシア女を両親としてソ連に生まれ、イスラエルに移住、しかし両親がそこでのアラブ人との軋轢に辟易してフランスを目指し、彼女は大学で日本語を履修、樺太サハリンをめぐる日露関係に興味をもった。日本の洋酒メーカーの奨学金をえて来日、定期のレポートを提出するために私を訪ねてきたのだった。古くは明治初期に駐日のフランスの外交官で樺太サハリン問題を仏独のアルザス＝ローレンヌ問題に例えた人がおり、それに連なる関心だった。

貿易関係では、長く大臣を務めたミコヤンの関係で同じアルメニア人が、またバルト三国人が目立ったが、ユダヤ人は少なく、プラント関係に従事したさいに技術者として出会った。概して知的分野で多く、その多くはトロツキーを始め、革命に加わっていることは、大量粛清されたこととともに、よく知るところであった。また樺太の本の執筆にさいしてはユダヤ人のマルクス主義者ドイツチャーの『スターリン』に多大に依拠し、その他の著書にも目を通していた。その中には第二次大戦後の『非ユダヤ的ユダヤ人』のようなものがあり、今日再読している。

ドイツチャー自身が己をその後継者に数えていた表題の存在とは何か。それはスピノザ、ハイネ、マルクス、ローザ・ルクセンブルグ、トロツキー、フロイトらであり、「ユダヤ人社会の限界を乗り越えていった人々」であり、彼らにそれが必要でもありまた可能となったのは、「異なった文明、宗教、民族文化等の境界線上に立っており」また「時代の転換の境界線上に生まれ育っていた」からなのである。

拙著『日露領土問題の根源』はチエーホフに関連して大きな発見を含むものであり、刊行の2004年はその没後百年にあたっていて、モスクワの南のメリホヴォで国際学会があり、続いて札幌、東京でも関連する行事があり、私はそのいずれにも係わりをもったが、東京での行事の時期にロシア人による『カラフトのロシア人』なる邦訳書を披見し、書評を書く機会をもった。他でもなく私の幼なじみのキリル・村山の一家がそのなかに組み込まれているロシア人の一族、日露戦後は日本国籍を取得し、「カラフトのロシア人」の道を選んだロシア人一族の数家族について、聞き取りを主体として記したものであった。日本人妻をもった一家があつて、インタビューを受けているのは私のキヨミのすぐ上の姉、三女のアヤメであり、1991年の一次帰国の大会場では私のとなりに座り、語り合った

仲である。父親のキリル人について質すと、彼女は泣きだしてしまい、「私は質問を続けることができなかった」と打ち切られている。私が聞き知っている、父親は対日協力者として拉致されて死亡、それを確認して妻は引揚を決意したのである。日本人の夫を持った上の二人については、存在だけが記述されていた。その一人が二女のわが家のドムナであるが、名は掲げられてはいなかった。私もまた境界線上の存在であることが確認された次第なのである。

チエーホフ自身が南ロシアはアゾフ海のほとりタガンローグの生まれである。その姓がチエコを連想させるがその証拠はなく、顔が黄色っぽかったことから、親しかった作家のブーニンが東洋人の血に由来すると想定しており、チエーホフ自身にもその自覚があったようである。

アジア系遊牧民のスキタイ文明の中心地であり、イタリア人の商人たちが住んでいたために今に残るイタリア通りの名がある。家は商店で保存されており漢字の商標いりの大きな茶箱には驚いた。パリ万博の日本芸人たちが招かれてモスクワで公演、それは見なかったが残っていた道具に魅せられ日本に憧れたとされている。長崎寄港が予定されていた帰路の船は、大なる期待にもかかわらず、コレラの誤報により、叶わなかった。

「犬を連れた奥さん」の出会いの舞台はヤルタであるが、女性は日本の香水を使い、別れの後その住む市を訪ね、もしもと思って「ゲイシャ」なる出し物上演の劇場に入り再会する。その最後の作品は邦訳では『桜の園』となっているが、正しくが「さくらんぼ園」とされるべきものである。しかし私はその領地であったメリホヴォに多い灌木がВИШНЯと呼ばれているのを見た。倒すのに斧の必要はないのであって、とすると、舞台の人物たちは見ているが、観客席からは見えない「ヴィーシニャの園」から聞こえてくる「観客席でも聞こえる」カーン、カーン」とされている樹木を切り倒す音は何かということになる。名著『チエーホフにおける日本』の著者中本信幸氏に質すと、「分からない。(何かの) 象徴ではないのか?」という返事だった。日本のサクラであった可能性は大なのである。

この戯曲の完成後持病の肺結核が昂じ、治療のためにドイツの温泉地に在ったチエーホフは日露戦の勃発を驚き、心を痛め、旅順における広瀬大尉の「杉野(部下の兵曹長)はいずや」の叫びを伝える新聞報道にこころ揺さぶられ、「マトロス(水兵)はどこだ?」のうわごとを言いつつ亡くなった(近親者たちの証言)。強いロシアが弱い日本を圧迫していることに心いたためいたためである。したがって斧の音は日本が打ちのめされている音と捉えると、「桜の園」の誤訳は優れた意識ということになる。私はメリホヴォの国際学会での報告『サハリン島』に寄せてそのように記し注目された。

もっとも同学会の年来の常連である中本信幸の主張は知られていて、ロシアの一人の女性報告者は、「ロシアは南と北では民俗が異なること、南にだけ存する ВИШНЯ は「すべてよきものの象徴」の役を果たしており、日本人におけるサクラ(ロシア語に入っている)と同じ役割を果たしている。チエーホフはそれを知り意識しつつ戯曲を執筆したはず

で、「あるいはチェーホフとはもつとも西にまで移住した日本人だったのでなかろうか」と冗談めかして結んでいた。顔立ちはロシアだったが、名を見るとアジア系の名の姓で、閉会での集いでは一緒に踊った。

タガンローグはユダヤ人も多く住み、ナチ、ドイツの襲来に際し、スターリンは疎開を勧告し、しかし「ゲエとベートルベンの国がそんなこと（ホロコースト）をするはずがない」と言って留まり、全員が殺された」とドイツチャーは公正に記している。またホロコーストがヨーロッパにおいて少なくとも話題にならなかったことの原因を挙げている。

「不幸なことであるが、欧州社会におけるユダヤ人の地位についてマルクスが述べているところは、正論であり、我々はいきなり最近になってようやくそれを知ったにすぎない」と記し、欧州の一般大衆のユダヤ理解が述べられるのであるが、重要なのは私が黒字で示した箇所である。ドイツチャーほどの人にしてマルクスのこの本質をアウシェビッツを経なければ認識できなかったとは！ 民族国家が林立するように相互間に対立が生ずるならば、それぞれに存在する少数者ユダヤ人にどういことが起こるかマルクスは天才的に予感予測した。つまりアウシェビッツを予見したのであり、それを免れるために万国のプロレタリアートのインターナショナル団結統一を呼びかけ、全ユダヤ人のこれへの参加を呼びかけたのだった。出発点を示す最初期論文「ユダヤ人問題に寄せて」に記されていた。「ユダヤ人の世俗的な祭祀は何か？ あくどい商売である。彼の世俗的な神は何か？ 貨幣である」。

ドイツチャーの説は完全であるが、一つだけ欠けるものがあった、それはスピノザの後継者としてアインシュタインが落ちていることである。この物理学者とマルクスの間に矛盾対立するものは何もなく、イスラエルの建国にも反対だった。問題を、始まっていた戦後の冷戦、ヒロシマ・ナガサキにまで拡大するとき、これは念頭に置いておくべきことに思われる。また彼の全言説に核問題にふれたものが見当たらない。

何度も行き来してきたロシアを含むヨーロッパである。行こうと思えば行けたのだが、その気がなかったのでアウシェヴィッツにもその他の収容所にも行かないできた。しかし一度だけ1959年のウィーンにおいてだったが、同じオーストリアでウィーンから近いマウントハウゼンにそれがあって、友好祭の日程にその見学が組まれていて、行こうと思いついた。団の被爆者女性を誘ったことがある。「見たくありません」と断わられ、その気をうしない行かなかった。そしてその後、拒否の理由を含めて、彼女すなわちヒロシマを長期に生涯にわたって身近に観察する人生、すなわち夫婦となる道を選んだ。

ガス室をもつ最大の収容所はポーランド南部、チェコに近いアウシェヴィッツで、これが代名詞であるがウィーンの数精神医学者フランク氏も最初はそこに送られ、そこで両親・妻女と離れ離れになり（死別）、列車で送られて見慣れたウィーン近郊を走り、ガス室がある南ドイツのダッハウ（デュラスの夫はここに収容）ではなく、それが存在しない手前のマウントハウゼンで降ろされて生きながらえている。

再読して、ドストエフスキの『死の家の記録』が二度にわたって言及されていることに考えさせられた。彼は一度死刑を宣告され、減刑後に流刑地に送られたもので、死の恐怖は無かったのだからフランクの場合とは違う。その冷静な筆致を学ぼうとしたようであり、それは貫かれており、ナチズムへの告発は見られないが、同時に大戦後発足したユダヤ人国家イスラエルへの批判も見られない。ドイッチャーではこれが批判・否定されるべき重大問題となっている。

「ナチズムは共産主義にたいする旧体制の自己防衛以外の何物でもなかった。ナチス自身その役割はそこにあると信じていた。そして欧州のユダヤ人は、資本主義の存続と資本主義の社会主義革命にたいする防衛のために犠牲に供されたのである。このことはマルクスの解釈が正しかったことを意味している。ナチスの理論と実践の病理学的特徴ともいえる完全な恐怖と頽廃は、正常でまともな人間の想像を超える形をとったのである」「ユダヤ人の本質についてふたたび定義をくだした人物はまたもやヒトラーである。これは哀しくも不吉な真実である。ユダヤ教という宗教的伝統を拒否しているわれわれも、いまやユダヤ人というネガチヴな社会の一員に属せしめられている」。

米国（ユダヤ金融財閥）の承認と支援のもとでイスラエルは核武装した。これが引き金となってパレスチナが、それとの紛争をかかえるインドが核実験に踏みきった。インドのその海岸はトリウムが豊富で古川和男はトリウム熔融塩炉の最初の実現を期待していた国であった。

第二次世界大戦での悲惨・犠牲・災害を代表する東西の二例としてアウシュヴィッツとヒロシマは、レネ&デュラスを嚆矢とし、世界で意識されてき、日本でも1963年に「広島・アウシュヴィッツ平和行進」に代表される動きがあった。代表は佐藤行通で、敗戦時には徹底抗戦の職業軍人、講和条約調印の場となった米戦艦ミズリーへの空からの突入を主張、阻止され、仏門に入り、インドで修行、帰国後仏教者として原水禁運動に係わり、日本原水協国際部長にまでなった。私は1985年平和事務所初めてお会いした。陸路シンガポールで中国華僑と交流、イスラエルを行進、アウシュヴィッツでは仏式の法要をおこなった。しかし願いと裏腹に、相互の相違を浮き彫りにした試みだったと観察される。

著者がフランク同様フロイトに発するユダヤ人精神医学者であることで、包括的な最初のものとしてR・リフトンの『死の内の生命——ヒロシマの生存者』（1970）がある。広島に長期に滞在し研究した成果であるが、今日から見ると欠陥もある著作である。その最大のものは長崎の医学者永井博士の、その実態がフクシマ以降に他ならぬその弟子筋の医学者によって明かされた犯罪的である誤謬の看過である。しかしこれは先にいつて述べよう。ここで取り上げるのは、リフトンの影響も受けているイスラエル人ツヴァイゲンバークの『ヒロシマ——グローバルな記憶文化の形成』（2014）である。

キューバ危機以前、冷戦期のリフトン書とは異なり、これは冷戦終了後の時代差を特徴とする。この書では2001年9・11の米同時多発テロ事件がホロコーストの延長とし

て、ほとんどすべての論者同様に同情的に把握記述されていて、私は少なからず違和感を覚えた。「テロ」の決行者は自殺によって実現しようとしたものがあつたのであり、事故直後私が連想したのは大戦末期の日本の特攻攻撃だつたからである。

冷戦終了後十年たつてソ連の崩壊が起こり、米国主導でG7諸国でグローバル化の名の富者優遇の政策が顕著になつたわけだが、そしてそれはその外におかれた世界に反感をもたらしただつたが、「テロリスト」たちはこの反感を代表していたのではなかつたか。あたかも日本の特攻者たちが豊蘆原の瑞穂の国の悠久の大義のために死んでいったように、である。

日本の特攻は、最初は飛行機によるものだったが、海上の水雷艇によるものこれに続き、その最初の艇長が在籍していた大泊中学校の先輩であり、朝礼では「後に続け」の檄がとばされた。以来私は死にゆく特攻者の心中を思つて生き、ついには体調を損ねた。また身近なところでは遠淵村出身の予科練兵が特攻死していた。文集『遠淵村』にその妹である同級生の記述がある。私は9・11については「特攻突撃者」の心のほうを重視した。

広島の記事には記されている。

安らかにお眠りください。過ちはくりかえされません。

広島一中の生徒たちは建物の疎開の作業中に被曝して死んだ。樺太でも内地（本土）に真似て建物の疎開が行われていたが、もちろんそれは米爆撃に備えてのものだった。私は最後の引揚船に満員により乗船拒否され、ソ連占領下の生活にはいった。出港していった三船は北海道留萌沖で潜水艦（崩壊後ソ連と判明）に撃沈され、ほとんどが死没した。人は「国（祖国）を愛してはならない」（デュラス）。

ツヴァイゲンバーグはまた2011年の3・11フクシマにもヒロシマの延長を見出している。しかしこれはヒロシマ把握の深化に役立ったのであつて、一つながりの事象の延長とみなすわけにはゆかない。これは原子力の平和利用の美名のもとに推し進められてきたウラン軽水炉路線の完全全面的な破綻だった。つまりは原発神話の崩壊だった。ヒロシマを浅はかにしか把握してこなかつた者たちの自滅であつた。

それではヒロシマを正しく把握していた者がいたのか、と問われるであろう。然り、いたのであり、それが古川和男博士なのだったのであり、私は1989年からその人の存在を知っていた。

米国には軽水炉が実用化された1950年代からこれに反対する運動はあり、日本のそれはこれに共感するものだった。私が所属した平和事務所はそれらと親和的關係にあり、私もその説くところを直に聞く機会を何度も持った。1991年エストニア・チェルノブイリ委員会の招待でバルト三国を、先にベルリンに立ち寄つて訪ねたのだったが、同行者には広島大原爆医学研究所所長の医学者とともに精神治療の渡辺正治講師がいたが、この方はリフトン書にもツヴァイゲンバーグ書にも協力者として登場している。福島県出身

で志を抱いて広島に住んだのだが、2011年には他界していた。旅で親しく交わり、上京のたびにお会いしてきた方だった。

バルト三国を、会談を重ねながら南下し、リトアニアではギンスブルグ大統領と会談、同共和国のチェルノブイリと同型の原発を見学、ロシア人所長の説明をうけた。車で長駆してミンスク、キエフと廻り、チェルノブイリ関係者たちと会ったのだが、古川トリウム熔融塩炉を話題にしたことはない。

私の念頭にあったのは、ペレヴェルゼフ『ドストエフスキーの創造』に続く仕事として、このマルクス主義文芸学者の次作『ゴーゴリの創造』を完訳すべきかどうかについて結論を出すことだった。結局『ヒロシマまでの長い道』の続編を目指すことになったのだが、私はそのなかでペレヴェルゼフ問題を明らかにした。

ペンネーム木寺黎二の木寺は生まれ育った島原の寺を指し、黎二はレーニンを指す、とは親交のあった古在由重氏は考証しており、同感である。心臓に心筋梗塞の持病をかかえていて、中学上級生の年に休学している。時代の趨勢でもあり、マルクス主義の受容は早かったが実践活動に入らなかったのはこの健康上の理由による。シェイクスピアを、特に『ジュリアス・シーザー』のうちのアントニウスの名アジテーションに感服したがこれが生かされるのは戦後になってであって、戦前の木寺時代は勉強に集中した。英文科から大学院は第二語学であった仏語の仏文科に進んだが、これには戦後の講演での「先生の良し悪しを見分けるのは学生には容易である。逆に教師には生徒の見分けができない」が参考になる。

仏文の吉江喬松が優れていると見たから受講したのであり、新しい学問だった比較文学を学び、付属の高等学院の英語の教官となる。同時にこれもまた時代の趨勢であったのだがロシア文学への傾斜を強め、ドストエフスキーに到達する。学院に作文の教科があり、その作文に木寺黎二のペンネームが初出するが、イギリスの歴史小説家ベイトターの作中人物、余命幾ばくもない青年の「与えられた瞬間を宝石の硬さをもって生きよ」への共感が記されている。戦後の講演・演説で多用した文言である。ドストエフスキーはこの延長であって、私の推察では『白痴』の副人物イッポリート青年がきっかけである。これもまた肺結核で余命幾ばくもない青年で、そうした運命をよぎなくさせた神を呪詛し、キリスト教が自殺を禁じているので、これに抗議するために自殺を目指す（失敗するが）。

ペレヴェルゼフは『悪霊』論である革命後の論文「ドストエフスキーと革命」においてドストエフスキーの後継者としてゴリキーを始めとした四人を挙げているが、革命を受容したゴリキーとは真逆に、その一人アルツイバーシエフなどは革命を呪詛して亡命した人物である。しかし日本では相当に読まれ、芥川龍之介、広津和郎その他に影響も残した。中心的訳者は外村史郎であり、『永遠の幻影』（共産主義を戯画化）の訳者解説からは強い共感が読み取れる。ソ連崩壊後に多く現れた「（社会主義）革命クーデター」説の先駆とも見える作品である。東京外語での弟子である蔵原惟人が早大片上伸に従って革命を受容、モスクワ遊学を経てプロレタリア文化運動の指導者になる。するとこの影響をうけ

て左傾、三木清の研究会で木寺黎二とも交わるに至った。しかしそれらの訳書は自宅には残っており、子息の江川卓氏は早くから触れ、影響を受けていたと思われる。

とはいえ戦後はスターリン時代であり、蔵原氏は非転向の共産主義者として活動を再開しており、江川の最初の翻訳は蔵原との共訳である。しかし用心深く、共産党に入ろうとした気配はない。外村史郎氏が戦犯とされて帰国できないことで、ソ連への疑いを強め、父のアルツイバーシエフ訳書を開いてみることはあったとみる。

私は江川さんとは親しくなり、酒を飲んで語り合い、氏が早稲田の私の下宿に泊まってゆくほどだった。そのような1959年の正月、招かれて正月、杉並区の江川家に客になった。蔵原氏とソ研文学部会の大先輩でゴリキー専門の山村房次が招かれていて、他には江川母堂があった。

蔵原氏にお会いするのは三度目だった。最初は1954年、呼ばれて伺った田無の横田瑞穂先生宅で、散歩がてらに子ずれで立ち寄っていて、横田さんにうながされて若干の質問をした。二度目は1956年12月松尾隆教授が早朝に亡くなった日の夜で、夜半遅く高田馬場から下宿に帰る途中計報を聞き、お宅に立ち寄った際である。先客であり、しかしこの日の最終の弔問客として連れを伴った氏がいたのである。風邪を召されていて、頼まれて薬局にゆき、持ち帰って、夫人からパリの蜷川譲あての国際電報を頼まれて辞去。

蔵原氏は学生時代足しげく外村家に通ったようであり、幼い江川さんは「オジちゃん」と呼んでいたようであり、それを踏襲(?)して江川母堂は、当時から年数がたっているにもかかわらず、氏を「叔父ちゃん」と呼んで話しかけ、蔵原氏もそれを受け入れていた。

江川氏は私よりも五歳は年長で三十歳になろうとしていたのに独身で、雑談でそのことが話題となったとき、母堂が「瀬川さん、お嫁さんを見つけてやってください」と言い、氏が「お母さん!」とたしなめる一幕があったことを付記する。どうして私に言われたのかはその時同様、今もその理由がわからない。

新年会は江川の独壇場、ひとりでソ連の文芸政策批判をぶちまくり、これに対し蔵原氏は一言も発しなかった。「沈黙は同意を意味する」のロシアの諺にしたがえば、江川説を認めたことになるのであり、しかしそれは蔵原氏のたとえば「スターリンと文学」(早大大教室での1953年日本ロシア文学会総会で講演)に見られるような公式の立場とは相違に違うのだった。後に私が一時氏を軽視するようになった原因の一つとなった。江川氏が私を呼んだのは、それを私に見せつけるためだったのかもしれない。

蔵原氏の側近の日共黨員ロシア関係者には早大露文出身の鹿島保夫がいて、59年5月早大二文の友人箕浦達二と連れ立ってその家を訪ねると、江川が来客中で昼日中だったがビールを飲んでいて誘われて加わった。テレビでは皇太子夫妻の婚礼パレードが実況放映されていて悪口(?)を言いながら飲んだ。2001年江川の葬儀の折、会場入り口で故鹿島保夫人と出会い、並んで焼香している。

私がペレヴェルゼフに拘るのは、それがきわめて優れたマルクス主義文芸批評家だからであり、その完訳がなされていなかったことが、日本のマルクス主義とドストエフスキーの双方の理解に甚大な損失を与えていたと信じたからである。しかし教授が伝達して欲れたならば、私はそれをしていたのであり、日本のドストエフスキーは現にあるような形にはならなかった。

実際はどうであったか？ 教授はペレヴェルゼフについては一言も伝達しなかった。教授をよく知る吉田嘉清によれば、戦後もずっと体調は優れなかったものであり、四十九歳の死は突然ではなかったそうである。私としてステッキについて登校する姿から普通ではないことは知っていた。死に遭遇しても当初私はいかなるショックも感じなかった。

「政治活動はしません」という誓約の強要で始まった大学生活だった。私は主任教授とともに同席していた三人の教授・助教授をも許すことが出来ず、嫌いだった。小林勝は『断層地帯』でそのように記しており、私は同感だった。これは大学院への進学などはないえなことを意味しており、病気でその席にいなかった松尾隆が翌年から大学院で教鞭をとることを知り、それで進学しようとしていた。それが不可能となったのだから、ショックを感じて当然だったのだが、すぐには感ぜず、年が明けてじわりと感ずるようになった。傍目にも目立ったような憔悴だったようである。

故教授の家で蔵書の整理をしていて休憩時に吉田から「君は、ロシア語は話すか？」と問われ、「露文の学生ですから話しますよ」と答えた。次の日に会うと「日本原水協は七月の訪ソ使節団の通訳に君を決定しました」と告げられた。驚いて「(まだ)通訳という柄ではありません」と断わると、傍らにあった姉妹団体の日本平和委員会事務局の横山浩二(仏文出身)の「なーに、向こう(ソ連側)が通訳を用意するよ」と口添えされて私は応じた。帰路遠回りして大隅講堂の前に出た、真冬の夜空になる鐘の音は私への祝福とも聞こえ、まことに格別な気分だった。

七月の下旬、原水禁運動に係わった、最年少でも四十代だった五人の年長者に混じり、ただ一人二十代前半で、盛大な見送りをうけて羽田を飛びたった。四発エンジンのオランダ航空機。マニラ、バンコクと着陸し機外に出て休み、カラチだけが格別ではホテルでシャワーを浴びて横のなり、ベイルート、ローマは同様、アムステルダムでは一泊している。スカンジナビア航空機に乗り換え、コペンハーゲンでソ連航空機に乗った。

その半年前に日ソの国交回復宣言があり、真っ先に来日した一人に世界平和評議会、ソビエト平和委員会で要職に在った作家のエレンブルグがおり、長崎で親しく交わった杉本亀吉氏が加わっていたので、モスクワ着の翌日には一行を郊外の別荘に招いてくれた。妻妻子を失い傷ついて一人残り活動家となった人である。クレムリンでのブルガーニン首相との会談が設定されていて、自身の広島・長崎での見聞を反芻して語り、「どうか体験を率直に話してってください」と励ました。

私とも個人的に話す機会があり、「ロシア語はどこで学んだのか」と問われ、出身代の露文科の名を言うと、「ソ連作家ではだれを好むか」と問われ、まだスターリン批判依然

尾空気を伝えその代名詞ともなったエレンブルグの小説『雪どけ』は読んではいたのだが、あまり感心してはいなくて、「レオニード・レオーノフです」と正直に答えた。すかさず「君はレオーノフが読めるのか？」とのことで、一瞬「その程度のロシア語（の力で）」と言われたのかと思ったら、すかさず「私は辞書を使いながら読んだ。古語が多すぎるのだ」とのことだった。確かにそれはそうだった。最も問題の多い戯曲『襲来』もこの題名も古語と言えば古語なのである。扱っているのは「大祖国戦争と呼ばれた同時代の戦争だったが、作者はロシアの全歴史を踏まえて描いていた。招待者であるソビエト平和委員会のコートフ書記長がその日の夕食会で「長瀬君はレオーノフ氏に関心がありとかで、同氏はわが委員会の理事でもありますから、私は会見を斡旋できますが、いかがですか」とわが団の団長に問うた。「彼は団から離せません」と断わられて実現しなかったのだが、この実現が後に留学の最重要目的となった。しかし試みてそれが果たせなかったのであり、会見が実現したのはこの時から数えて六年後、日本文芸家協会との交流によるソ連文芸家の来日の折においてだった。

このレオーノフ氏の没年は1994年、すなわちソ連の崩壊三年後であるが、ソ連とは何であつたかを問うとき、専攻ジャンルにかかわらず、彼に触れることなしには真実には到達しえない重要な作家である。私自身はどうだったかといえば、東京での会談後数年してこの作家を離れた。わが最初の作品『樺太よ遠く孤独な』には冒頭部でチェーホフの『サハリン』を紹介し、後半でエンゲルス、レーニン、否定的にスターリン、そしてドイツチャーの言説に触れている。しかしいかなるソ連作家にも言及することなく、『ソ連は1984年まで生き延びるか』からの引用を行った後、最後に掲げたのはベトナム生まれのフランス女性作家マルグリット・デュラスの『ヒロシマわが愛』のうちの言葉である。「耐え忍ばなければならぬということ、そうしたことを知ること、それはまた、おそらく叡智を知ることになるのだわ——だった。それというのもこの作品によって私の人生が決定されており、樺太を表題としつつも、このことを明らかにしないで作品を閉じることができなかったからである。

それから世紀を挟んで長い年月が経過しており、私は十指に近い本を出してきた。すべて旧ソ連、ロシアがらみのものであり、2022年以降では「ロシアのウクライナ侵攻」の時代に遭遇、わがジャーナリズムの連日のプーチンのロシア非難・批判の報道に接することになる。また同時に希少にして貴重なプーチン擁護の言説にも接することになった。その代表的な一つが、すでに言及しているエマニエル・トッド（1951〜）である。

ソ連の反体制の文筆家に依拠しているとはいえ独自な人類学による『最後の転落』（76）でソ連の崩壊を予言、これが的中して名を知られ、2015年フランスでのいわゆる「シャルリ」事件に際し、それに露呈したイスラム恐怖症を批判、全フランスの反発を受けて孤立、救いの手を差し伸べたのは日本の出版界であった。かくて頻繁に来日、日本のめり込みつつ、ウクライナ問題については米英のアングロ・サクソンが仕掛けたもの、

ロシアにとっては防衛的な性格のものと結論・主張する大著『われわれはどこからきて、今どこにいるのか』上下二巻（2022）を著した。ソ連崩壊後のロシアの立ち直りを認め、対するに米欧の混迷を剔抉、米トランプの登場の歓迎等々わがジャーナリズムの大勢とは対立するもので、私は教えられ、また共感したのであるが、述べたように「愛する日本」への提言のうちに看過できないものを見る。

初来日の際、すぐに広島に飛んだとのことであり、その口から「日本の核武装」の提言（『老人支配国家日本の危機』2021）がなされているのである。「核とは戦争を不可能にするもの」だからだそうで、これはトッド氏が広島で「何も見なかった」ことを示すものなのである。デュラス『ヒロシマわが愛』は、抱擁する日仏二人の男女の次の言葉で始まっている。

彼——君は広島で何も見なかった。何も。

彼女——私はすべてを見たの。全てを。

彼女——だから、病院、私はそれを見たの。私はそのことに自信があるわ。病院は広島に存在しているのよ。どうすれば私が、それを見ないでいることができたでしょう？

彼——きみはヒロシマで、病院を見なかった。君はヒロシマで、何も見なかった。

彼女——四回、資料館に……

彼——ヒロシマのどんな資料館？

彼女——四回、広島の資料館に。わたしは人々がゆっくり歩いているのを見たわ。人々は、思いに沈んで、ゆっくりと歩いているの、いろいろな写真や再構成されたいろいろなものの間を横切って、（略）

私は、平和広場では熱かったわ。平和広場では、一万度だったのね。どうしてそれを知らないでいられるでしょう？ （略）

彼——きみはヒロシマで、何も見なかった、何も。

私はトッド氏がこの映画を見ていなかったはずはないと考える。しかし敢えて言う、「あなたはヒロシマで何も見なかった」のであると。

四章 マルグリット・デュラス讃

再びドストエフスキーの小説の構造である。例えば処女作『貧しき人々』は往復書簡形

式のもので、そこに至る経緯は作品の進行の途中で明かされる。これと同様に、国籍を異にする一組の男女が一夜を過ごすためにはそれに先立つ経緯があったはずなのだが、それが明かされるのは朝、目覚めてからである。フランス女性映画撮影のために

広島を訪れたていて、撮影は後一日、二十四時間を残すのみであり、明朝には広島を去るのである。ホテルから撮影現場に向かった彼女はそれが終わった時点で彼に発見され、フランスの故郷の町であるヌヴェールでの戦争末期の痛苦の思い出、それが原因で、広島で彼と一夜を過ごすことになったドイツ兵との恋愛について語る。

第二次大戦下のフランスでドイツ将兵を相手に売春した女性はいたのであり、戦後それなりの処罰を受けたようである。拉致された彼女たちが並んで歩く写真を見たことがあるが、連行する男たちの顔が良くなかったことを覚えている。戦後の日本の例もあり、生活苦のためによぎなくされた女性もいたはずだからだ。とはいえ彼女たちが当時の通念・良識に反する存在であったことは疑いなく、ドイツ兵を愛した女主人公の設定には違和感を抱いた人々はおおり、先に記したように、サルトルなどはドイツ兵を反ナチと想定しさえした。作中にそれを示すものが皆無であるにもかかわらず、である。描き出されているは、それが真実の愛だったとする女主人公の主張である。なぜ罰せられなければならないのかと彼女は怒り狂うが、肉親たちからさえ理解されない。彼女は殺された恋人に深く囚われており、その存在から逃れえずにいる。

彼——君の主人はそのことを知っているの？

彼女（躊躇の後）——知らないの。

彼——では、ぼくのほかには知らないんだね

彼女——そう。

彼女は広島に来て初めてそのことを話せる相手に出会っていた。

彼女——あなたはまだ死に絶えてはいなかったわね。

私は、私たちの物語をしゃべった。

十四年ものあいだ、私は二度と見出していなかったのよ……あのむこう見ずな恋の味を。ヌヴェール以来よ。

ごらん、私がどんなにあなたのことを忘れているか……。

彼女が広島で忘却できたのはヒロシマの苦難がヌヴェールのそれをはるかに上回ってからである。こうして彼女は「ヒロシマに留まりなさい」というヒロシマの日本人のことに従い、留まる決意をするのであるが、サルトルらが提起した疑問は残った。

これに答えたのが、先にすこし触れた次作の『愛人』だった。

作家の初期作品に仏領インドシナと呼ばれていたベトナムでの少女期を題材にした『太平洋の防潮堤』という作品があり、主人公の少女と特殊な関係にある資産家のムッシュ・ジョーなる人種不明の人物が登場していた。父が早くに亡くなり、学校教師の母が働いて貯めた金で買った土地が高潮時には海水に覆われ耕地に適さぬもので零落し、生活苦に生きる一家の物語だった。意識的に隠ぺいされて描かれていたこの人物が『ヒロシマ』のドイツ兵であり、ヌヴェールの少女とはデュラスその人であったことが『愛人』において明かされた。

ヌヴェールはロワール河沿いの小都市で、瀕死のドイツ兵から引き離され、丸刈りされた少女は、地下室で戦勝を祝うラ・マルセイエーズの歌声を聞く。広島の日本人の男は彼女の半狂乱の告白を聞きつつ、一瞬自分がそのドイツ兵になったかのように錯覚し、「君が地下室にいたとき、ぼくは死んでいたの？」と問い、同様に錯覚しているフランス女は「あなたは死んでいたわ」と答える。そしてこのあたりからヒロシマとヌヴェールの一体化を目指して物語は進行し、彼女は（私はもう祖国などもちたくない。私の子供たちには、他人たちの祖国の悪意と無関心、叡智と愛を、死ぬまで教えるわ）と独白する。ムッシュ・ジョーとは「中国人。この植民地の民間不動産のすべてを掌握している華僑資本家といふごく少数の人々のひとり」で「中国北部の撫順」というから旧満州から移住してきた家の生まれ、「十二歳年長でパリに遊学しており、フランス語を話す」人物であった。

「わたしは言う、いま自分が落ち込んでいる不幸を、個人的な問題として話しているのではない。母の給料だけで食べ、服を着る、つまり母の給料だけで暮らすのは単純にいつてどんなにむずかしいことだったかを、私は彼に物語る。みんなが家を飛び出してしまったの。貧困のために家庭は崩壊してしまった。みんながてんでに家を飛びだしてしまったの。そんなわけで、わたしはいま、あんたと一緒にここにいるの。彼は私の上にいる、मतもぐって入ってくる。わたしたちはそうやって、互いに釘づけになったまま、呻きつづける、はじめはまだ街の喧騒を外部に聞きながら、まだ、それが聞こえる。やがて、もう聞こえなくなる」。

「母の人生に突如訪れた激しい不安。娘がいまこの上ない危険をおかしつつある、断じて結婚なんかできない、社会のなかで位置なんか定めえない、徒手空拳のまま身を持ち崩している。発作を起こすと母は私に跳びかかる、部屋に閉じ込める、げんこつで殴る、大声でわめきだす、うちの娘は娼婦だ、外にたたき出してやる。傷ものなんだ、牝犬のほうがまだましだ。閉ざされた壁のむこうには兄」

売春する少女のなかには作家精神が芽生えつつあり、中国人は自分が相手にしている少女が恐ろしい存在に思われてき、恐れのために離れがたくなる。植民地に生まれて育った彼女には祖国への憧れがあり、勉学に励み、大学入学試験は二次まで合格する。母国ではさしあたってどれほどの金が必要かが母との間で話題となり、「売春」はそのためのものだ。またそれは跡取りとして妻帯しなければならなかった中国人にとっても願わしいこと

だった。こうしてメコン河に面したサイゴン港での客船による別れの到来となる。

「彼の大型自動車が来ていた。自動車は飛行船会社の駐車場から少し離れたところにぽつんと一台だけ停まっていた。その前には白い服を着た運転士が立っていた。ほとんど見えぬあの形、それが後部座席の彼だった。彼女は渡し船での最初の出会いのときのように、手すりに肘をついていた。彼が自分をじっと見つめていると彼女は知っていた。彼女も彼をじっと見つめていた、もう見えなかったが、それでも黒塗りの自動車のすがたの方をじっと見つめていた。それから自動車ももう見えなくなった。港が消えた。それから台地もまた」。

『ヒロシマ』との比較で目立つことの一つは、『愛人』では白人の娘という言い方で

「白人」が頻出し、前作では皆無のこの言葉が強調されていることであり、それは別れの場面にも出てくる。タグボートに曳かれ河の中央部に達した船は、最後の汽笛を「長く長く、恐ろしい力で鳴らす。その声は神秘的なまでに悲しく、人々の涙をさそう」。見送る人も見送られるひとも、すべてが涙を流すこのとき、「彼女もそうだった」。しかし彼女は「涙を見せずに泣いた」のであって、それというのも「彼が中国人で、そんな種類の愛人に涙をそいではならぬときまっていたからだ。自分の抱く苦しみを母にも下の兄にも見せずに、まるでこれらが彼らのあいだでは慣れっこのことだというように何ひとつ態度に示さずに」であった。しかし離れた場所に駐車する「愛人」を同時に見つめていたのであり、心の中では泣いていたのだった。これは『ヒロシマ私の恋人』の訳語も有る作品で、非白人の日本人を描きえて達成することのできた記述と見なされなければならない。

『愛人』について「エキリチュールについての本」とする見解がある。すなわち「書くとはどういうことか」についてのものであるということであり、実際作品の冒頭にはそれが展開されている。

「私の人生はとても早く、手の打ちようがなくなってしまった。十八歳で私は年老いた」と始め、海を渡ってフランスに来てからは時の歩みが普通になったと回想する。「私は自分が極度に羞恥心をもたざるをえないような環境で、ものを書き始めた」と告白され、ムッシュウ・ジョーと隠ぺいせざるをえなかった青春の出来事を物語ることが出来るようになるためには、ヒロシマを体験する必要があったのであり、そのことを告白する。すなわち右の引用に「あの人たちにとって書くとはまだ道徳的なことだった」の文言が続くのであるが、「あの人たち」とはヌヴェールの女に疑問を表明した人々を指すだろう。

レジスタンスは正しく賞賛されるべきものだったとする道徳観では、ただそれだけでは律せれない、律しきれない真実が存するのである。「書くということが、すべてを混ぜあわせ、区別することなどやめて空なるものへと向かうことでなくなったら、その時には書くとは宣伝以外の何物でもない」と宣言して始められているこの作品では、過去を物語る箇所で未来推量形が使われたりする。そしてそれが違和感を与えず、まったく自然なのは、「であった」と結論するためには、対象とする出来事が十分に明確ではないからである。問題は、それにもかかわらず書かないではおれないことだった。

作品の終結はインド洋を渡る客船での出来事である。一人称の「私」で始められていた記述は、船が岸壁を離れる場面から三人称の「彼女」に代っていった。その彼女は、乗客の一人の青年の遺書も残さぬ投身自殺に遭遇し衝撃をうける。ところがすぐに行を変え、「いやちがう、これを書きながら彼女の目に浮かんでいるのは船ではない、別の場所、彼女がこの話を聞かされた場所だ。サデックだ」ということになる。サデックとはその学校長の母の家の場所で、デュラスはそこからサイゴンに通学しており、そこには自分と同じように悪評であるだけではなく、行政長官夫人として赴任してきたとき、それまで関係のあった青年が広場でピストル自殺したことで知られた年配の女性がいたのであり、船上で反射的に思い出したのはその青年の方なのである。暗い夜の船上にシヨパンの曲が響き、娘は自殺を指すようにすつくと立ちあがり、「彼女は泣いた」。そして彼女は、愛しているとは思っていなかったのだが、実は中国人の男を愛していたことに気づく。

こうして到着した祖国フランスであり、間もなく始まった大戦であり、戦後の生活である。共産党に入るが数年で去る、それは「個人な問題の政治による解決を信ずる」ということに存する迷信」からの離脱だった。脱却のためだった。そして彼女は、父親の命ずる結婚をしたはずの男の、中国人であるはずのその妻に思いをはせる。男への愛ゆえに母国で「二年間貞節を守った」彼女は、中国人もそうだったろうと空想し、それに中国妻はどう対応したかと空想する。作家的といえばまことにそうなのであるが、しかし彼女が真に愛していたのは文学だった。それは万人を分け隔てなく愛する行為であり、デュラスはそれをすでに『副領事』のベトナムの女乞食などですでに実践してきていた。それらを踏まえて『愛人』では結びの一節が掲げられることになる。

「戦後何年かたって」と作家は母国に到着後の人生を要約し、同一のセンチンスの中で「男は妻をつれてパリに來た」と記す。月並みな挨拶が交わされ、「男はおどおどしていた、以前のように怖がっていた」と注記される。十二歳年下だったのにこの十八歳には威厳があったのである。「女が本を書き始めていたことを男は知っていた。サイゴンでお会いしたお母さまから聞きました」と続く。とすれば『太平洋の防潮堤』は読み、己がムッシュウ・ジョーの名で登場しているのは心得ていたということになる。

デュラスの気弱な下の兄は母とともにサイゴンに残っていて、日本占領下で病死しており、その肉体と自分のそれは一体であると思っていた彼女は、自分もまた死んでもともに永遠のものとなったのだと信じていた。作中の中国人はその兄についても触れ、「お気の毒に思っています」と言った。「それからあとは、男は女に何も言うことがなかった」と続く。

実際はこれとは相違していて、「私はあなたが何か大きなことをするひとだと予感しておりました。そしてあなたは心に秘めていたそれを成し遂げたのですね。どうか大成なさってください」と言ったと思われる。

その男性も、この作品の執筆当時には亡くなっており、すなわち永遠と化していた。こうして結びセンチンスが書かれることになり、読者の涙を誘うこととなった。

「以前と同じように、自分はまだあなたを愛している、あなたを愛することを止めるなんて、けして自分にはできないだろう、死ぬまであなたを愛するだろう」。

私がデュラスの名を知ったのは、『ヒロシマまでの長い道』に記したように、1959年8月、ウィーン友好祭が終わり、国際学連の拡大評議会出席のためブタペストに移動していた時で、発行されたばかりの同会の機関誌『World Students News』の最新号によってであった。主演の岡田英次とエマニエル・リヴァの語り合う場面が大写しになった映画紹介の大きな記事だった。続いて十日ほどのちに東京で封切られたばかりの実物を見た。以来デュラスを敬愛する者であり、邦訳されたものは全部読んで『樺太よ遠く孤独な』の執筆に入っている。

私の人生は樺太でソ連占領下の一四歳の年の故郷の遠淵行の際に決定されていた。私は別れに望んだ湖と山々に永遠と絶対、そのようなものとしての真実を認め、それについて書くことを生涯の目標として定めていた。またそのためにもっとも相応しい大学の学科を早大露文科と定めその学生となった。しかし私がヨッポイマツの記憶を失っていたために書けないままの状態で、敗戦後にロシア人から覚えたヨッポイマーチの意味を説明しようとした。そしてそれは説明した。

しかしそれだけでは不十分だったのであり、ソビエト・ロシアとは、また1917年のロシア革命は何だったのかを説明しなければならなかった。ソ連が発行していた新聞『新生命』は「全世界は、レーニン・スターリンにより創設されたソ連共産党が導く方向に進む」と宣伝しており、はたしてほんとうにそうなるのかを確かめねばならなかった。そしてこれについても或る程度結論が出たので共産党にもはいった。党員の教授であり、日本平和委員会の常任理事だった松尾隆教授に師事、その縁で、教授の没後、日本原水協に起用されてその使節団のロシア語スタッフとして訪ソ、各地を廻り、帰路にはモンゴル、中国にも滞在した、国交回復から一年に満たない時期の大旅行だった。周囲にひとりとして似た体験の所有者はおらず、私は一つの達成を行ったと考えていた。しかし「樺太について書く」という初心の観点からすれば、問題が深化・複雑化しただけで、逆に自分にとって自分が見えなくなった、というそれまでには感じたことのない感覚を味わうことになっていた。

私はそれが樺太での友人知己に会わずに生きてきたことにあったことを、ずっと後に再会が重なるって知ることとなる。また長くソ連貿易に係わって暮らし、毎年その国に行き来して暮らし、ソ連国内のエリート組織であるKGB（国家保安委員会）に見込まれ、難しい仕事を依頼されたりして、その国が崩壊に向かうと結論することになった。そしてその結果樺太が書けるものとなり、ようやく1984年になって樺太の本を上梓しえた。

師事した松尾隆教授は、検察に対して己の姓名さえも認めなかった宮本顕治の絵にかいたような見事な非転向を賞賛、傾倒する人だった。第二語学のロシア語を担当しつつ、その授業を宣伝に活用していた。コミンフォルム批判を発端として生じた日共の分裂にさい

しても、宮本・蔵原の統一会派（国際派）を支持、その方針で学生運動をまとめ上げた。東大を中心に結成された官学連と早大を中心に結成された私学連が全学連にむけて統合するさい宮本の意をたいして産婆役を務めたのは松尾である。その際、問題となったのは委員長をどちらから出すかということで、私学連側では中央大などから早大吉田嘉清を推挙する声が高かった。「私はそれを抑えた。委員長は東大でなければ全国の学生が承知しない」が理由であった。「だが早稲田には早稲田の意地がある。東大の諸君には、ナンバーワンは来ていない、と思わせることにした」。

吉田は早稲田に（全学自治会委員長として）残したのだよ」とのことだった。この深謀は後のレッド・パージ反対闘争に役立った。10・10に早大での総長と自治会の協議を全学連は天王山と見定め、高校までふくむ全都の学生に早大構内に集結を指令、その前での本部ロビーに立った吉田の経過報告の演説は、安東仁兵衛により「一幅の絵」（『日本共産党私記』）と絶賛されている。ちなみに交わりのあった岡田裕之氏（東大、わだつみ会）によると、演説の巧さの双璧は武井（東大、全学連初代委員長）と吉田嘉清であるとのことである。吉田の演説は、これも演説が巧みで『雄弁術』のパンフレットもある松尾にマンツーマンで習ったものであるとのことである。

島原中学校時代持病の心筋梗塞で一年休学し早大高等学院に進んでいる。英語が得意で英文科に進んだが、学院2年の作文に木寺黎二のペンネームが初出しており、木寺は生家の寺を指し、黎二はレーニンを指すと古在由重氏は考証していた。左翼化していたが、健康上の理由で実践活動は控え、勉学に専心した。「学生にとって教授の良し悪しは見定めが容易だが、逆は困難だ」の言葉が残っているが、英文科でありながら大学院は仏文の吉江喬松に就いた。フランスで新学問であった比較文学を学んで帰国、日本で最初の世界文学全集の編集に従事していた。卒業論文は『英国プロリア文学の発生過程に関する前史的研究』というものでエンゲルスの処女論文に学んだものであるが、独露の未訳の論文を原語で記している注目される。大学院卒後ただちに高等学院の英語の教官となり、以後木寺黎二の名で文章を発表するが、その対象は弾圧によるプロレタリア文学「壊滅」後の日本文学に及び、昭和十年代の『早稲田文学』の中心的評論執筆者だった。しかしこの木寺時代の代表作は三笠書房刊ドストエフスキー全集の別館として出された『ドストエフスキー文献考』であり、これは小林秀雄、埴谷雄高をはじめとする多くの人々に多大な影響をおよぼした著書である。

時代の風潮だったとはいえ早くからマルクス主義とロシア革命を受容していたにも係わらずドストエフスキーに傾斜したのは何故であったか。それは生来の持病に由来する短命の自覚であり、先に述べたように、似た境遇の『白痴』の副人物、IPPポリート少年への共感のためであった。

IPPポリートのニヒリズムは作者によって発展せしめられ『カラマーゾフの兄弟』にいたって、実の親（と信じている）に認知されない逆境を呪い——「これが分かっていたら胎にあるうちに自殺していた」——認知されているにもかかわらず「神がなければすべて

が許される」などと広言している次兄への当てつけをも目指し、かつまた今一人の長兄に罪をなすりつける周到さをももって、実父の殺害を敢えてした。『カラマーゾフの兄弟』とはそのような意味合いでの「父殺し」の文学なのである。

かつまたこの小説には、生じた父殺し事件をめぐる裁判まで描かれた大小説であつて、そこでの弁護士は「殺害された『カラマーゾフ老人のごときは父親と呼ぶことはできず、また父親と呼ばれる資格はありません。父親にあらざる父親にたいする愛は不合理であり、あり得べからざるものであります。愛は無から創造することはできません。無から創造するのは神の御手だけなのです。『父たる者よ、なんじらの子を哀しまさずな』」と主張している。

すでに挙げてあるプーチン鼻根の現代フランスのエマニュエル・トッドであるが、ロシアから入ってきたものとして「共産主義とドストエフスキー」を挙げている。あたかも両者が対立関係にあるかのようなのである。また「マルクス主義は伝統的にプチ・ブルジョワをバカにしてきた」の記述がある。しかしこれはペレヴェルゼフの『ドストエフスキーの創造』を知らず読んではないからであつて、読んでみるならば、彼ほどの人物ならば、一読して、そこにドストエフスキーについての秀抜なマルクス主義的把握があることを知るはずなのである。ドストエフスキーはロシア革命に先立つこと五年前の1912年にマルクス主義的に「つまりは「共産主義的に解明されていた。かつそれはその姉妹編ともいべき次作『ゴーゴリの創造』とともに革命後のソ連で絶大な権威をもったものなのであつた。

繰りかえすが早大露文科は二度目のソ連遊学から帰った英文科教授片上伸により1928年に創設されたものであり、両著書は持ち帰られて図書館に収められている。しかし読了した気配はなく、この最初の紹介者となつたのは第一回の卒業生で大学に残っていた岡沢秀虎だった。三笠全集が始め、ドストエフスキー・ブームが起こっていた頃のこと、全十八章の内の数章が分散的に訳され、全貌が知られぬままに大戦がはじまつた。先の『ドストエフスキー文献考』に「画期的名著」と記し紹介していた木寺黎二はほぼこの時期にその全訳を目指し、ざっと訳了したが完成せず、敗戦を迎え、同時に中断。木寺黎二の名は捨て本名に立ち返り、マルクス主義の啓蒙家として活動することになった。

ペレヴェルゼフは日本で紹介され始めた頃、本国ではスターリン派の激しい攻撃にさらされ「失脚」、戦後幅を利かせることになつたのは、攻撃者の一人だったエルミローフであり、その『ドストエフスキー』がソ共の公式見解として日本ソビエト研究者協会訳で出版されるという有様で、1956年にソ共二〇回党大会のスターリン批判を迎えたのである。

それは私が学部最高学年生で最も親しく教授のお宅に出入りしていた年であるが、ペレヴェルゼフについては一言も聞かなかった。聞いたのは「翻訳というのはつまらぬ仕事だから、君はしないように」ということであり、「まあ、一つか二つやって、ロシア語ができることを見せておくか」と笑っていた。そういう人にやり遂げずにいた翻訳があらう

とはまことに夢にも思わずにきたのである。

その年の最後の講演は日本平和委員会主催のもので会場は明治大学だったが、次の文がある。

「わたしは戦争がおわってからつくづく考えました。自分の一生涯けしやることのできない最大の汚点です。しかもわたしは教師は教え子を多く殺している。いまでも時々、別れにきた学生の姿を夢にみるがあります。その人たちの霊をなぐさめるためです。そして若い今の学生や子供にみじめな思いをさせたくないし、自分もしたくはありません。この実感に支えられて平和運動をやっているのです。実感を理論にまで高めるのはその後のことであって、決して理論が実感に先行するものではないことを申し上げたい」。

この年の末、一二月に亡くなり、大隅小講堂で日本平和委員会と日本ロシア文学会共催の平和葬の名の葬儀が行われ、すぐに続いて同じ会館で「偲ぶ会」が行われたのだったが、右をふくむテープが流された。そしてそれから三十年後、同じ場所で「偲ぶ会」がおこなわれ、この日に合わせて文集『松尾隆』が製作発刊された。このとき松尾夫人が保管していた教授の遺稿が開封され、そのうちに『ドストエフスキーの芸術』というものがあり、その第一章が未整理の状態で文集に掲載され、私がその後に当の原稿を読み、一年におよぶ調査研究の後、ペレヴェルゼフの『ドストエフスキーの創造』と特定したのである。それらの経緯を詳細に記し、1989年にみず書房から公刊した。

私は樺太のその後、妻との出会いから求婚に至る経緯をしるした作品『ヒロシマまでの長い道』を書き終えていたのだったが、四年のあいだ発表を手控え、訳書の出版社が決まってからその発表にとりかかり、その際、吉田嘉清に全文の校閲を求めた。作中に匿名においてであったが氏が登場しているからで、その記述への同意をうるためだった。

それは1957年の原水協からの最初の訪ソに続く二度目のソ連行であり、私の人生の最大の転機となった旅であったが、もしも教授がペレヴェルゼフについて一言でも伝達してくれていたならば、行われなかったという意味で吉田氏とは係わりを無しとはしないものだった。

コミニズムはマルクスに由来する言葉であるが、それを現実化したのはロシアのレーニンであり、したがって「コミニズムとドストエフスキーは（フランスに）ロシアから入った」とトッドが言うとき、彼は間違っていない。双方は対立関係にあると把握されていて、それも実状を指摘するものとして誤っていない。しかし双方は深いところで繋がっていることを、トッドは知らない。

ペレヴェルゼフは1882年にウクライナのハリコフ生まれ、同市の大学の物理数学部卒の若い社会民主党員、捕縛されて東シベリアに送られた三〇歳の青年によって、1912にマルクス主義的に解明されていた。以後これを超える著作は、私の『ドストエフスキーとは何か』（2008）まで現れてはいない。

トッド氏は先の二つに加えて「トルストイとツルゲーネフも入った」としているが、ペレヴェルゼフは両者をプーシキンに始まる地主貴族文学の完成者と定義、その特徴を「憂

鬱の深化」と指摘した。すなわち彼らは己の属する階級がその全盛期を終え没落から消滅に向かいつつあることを自覚しており、憂鬱にならざるをえなかったのであって、作品はそのようなものとなった。基本的にはこの派に属しつつ、若干の作品で都市の小市民を描いた作家にウクライナ人であったゴーゴリがあり、この部分を継承し拡大完成したのがドストエフスキーなのである。作品の内容がまったく新しくなり、それに対応して文体と構成も革新されたのであり、ペレヴェルゼフはその有様をマルクス主義者であるにもかかわらず——あるいは、そうであるからこそ——「まことに**新しい酒**は古い革袋には盛りえないものなのである」とマタイ伝9章からの引用をもって定義した。

1905年の第一次革命（血の日曜日）の敗北後の反動期であり、マルクス主義的用語は極度に抑えられており、邦訳すると「小市民」とする以外にないのであるが、ペレヴェルゼフはドストエフスキーの人物をすべてメシチャーニンであるとし、この語に自注を添えている。要するに中産階級人であり、上層と下層の間にあってうごめいている存在であり、第一作の主人公ジェーヴシキンの精神は存在形態の二重性を反映したドヴォイニク（二重人）である。この語は第二作の表題であり、この作に初めて登場するが、2を表す数詞に由来しピーナツのような二重体を指す。下級役人ジェーヴシキンにおいては上層への羨望と下層への転落忌避のあいだでの抗争が内的特徴であり、先例としてゴーゴリの『狂人日記』があった。役所でのみじめな日々と、それとは表裏をなすイタリアの貴族になった夢想を日記に記す主人公はその矛盾が極限に達し、日記は混乱した記述となって終わり、主人公が発狂したと読める。ドストエフスキーのそれは女性を加えて主人公を複数にし、日記を往復書簡に代えた作品である。

ドストエフスキー作品の構成上の特徴として、ジェイストヴィエから始まり、終結に至って発端を示す特徴がある。事物を著すデエーロから派生し、「事件、行動、場面、舞台等々の多義を有する名詞であるが、二人の人物の書簡から始まっているということは、そこに至る過程があったはずで、読者にそれが知らされるのは、書簡の進行の過程においてである。

一人称と三人称の場合があるがドストエフスキーの作品には後期になればなるほど、作中に語り手が登場する。もっともこれは第一作のワルワラに早くも現れていた。彼女は「この秋死ぬのだという」思いに取りつかれていて、「いつも部屋にだれか別な人がいて、その人が私と話しているような気がしてくるのです」という異常な感覚の所有者である。男ともども「書き魔」であるが、その度合いは彼女の方が大きく、己の過去を物語る手記を記していてそれを男宛ての手紙に添える。ドストエフスキーその人が女装して作品を作りあげているのである。

その手記にしろされていた悪い男との係わりで、彼女は街を去ってその男のもとに行くことになり——どうせ死ぬのだからどうなっても構わないと思っている——ジェーヴシキンは悲しむが、それはせっかく相手が見つかったのに、それが不在となって彼がもはや手紙を書けなくなったからである。すなわち作品は発端を明かして終わっている。

作品の中心に立つのは二重人であるが、これが分裂して片方だけになった「我意の人」変種である「温順な人」が並行して登場する。イワン・カラマゾフの二重人に対してその完成形がキリロフとゾシマである。両者は正反対の原理から出発しているが、ともに「生活の解体と崩壊に至るもの」である。生きているのは二重人だけであり、それに出口を見出してやるのが、作家の文学的目標だった。

ペレヴェルゼフは当時存在していた二つの相互に非常に異なった批評、すなわちメレジコフスキーのロシア正教的なそれ、およびミハイロフスキーのナロードニキ的なそれを、ドストエフスキーの本質が小市民Ⅱ二重人の描出にあることに気づかないことで同類と退けた。また革命後の「ロシア文芸批評に現れたドストエフスキー」でこれを一層深め、「ただマルクス主義文芸批評のみがドヴォイニクを真正に説明しえた」と自説を擁護した。

ドストエフスキーとロシア革命の問題としては、『悪霊』が避けて通られぬのだが、述べたように、これには削除されて公刊されていなかった「スタヴローギンの手記」の章があった。1922年は作家の生誕百年あたり、ペレヴェルゼフは記念行事を主催し、基調報告「ドストエフスキーと革命」を行い、『創造』の新版に「(序文に代えて)」と注記して冒頭に据えた。そしてこれが二十年代末にスターリン派の攻撃の対象となり、彼自身の「失脚」の原因となるのであるが、そのさわりの箇所をみよう。

「革命的ナロードニキ(人民主義者)とは反対に、ドストエフスキーは革命の一切の理想化に無縁であった。革命とは残忍にして非道德的であり、それは屍のあいだを進み血潮にまみれることであり、それは苦しめられ嘲笑されていた者によって遂行されるがゆえに、苦難をもたらし嘲笑することをよしとするものなのである。革命――それは密閉された釜のなかの蒸気のように、その魂のうちに、復讐の渴望、押さえつけ侮辱せんとする渴望が蓄積されている、抑えつけられ侮辱された者たちによって遂行される事業なのである。私たちは貧しさによって打ちのめされ屈従している人々を見慣れており、彼らのうちに多くの激しいものがあることを知っている。革命においては、虐げられ侮辱をうけた人々の心に潜む激しいものが全面的に発現するのである。革命は恐怖、テロ、専制を随伴する。なぜならば恐怖と忍従に捉えられていた者たちは、恐怖と忍従を教えんと欲し、みづから専制主義者とテロリストたらしめるからである。革命は恐怖、テロ、専制を随伴する。革命のうちには、自由の疑いなしの浄化作用と人間回復の炎がある。何にもできずまた為しえなかった者が革命のおかげで、何でもでき、また為しうる者になるのである。しかしまさにそのような革命のうちに新たな奴隷制の鎖が鍛えられるのである。それは我意から、自由への酔いしれから生まれる。自由に酔いしれて、奴隷は専制者になり、圧迫者になる。そしてまたもや彼は、役割が交代しただけの、出発点に逆戻りする。革命においては自由と隷属がもつれあっている。「専制なしには自由も平等もあつたためしがない、い」とドストエフスキーの衷心の思想を代弁しつつピョートル・ベルホヴェンスキーは言う。この思想のうちに著者の革命についての考察が凝縮され、簡潔な数学的公式のかたち

で表現されている。革命のうちにはなにやら悪魔的に狡猾なもの、悪魔的に悪賢いものがあるのだ。小市民は革命的であるとともに、同時に福音書のいちじくの木がそうであるように、呪いのごときものがかけられているのだ。ドストエフスキーはこの悲劇を「悪魔のヴォードヴィル」と呼びたかったのである」。

「私たちが体験した偉大な革命は少なからぬ規模において小市民の力に負っている。この革命で前衛的主導者の役割を担ったのは、その革命性が別種の性格のものである、プロレタリアートである。ドストエフスキーの時代、プロレタリアートはまだ現われてはいない勢力だった。しかしながらわたしたちの革命がそれによって色濃く染められていないとはいえない、小市民的革命性の理解のためには、ドストエフスキーは現代においてもかけがえない芸術家である。進展する革命の渦中にある私たちが、ドストエフスキーに学ばなければならぬもの、理解しかつ真摯に注意を払わなければならぬものは多いのである。ドストエフスキーは少なからぬ程度において小市民的基礎の上にうちたてられた革命においては、激しい動揺は当然であり、避けがたいことを明らかにし、この揺れ動きによって足をさらわれてはならないと教えるのだ。小市民的革命性の心理のもっとも秘められた隅々を私たちに知らしめることによって、ドストエフスキーはその狡猾な力にたやすくは騙されない心構えを培い、現下の革命の過程におけるもっとも急激な変転に対処しうるものたらしめるのだ。小市民的勢力がとくに強く、プロレタリアートの波濤がこの勢力に強く呑み込まれた現下においてこそ、ドストエフスキーを想起し、革命ロシアの心理分析に捧げられた彼の洞察に満ちた深刻なページを再読することは、まことに適切にして時宜に合ったことといえよう」

これが発表された当時はまだしもであった。二十年代も終わりに近づき、スターリン派による文化学術部門の統制が強化され、ペレヴェルゼフが論文「マルクス主義文芸学の必要な前提」において「文学が政治を代行できないように、政治もまた文学を代行できない。双方に必要なのは、相互理解と協力である」と主張するとペレヴェルゼフたたきが始まり、「ドストエフスキーと革命」の結びの箇所、とくに私が黒字で示した部分がやり玉にあげられ、「失脚」の原因となった。その名は消され、戦後は生死も不明のまま、私などは、訳稿が完成、解説も書き終えた段階で、1982年に一卷選集がでていることを知り披見した。しかし「ドストエフスキーと革命」は収録されてはいなかった。2000年国際ドストエフスキー学会が日本で行われ、ロシア側の代表格のサラースキナ女史が記念講演でこれからの引用を行ったので、質すと自分が編集した論文集に収録したとのことだった。

ソ連時代のドストエフスキー否定はペレヴェルゼフ的な真正なマルクス主義的把握の否定であったと結論できる。これは日本にも影響して、残されていた「遺稿」にはタイトル名は記されていたが、ペレヴェルゼフの名は記されていなかったのはまだしも、序文に相当する最初の章、すなわち「ドストエフスキーと革命」は訳され、通しの頁番号が記入されながら、全文捨てられて欠落しており、続く1章から始まっていたのだった。私が教授

のオリジナルな論文ではなく、訳稿であり、著者はペレヴェルゼフと特定するのに一年も要した原因にして理由であった。

サンクトペテルブルグのドストエフスキー博物館で訪れる外国人では日本人とフランス人が多いと聞いた。その日本人のほとんどは邦訳で讀んでいるのだが、そのうちには同じ作品で邦訳題名の異なるものがあり、また不動のものもある。これに着目して論じた人に江川卓さんがいた。例えば『貧しき人々』は「不幸な人々」と訳しても誤訳ではない、しかし「不幸」が「貧しさ」に起因しており、また「不幸」を含意させるべく「貧しき」と文語にした名訳との解説は見事だった。その他、その他賞賛されるものがあるのだが、一番肝心な第二作の表題が抜け落ちていた。当然触れねばならないのに、困難なので避けたとみられる。ペレヴェルゼフを讀んでいなかったためかもしれない。

2を表す数詞を語根にもつこの名詞を表題とする第二作は、ゴーゴリの『鼻』を下敷きにしていた。つまり「鼻」には「我意」が示めされていた。ドストエフスキーは少女に由来する命名の女々しいジェーヴシキンの次に、野心的に生きようとする露骨を含意するゴリヤートキン氏を描いた。すなわち分裂した一方の名称として用いたのであり、本文では、見知らぬ男に後を付けられて家に帰り、続いて入ってきたその男について、「夜の友人は、ほかでもない彼自身であった、——ゴリヤートキン氏その人であった、——一口で言えば、あらゆる点で彼そっくりの、いわゆる分身だったのである」（江川訳）ということになる。「二重人格」よりも一面では前進しているのであるが、他面では後退しているのである。なぜならば、ドストエフスキー自身は知る由もなかったが、「分身」は仏典に由来し、釈尊がガンジス河の無数の砂のように分かれた存在であるのに対し、ドストエフスキーのそれは、単一で外観は同じだが精神内容は真逆の存在だからである。「分身」の訳語はドストエフスキーの人物の二重性を看過することに貢献した、と見るべきである。

私は訳書刊行の翌年、平和事務所との係わりでバルト三国とチェルノブイリ（ミンスクとキエフ）を旅した。先に立ち寄ったベルリンの旧東地区の旧マルクス・エンゲルス公園では二人の銅像の前に「すべてに間違っていたわけではない」と記された幕と対面、帰路のモスクワでは、かつては予告せずともかならず現れたKGBの諸氏があらわれなかったのも、大変化を感じ、帰国。年末にその国は崩壊した。

フランスのユダヤ人ドッド氏は私同様にアマルリクの『生き延びるか』に示唆され使用して『最後の転落』（1970）を著してソ連の崩壊を予言した人であるが、それから三十余年を経て、ロシアがプーチンの下で復活・復興していると証言し、ウクライナ戦争を米英が仕掛けたものであり、ロシアにとって防衛的なものとした。それに基づいて『第三次世界大戦はもう始まっている』という表題の本——母国では出せない本——を日本で出版した。

生年の1931年に満州事変が起こり、以来日本はずっと戦争をしており、支那事変を経て大東亜戦争——第二次世界大戦——へ、と発展した。最初の「事変」は日本関東軍による暴発・謀略だった。その歴史を絵にかいたような人に会社員として仕えた。彦根藩

の家老の家柄であり、陸軍幼年学校に入るも落馬して骨折、退学を余儀なくされてすでに履修していたロシア語を生かすべく東京外語に転じ、卒業鈴木商店のウラジオストーク店に勤務、業界では北洋材と呼ばれるソ連極東からの原木の草分けとなった。米騒動による鈴木家の倒産後は三菱商事に移り、漢口（現武漢）支店を経て昭南（シンガポール）支店長で敗戦。財閥解体で新設の子会社に移るも、日ソ国交回復の実現を見据えてストックホルムで待機、恢復宣言後最初のビザを取得してモスクワ入りを果たし原木輸入の成約をはたした。後に長期にわたって北洋材輸入協会理事長。

ストックホルムで待機していた時、いま一人日本人に農学者がいたが名前は忘れたとのこと、原水禁運動で私を知るミチューリン農法の学者の名を言うと、「そうだった」ということだった。レセプションでソ連通商事部員が幕末松前藩に捉えられたゴロブニンの『日本幽囚記』に触れて訊ねた。「日本には詩があるか」のゴロブニンの問いに、役人が「日本人はみんなだれでも詩を書く」と答え、ロシア側は理解に苦しんだ」という記述に関連してのものだった。詩を短歌と俳句の意味と理解した日本側に、欧州語の rhyme(韻)に相当する概念がないために生じた誤解であった。ロシア語の達者な人だったが、ロシア側の言う рифма(韻)の意味がわからず返答できずにいるので、私が助太刀し、後に礼をいわれた。ロシア貴族の血筋のブブノヴァ女史のロシア詩の教室で教えられていた。欧語の韻は合わせるのが難しく、したがって詩はだれもが書けるものではなく、ゆえに詩人は特別な人であり、その地位は高いのである。

この人に感謝するのは、長子を失った直後、文化大革命が始まり、朝日新聞などが「心に染み入る革命」などと称賛していた1967年春、広州交易会に送り出してくれたことである。

広州（広東）は1957年の訪ソの帰路立ち寄った中国の最後の都市である。同じ珠江ほとりに隣接して立つホテルの、往時には無かった新館に宿泊。開会式が行われた会館は、当時は中ソ友好会館だったものが、ソ連修正主義批判館に名を代えていた。第五回平和友好祭のモスクワでおびただしく多数の「偉大なソ中両国民の永遠の兄弟の友好万歳！」の横断幕を見ての帰路であり、まことに感じいったものだった。時は移り、2020年代初頭の今日では、1917年の革命が祝われなくなったロシアとは異なつて、中国は国としてそれを祝っている唯一の国であり、対立時代には武力衝突もあったのに、物神両面で支援している。

1967年の四月、長子の死亡の直後、文革の広州のホテルで中国核実験成功のニュース映画を披見、核爆発の瞬間、会場の紅衛兵たちの「マオツオートン・スーシャン・ワンセー（毛沢東思想万歳！）」のどよめきを聞いた。その夜、夜明け近く夢のなかで公団住宅の我が家に帰り、玄関に現れた長子が微笑んで立つだけで「お帰りなさい」を言わないのに腹をたて、その両肩を揺さぶって目覚めるということがあった。私は声をあげてひとり泣き、その時から、その子の四歳の短い生涯を目標に妻との結婚にいたる経緯を書こうと努めることになった。

露文科などに進んだのは、せんじつめれば樺太大泊の路上で覚えたヨッポイマーチの一語の正確な意味を知るためだった。述べたように入学後ひとり辞書にあたっていて「汝の母親を犯せ」の三語からなる命令形の罵倒の言葉と知った。しかしそれによっては、樺太は書けるようにはならなかった。その語を覚えるに先立って忘却していたヨッポイマツの記憶が甦らなければならなかったのであり、しかし私はその契機・手立てを欠いていた。

爆心地から1・3キロの近距離被爆者に求婚するにあたり、私は虚弱児、奇形児の父親になる危険を考えなかったのではない。私は彼女への牽引が樺太の、それが判らぬために書けずにいる何かに起因していると思っていた。それで「たとえ生まれても、その子が樺太を明らかにするだろう」と願い信じて求婚していた。そして実際それは起こったのだが、明らかにするのはいなかった。原因は私自身にあった。私は別れに望んだ故郷の村の自然に永遠の真実を見出していて、それが己に確固として存在している以上、そこでの友人知己を探し訪ねて会う必要はない、と傲慢に信じて生きてきていたのである、

私が書かなければならないと思っていたのは、ヨッポイマツだった。しかし記憶が失われていたために、私が目指すのとは違ったのは、「到着した女性」において書くということだった。それはまず北海道の高校生の時は、愛読したゲーテの『ファウスト』に教えられて、「永遠に女性なるもの導きてわれらを高みに上らしむ」にあるような「永遠の女性」であり、進学した大学のロシア語輪読会で出会ったチエーホフの短編『恋愛について』のうちの「もつと高い、もつと重要な何かから出発すべきである、それができぬなら、いっそも何も考えないほうがよい、私が悟ったのはそのことでした」の「何か」であり、私はそれを樺太の村の永遠と絶対を重ねていた。そうこうしていたら恋愛らしい恋愛を経験しないまま日本原水協からソ連に送り出されることになったのであり、その達成を継続発展させるべく、まだそのルートが開かれてはいなかった時期尚早の時期に、性急にモスクワ留学を目指すことになった。

松尾隆が存命であったならば、またもしもベレヴェルゼフについて伝達してしてくれたならば、なされなかった試みで、ウィーンで行われた世界青年学生平和友好祭の日本代表団に加わって行き、フェスバル終了後はモスクワに留学する手筈だった。ところがまさにその団で、永遠にして絶対の真実を体現する被爆者女性に出会ったのであり、帰国して求婚結婚することになったのである。もつともそれは、樺太の物語が書け、また当の被爆者女性がんで右乳房を失い、また一時転移したと診断され、死を確実視する体験をした後、結果として書きうるものになったものである。『ヒロシマまでの長い道』（1986〜9）の成立だった。

第一次世界大戦が存在した。これは当初は欧州大戦と呼ばれていた。イギリスの要請で日本が参戦して世界大戦となり、後に第二次が起こって第一次の呼称が定着した。当初は独逸に対する英仏露の戦争であり、ロシアを追われてスイスにあったレーニンはドイツに

助けられて同国を通過、フィンランドからロシアに入り、帝政打倒の革命を指導した。厭戦思想は国民の間に充満し国軍にまで浸透、革命派はこれを利用、ネヴァ川からの巡洋艦の皇居砲撃が合図となり、楽勝した。凄惨を極めたのは、その後の反革命軍との国内戦であり、交戦諸国の派兵が相次いで災をもたらした。日本も派兵し、もつとも長く居座った。極東各地にはその記念碑があり、わが妻によるとチタの駅のホームの傍らにもあり、ソ連側の通訳の案内で「日本軍による被虐殺者の碑」との説明を受けた。彼女自身はその街を大分県の部隊が全滅したところとして教えられ記憶していた。ついでながらそれよりも有名な場所としてアムール河口近くの北岸にニコラエスクがあり、軍人たちとともに領事館員・居留民の全員が死亡・自決している。

対日木材積出港の一つマゴはここから近く、私はそのKGB代表者と接触があったが、祖母の言葉として「日本人は優しかった」と話した、むしろ第二次大戦後の日本捕虜にたいするソ連の扱いが悪かったと批判していた。「日本人はあれを忘れないだろう」とも言っていた。

ドイツチャーはその優れた『スターリン』で「(戦争で)国民は疲れきっていた。にもかかわらず対日戦に踏み切ったのは、短期で決着し、かつ領土が拡張できるからだ」と述べている。ヤルタ会談でルーズベルトがスターリンに約束したからで、喜んだスターリンはヤルタの目抜きの通りをルーズベルト通りと改名した。それは変わらず今も残っている。

原爆実験が成功してトルーマンはソ連に秘して広島に投下、本土決戦に備えて軍を本土に移動させ、半ばがら空きになっていた満州にソ連は進攻する。樺太にいたっては日本の無条件降伏後の八月二十日過ぎになっての、艦砲射撃を伴った真岡(ホルムスク)への上陸であった。

疲れ切ってドイツから転送されてきた将兵は占領地で乱暴狼藉を働く。しかしこれを身に受けた人々はそれを忘れない。デュラス原作の『ヒロシマわが愛』はソ連でも評判をよび、これを模倣した東宝との協力ソ連映画『モスクワわが愛』が計画された。栗原小巻ふんする被爆者女性にしてバレリーナ志望の女性が、ソ連の援助でモスクワ留学を果たすが、白血病のため、愛するソ連青年に抱かれて死ぬ、というセンチメンタルなものだった。また私がある存在を知ったのは、ずいぶん後のことであるが、樺太の真岡郵便局のソ連侵攻下での集団自決を主題にした独立プロの映画が存在した。この映画上映にソ連が猛反対し、東宝は同時進行していた合作映画『モスクワわが愛』を守るために、この配給を中止している。

この事件は、当時私はソ連グルジャに勤務していて知らなかった。一方で、シベリア抑留の日本将兵の一部が、遠く離れたこの地にまで連行されて使役されていたことに驚きつつ、また大学の近くを歩いていて、「ベトナム人民万歳!」のロシア語の歓声を聞き、ベトナム戦争が終わったと知った。こうして二つの映画をめぐるこの事件を知ったのは、ずっと後、樺太連盟が会員の要望に応じて真岡の映画を上映したからで、興味をひかれたの

は、局員の一部がソ連侵攻前に広島に引き揚げていて、その人たちが樺太を望む北海道稚内の岬で祈りをささげるシーンで終わっていることだった。シナリオ執筆者を探しだしてお会いしたが、私と同年の新京（現長春）生まれ、ソ連軍の行状を目撃していて、「その体験をこの樺太の映画に生かしました」という答だった。満州から引き揚げて広島県に住んだ人だった。

被爆県ではないのにもかかわらず、大分県がウィーン平和友好祭で二名の被団協枠の一人を獲得したのは、木下知事の意向で秘書課長が県原水協の、また課員の一人がそれぞれ事務局長を務めるという体制の確立、および温泉都市の別府に全国の被爆者が利用できる療養センターを作った運動での実績によるものだった。伊勢課長一家は満州の引揚者でソ連を嫌い、辛島和子には夫人に「赤くなつて帰ってこないでね」と「忠告」させている。また60年反安保闘争で社会党右派が原水協を脱会し、核禁会議を立ち上げたさいには、この動きを先導した。妻は結婚により大分を離れ東京の同会に移っていた。療養センターは1976年に創立15年の行事をもち記念文集が製作された。送付されてきたが、「伊勢久信さんに指示されました」と手紙がそえられていた。

トッド氏の著作を読み、歴史家として立つ基礎が一九世紀末フランス国論を二分したドレフェス事件であることを知り嬉しかった。同時代にあつてチェーホフが熱烈なドレフェス擁護者だった。デュラスは『かもめ』を翻案しており、三者はともどもまことの——偽ではない——国際主義者なのである。

ウクライナ問題でのロシアのプーチン擁護および人種差別に起因する西欧没落の予想がフランスのユダヤ人トッド氏の立場であり、母国で出版できなかった自著が日本で迎えられることで大変な日本愛好家になり、それゆえの日本への提言であるが、私は核武装が日本の安全を保障するとはまったく考えない。またシオニズム運動とその結果であるイスラエルの建国および米国に支持支援されての同国の核武装については、何も触れていないことが気がかりである。

ドイツチャーの『スターリン』には多大に依拠し、また「ユダヤ人」問題ではその『非ユダヤ的ユダヤ人』には同様に教えられてきた。

「アウシェヴィッツは新興ユダヤ民族意識とその国家イスラエルの恐るべき発祥の地であった。ユダヤの宗教的伝統を拒否しているわれわれも、今やユダヤ民族というネガティブな社会の一員に属せしめられている。それは歴史のなかで何回となく悲劇的に迫害と絶滅のために選ばれてきた民族なのである。六百万というユダヤ人の死がこんなに新しい生命力をユダヤ人社会に与えたということは、まことに苦しい事実である。私はむしろ

女子供をふくめた六百万の人間が生き残って、**ユダヤ人という概念が減じた方が**よいくらいに思っている。ところがまさにこの六百万のユダヤ人の灰のなかから「ユダヤ人」という不死鳥が飛びたったのである。何という「よみがえり」であろう」。「ユダヤ人で

あるなしに問わず、すべてユダヤ民族の悲劇とその再現の脅威の深刻さを自覚している知識人は、**国家主義や民族主義が最終的に人類の魂に定着するようなことのない社会の建設のために闘うのがその任務であろう**」。

全人類を視野にホモ・サピエンスの発生から解き明かし、アングロ・サクソンによる覇権の掌握とその今日の内的危機を説く人類学者であるトッド氏が、第二次大戦後に起こった国際ユダヤ社会の分裂を知らないはずはない。しかし冷戦終結とソ連崩壊後に起こった米英の反露行動に両国内のユダヤ金融資本の関与を言及しないのは、それらをディープ・ステートと呼ぶ米トランプ前大統領に氏が多大のシンパシーを表明しているだけに不思議である。

その歴史が欧州と並行関係にあることを持って、欧米と並んで世界の三極としてとらえ、極東ではなく「極西」と称賛（であろう）され、なにやら世界の救済国であるかのように、トッド氏により現代日本は期待されている。

私は、しかし、この国は今日にちもさつちも行かなくなっている国であると見なしている。氏が指摘するように「少子化」もその一つであるが、これも経済の悪化が原因であり、それに、氏も気づいているように、2011年3・11の福島原発事故が加わった。事故により五十四基が停止となった。電力不足に陥らなかったのは、サハリンの天然ガスがあったからである、と云われる。

この原発は発電炉の冷却に軽水（普通の水）をつかうために軽水炉と言われ、アメリカで開発された。

地質学の歴史学への浸透があり。「人新世」といった時代区分が現れることになったが、これに先立ってアインシュタインによる核エネルギーの発見が時代を画するものであった。爆弾に使えるもので、ナチスによる開発を恐れた二人の亡命ユダヤ人がやはり同じ亡命者だったアインシュタインを動かし、この人がルーズベルト大統領に手紙を書き、テネシー州オークリッジの原野に国立の研究所が造られる。原爆はそこで開発され、西部の砂漠地帯で完成され、実験成功の後、製作されていた二個がテニアン島に送られ、B29によって広島と長崎に投下された。

核エネルギーは発電にも使用でき、初代所長のウイグナーは、早くもまだ原爆開発以前の時期に、核分裂が物質の化学反応であることで、続いてつくられる原子炉は化学工学の液体の炉になるだろうと予想し、語りまた記した。それまでの電気機械的ものとは異なる以上、「**新しい酒は新しい革袋**」に入れねばならないと見通したのである。

一方わが日本に1928年大分市生まれの古川和男という人がいた。大分市に近接する佐賀関の精錬所所長の子息で早くから父のあとを継ぐ化学技術者に成ろうと思っていたようである。大分中学校から熊本にあった第五高等学校理科に進み、勤労動員で体を壊して伏せ、大分の家が空襲で焼失していたために佐賀関に連れ戻されて敗戦。京大化学科に進み、原子力技術者となった。数年後に家も関西に移った。大分では細い路をはさんだ斜め向かいに家があり、わが妻とは同年生まれの幼な馴染みで、戦後は会わず消息も知らずに

きて、1989年に『ヒロシマまでの長い道』が出、大分の代表紙にその記事が出、七歳年齢下の弟の雅章氏の知るところとなった。この弟氏が妻を訪ねて夫妻で拙宅に見え、同席して私はその兄上の研究について聞く機会をもったのである。

戦後は民主主義とともに科学立国が叫ばれた時代で、英ロンドン大学J・D・バナール教授の『戦争のない世界』(1959)が邦訳され、これに心ひかれて同大に留学、そこでオークリッジの研究を知り、1968年にそこを訪ね、熔融塩実験炉MSREに感嘆しその研究開発を生涯のテーマとすることになった。

米国では軽水炉が建設され始め、危険視し反対する世論が起り、原子力委員会の委員長リエンソールは「近くには住まない」と発言して議会の公聴会の喚問を受けたが、自説を撤回せず、ワインバーグの研究が念頭にあって、原子力そのものは否定せず、「道はあるはずだ」と著書に記した。第三の道の提案であり、古川和男はこれに励ましをうけ翻訳出版している。

実験成功後ワインバーグは安全性、経済性、操作の簡略性のすべてに優れたMSREを知らしめるべく、それとは真逆のウラン軽水炉をゲーテの『ファウスト』にちなんで

Fausten Bergen (悪魔の買物) と罵るようになった。ウラン鉱山を買い占めていた金融業者が政界を動かし、ORNLの予算をけずり、圧迫が加えられてワインバーグは辞任。しかしスリーマイル事故が起って米国で原発は増設できなくなった。述べたように建造中の軽水炉を抱えていたメーカーは日本に売り込むことになった。それはまた政治的にも必要になっていた。

1956年イギリスがクリスマス島で水爆実験を行うこととなり、日本政府までが中止の特使を派遣し、日本原水協は抗議船団を送ろうとしたが、取りやめとなり、これに代えて米・英・ソ三国に国民使節を送ることになった。その趣旨は前年の東京アピール、すなわち①米英ソ三国は実験禁止協定締結のため即時交渉を開始せよ、②交渉締結中はとりあえず実験を中止せよ、であった。私がロシア語通訳をかねる事務局員として起用されたのはこのソ連班であった。

それはソ連がサンフランシスコ講和条約をボイコットしたため締結あれなかった日ソ講和条約が、締結に向けての動きが起った時期と重なっていた。その推進母体は北洋漁業をかかえる水産業界であったが、同業界は水爆実験によっても大打撃をうけたのであって、原水協には多額のカンパを行っていた(行宗一氏による)。鳩山とブルガーニンの間で国交回避区宣言が成されたのは56年10月で、57年の三回大会からソ連の代表団が大いに参加しており、私が参加した使節団は、述べたように、東京に出席する直前のその団の人々とモスクワで交歓している。そして画期的な出来事として翌1958年のソ連による安井郁氏へのレーニン平和賞の授与があった。

米国は原水禁運動の高揚には神経をとがらせ、水爆の被害者には早々に見舞金を支払っている。また安井の受賞には危機感を抱いたはずである。たまたまアイゼンハウアーの「原子力の平和利用」の演説があり、原発を日本に売り込むことによりアメリカのソ連に

劣らぬ平和愛好の意思を示そうとした。またこれを歓迎する日本人がいた。自民党の中曽根康弘およびA級戦犯で巣鴨にあり、朝鮮戦争で岸信介らとともに釈放になり、読売紙の代表者となっていた元警視庁特高官篠正力松太郎であった。米大使館の後援もあり大キャンペーンが行われ、国策として輸入・建設されることになった。

この間の経緯については類書が多数あり、私もすでに述べており詳述を控える。最新の世界向けに英語で書かれた一冊として、邦訳もあるイスラエル出身のラン・ツヴァイゲンバーグ『ヒロシマ・グローバルな記憶文化の形成』（2020、名古屋大学出版会）をあげる。理由の一つは、この書に先行するリフトン『死の内の生命』とともに広島での協力者として私と親交のあった広大原医研の心理学者渡辺正治氏の名が挙げられているからである。また双方とも世代こそ異なれユダヤ人であることも起因している。二人に共通しているのは、私には、自らが抱えるユダヤ問題の解決を目指してヒロシマに取り組んでいる（と見える）ことである。

1991年にソ連が崩壊したのは、直接には1986年のチェルノブイリ原発事故によってであった。クレムリンが秘密裏に処理しようとし、しかし放射能が風で流されて西欧で知られ、東欧諸国の離反を招き、それがソ連国内にまで波及した結果なのである。しかしそれ以前に早くロシア国内で生じていた心理不安があった。聖書の最後に置かれているが、解説によりローマのネロ皇帝の時代と確定されており、従って新約よりも早く書かれているのに、一種の暗号文でかかれていて難解なために新約の掉尾におかれたヨハネ黙示録の箇所起因する。

第三の天使がラッパを吹き鳴らした。すると天から大きな星が落ち、川の三分の一の水の上に落ちた。この星の名は苦よもぎと言ひ、水の三分の一は苦よもぎに代わり、水が苦くなったので多くの人が死んだ。（第8章10～11）

チェルノブイリ（Чернобыль）は「苦よもぎ」を意味し、原発事故は黙示録において予言されていたとする説が口から口へと流れ、ロシア正教の復活とコミニズムからの離反を招いた。1991年に私がミンスクで聞いた話であるが、同年末の崩壊とその後の推移をみると頷けるのである。

しかしながら私がこの一節を含む黙示録をここで取り上げるのは、トッド氏を含む、決して反マルクス主義的ではない思想家たちのマルクス把握にも、欠けるものが、ここには在ると思われるからである。繰り返すが、黙示録はゲマトリーナといわれるユダヤの暗号文で書かれていて、一般には解説不能の文書であり、そこに出てくる「獣」、または666「が皇帝ネロを指すことは解説されており、それは第一次大戦後のロレンスの『アポカプリス論』では継承されている。しかしこのイギリス人は続いて出ている「竜」が何を意味するか皆目見当がつかなかった。まことに遺憾なことに、マルクスが商品と解説していることが、世界でも日本でもこれは未だ一般の常識とはなっていない。

『黙示録』はドストエフスキーにとっても大問題であり、初出は『罪と罰』のラスコーリニコフであるが、イワン・カラマーゾフにおいて決定的に重大となり、拙作『ドストエフスキーとは何か』ではこれを取り上げざるをえなかった。その萌芽は初期の論文『ユダヤ人問題』にみえていたのだが、マルクスは『資本論』冒頭の第一篇「商品と貨幣」において「獣」をネロの像を刻印した貨幣としてとらえるとともに、「竜」を商品として解読した。その根拠となったのは「彼ら（竜ら）は心を一つにして、おのが力と権威を獣にあたえる。その印をもつもの、あるいは獣の名をもつものを除いては、買うことも売ることも誰にもできないようにした。その印は、その獣の名、またはその名の数字である」の文言である。『黙示録』はマルクスによって科学的に解明されていただけではなく、これこそがマルクス主義の核心であり、もともと貴重な学術的達成なものである。

このことの明瞭な指摘と説明は、ロシアまで含む欧米世界ではなく、実はわが日本に、それもただ一人平田清明氏（1922〜95）に見られる説明である。氏の『市民社会と社会主義』（岩波書店、1969）収録の「マルクスにおける経済と宗教」および「キリスト教とマルクス主義」における『黙示録』の秀抜な解読がそれである。「獣」や「竜」が解読されているだけではない、その延長として「大淫婦」がローマ帝国として、「にせ予言者」が「貨幣のイデオログ」、「知恵の実を食べた」が「他人の目を意識した」と、「御使いの尺度」が「人間の尺度」、「原罪」が「未来における最後の審判において裁かれるべき現在と、その原罪を成立させた過去」としてとして説明され、結論として「聖なる都、新しいエルサレム」が「革命を通じての公共社会（コミュニン）の再建」として把握されている。正しくはマルクスが記述しており、しかし非常に抽象的で難解である箇所を、平田氏が平易に解説してくれているのである。

『黙示録』はマルクスよりも後代のロレンスが「全編をおおう神秘めかした無軌道な祝宴」という批判から始め、「呪術をもつて超自然を招致せんとする書物」と繋げ、「嘔吐を催させる作品」と酷評した。しかしマルクスはこれに人類最初の歴史意識の誕生を見出した。マルクス主義とはキリスト教否定の階級闘争の理論である以上に、『黙示録』の否定的継承、すなわち止揚なのである。

トッド氏は、自身が記しているがフランス共産党員だった時期があるとのことであり、左翼であると自認している。私もまた日共党員だった時期があり、1959年に離れたが、その後も選挙では常に共産党に投票して今日に至っている。ペレヴェルゼフの翻訳の延長として『ドストエフスキーとは何か』（2028）を上梓したが、平田清明氏の名をあげ、その諸論文に多大に依拠して著した。その立場からみると、トッド氏のマルクス把握には斬新な箇所もあることを知る。

「革命的な地殻変動は、左翼のものであれ、右翼のものであれ、常に中産階級の内部での意見の変動の結果として起こる。民衆の内部からそんな影響が及んだ例はない。民衆は「操作される大衆」にしかない。マルクス主義は伝統的に好んでプチ・ブルジョワを

バカにしてきた。しかしプロレタリアートとは大違いで、プチ・ブルジョワは歴史を作る。フランス革命、ファシズム、ナチズム、そしてコミニズムに到るまで――。ポリシェヴィキ党は実際にはプチ・ブルのインテリゲンチヤによる創設だったのだから。イギリス人およびアメリカ中産階級のおだやかさが、英国と米国におけるリベラル・デモクラシーの安定性を作りだしたのである」(『シャルリとは誰か――人種差別と没落する西欧』280(281, 2017, 文春新書)。

ロシア革命のみならず、レーニンらがそこから靈感を受け取ったマルクス当人もプチ・ブルジョワだったと言えよう。プロレタリアートの理想化のためにはプチ・ブルジョワを貶めざるをえなかったかであるが、それではどうしてであったか。マルクスのプロレタリアートはドイツ人やフランス人であり、ユダヤ人は入っていない。彼の最大の関心事は「ユダヤ人の救済問題」である。産業資本主義の発生により西欧は民族国家への道に進みつつあり、それら相互による対立抗争が発生激化し、戦争にまで至るのであり、その結果それぞれに住むユダヤ人に禍が及ぶのである。それを免れるためには各国のプロレタリアートと結びつき、そのインターナショナルリズム運動に参加し、彼らとの同時的開放を実現しなければならない。

トッド氏がこうした思想に達したのは、彼が書く民族の識字率を重視する人類学者だからである。農民の間での識字率の増加が聖書の各民族語訳を生み出したのであり、産業資本主義のプロレタリアートの形成につながったからである。

1917年当時のロシア国民の識字率は非常に低く、西欧が市民(ブルジョワ)的資本主義国家であったのに対し、農奴主的国家であった。明治維新を経過した日本が憲法をもっていたにもかかわらず、ロシアはまだ憲法をもたずに政治革命に突入し、続いて経済各目に移ったのであり、識字の問題は国民の初等教育の義務化とともに、レーニンによって「文化革命」の問題、非常に長期なものとなる問題として提起されていた。

プチ・ブルジョワあるいは中間層の問題もこのなかに含めて考えられていて、けして「バカにしていた」わけではなかった。トッド氏によれば、ソ連は氏の予言どおりに崩壊したが、三十年を経過してその中心にあったロシアは安定を取り戻し、堅固な国となって復活した、とのことである。もしそうであるならば、革命後の教育の普及が実を結んだ結果である。ちなみに私が多大に評価した依拠してもきた作家レオーノフはソ連における社会主義建設について、「ただたんにロシアのためだけにやっているのではない」と国際的義務の意識に言及しており、また第二次大戦後のアジア・アフリカ諸民族の植民地からの解放独立をソ連の存在・存続と関係の影響であるとした。私はトッド氏の全立論のうちで占めるソ連軍によるナチズム撃破・ベルリン占領の非常に高い評価に注目する。それは以下に述べるように、私のヒロシマと関連するからである。

1957年の日本原水協からの初めての訪ソの際、クレムリンでブルガーニン首相の謁見を受けたのであるが、わが団各位の原爆被爆の実情報告に対し、同首相は「第二次大戦

で二百万人の世界最大の犠牲を出したソ連国民には日本国民の広島・長崎での被害はよく理解できます」と答え、その言葉は翌日のプラウダ以下の全新聞に掲載され、私たちは、その後行く先々でこの言葉の繰り返しに接することになった。そしてこれがあまりにも判で押したように繰り返されたために、私は聞き飽きて不快になり、これは昂じた。しかし通訳的立場にあつたために抑制し口に出すことはしなかった。だが最も不快だったのは長崎の被爆者杉本亀吉さんだったのであり、我慢はミンスクで限界にたつたのだった、「言葉を返すようですが」と前置きして、自説を述べた。白ロシアの人々は返す言葉がなく、重い沈黙が流れた。私は不快から救出され、広島・長崎の存在に心中深く感謝した。これが後に被爆者との結婚に繋がったともいえる。以来私はヒロシマとともにあるという気持ちで生きてきているのである。

当時の私は箱根以西にはまだ行ったことはなく、広島・長崎の土を踏んだことはなく、ソ連のミンスクでヒロシマ・ナガサキを知り、同時期に開かれていた第六回の世界青年学生友好祭の行事の一つ、八月六日夕闇迫るマネージンヤ広場でのヒロシマ記念集会、そこでの日本被団協代表、すでに友人だった永田尚子のスピーチする姿と声によって日本を知った者なのである。

そこに私を導いたのは松尾隆Ⅱ木寺黎二であり、その係わりで改めてマルクス主義を勉強せざるをえなくなり、日本人研究者平田清明に多大に教えられることになった。日本人は、共産主義者を自称する人々まで含めて、マルクスを理解把握できていないが、これは半ば仕方のないことで、原因は私たちがユダヤ・キリスト文明の外にいる民族だからである。その理論は西欧を対象としたものであるが、世界的普遍性を有する。したがって平田氏によるその承認は、マルクスを根源から理解出来ずにきた日本人全体の批判を随伴しないではいかなかった。

「貨幣物神は、またその内面的根拠たる商品物神は、西ヨーロッパの人間の思想と行動を深く根底的に規制する客観的原理そのものであります。これは、西ヨーロッパ人にとつて、原罪の重みをもった常識であります。しかしこの国では常識ではなく、常識にぞくします。いうまでもなく、この孤島にも、古くから貨幣は発生し、流通しておりました。しかし、モンスーン地帯のこの小世界では、貨幣以上の神が君臨してきたのです。直接の人格関係が第一の生活関係であり、貨幣関係は、マルクスの言葉をかりて言えば、「下位の役割」を果たすにすぎませんでした。貨殖をおこなう者は、二級・三級の者とされてきました。共同体的人格関係が長く存在し、富はその使用価値において、より多く尊重されてきました。したがってまた、抽象的人間（キリスト）が日常概念としても把握されること少なく、宗教は多かれ少なかれアニミズムの形態をとってきました」。

わが国における最高のマルクスと西欧の把握者においては、日本は後進の否定され克服されねばならぬものを持つ国であった。ところが二十一世紀の20年代の今日、「西洋の没落」（トッド人類学入門）が始まっており、救済の希望は日本に託されているかのような言説が出現することとなった。もしもそうであるならば、マルクスの処方箋は役にたたな

かったことになるのであるが、日本については、敗戦後のある時期までとは異なり、現状はまったくそうではない。日本は自滅に向っているが、それは積年の誤った核燃料サイクルの政策によってなのである。

五章 新しい酒は新しい革袋へ

私は、あなたに会わなくても、私独自の人生が存在した者である。『樺太よ遠く孤独な』を初めとするいくつかの本は、あなたに会わずとも書く運命にあって書いたものである。しかしあなたと出会い夫婦になっていなければ決して書かれなかった一冊があり、それは、2011年のフクシマ原発事故の後、2014年に執筆を終えて刊行した『トリウム原子炉革命』―古川和男・ヒロシマからの出発』を副題にもつ―である。あなたとの縁でこの人を知ることがなければ、私はこの書を書かず、書けなかったのである。

もっともそこに至るには段階があったことも明らかで、そもそも最初の樺太の本があなたなしには、現にあるような形では書けなかった。というのは作中に原爆被爆者がいることで、樺太の物語でありながら樺太を超えることができていたからだ。これを最初に指摘してくれたのは述べたように『樺太の歴史』の著者である西鶴定家氏であった。

大分県中津の出生で、樺太の教育界には大分人の人脈があったようである。わが母の大泊高女と同級生に大分竹田高女からの転入生がおり、東京での同窓会で挨拶し、一緒に高女の校歌を歌ったこともあった。しかしながらわが普遍性は、なんといっても、主人公が私であって私ではなく、幼なじみの露日の夫婦とその一家の人々であることだった。これは樺太人全体のなかでも特異なのである。

「地上のすべての民族は共通の先祖であるホモ・サピエンスを先祖に持ち、したがって平等である」というのがトッド氏の説くところであり思想であって、私は同感し敬意を表する。問題は、人類史のなかでアングロ・サクソン族が突出して領導的な地位を占め、しかし、それが今日失墜しようとしており、その危機感から、ロシアを挑発しウクライナでの軍事衝突を引き起こした、と説いていることである。その一方の当事国であるアメリカは国内で深刻な分断に直面しており、日本の防衛どころではなくなること必至である。「だから、日本は自らの防衛のため核武装すべきである」、と彼は続けるのだが、私はこれには反対で、その理由については、先にいつて述べることになる。

敗戦時、古川氏は熊本の五高の生徒で勤労働員による過労と栄養不足で寄宿舎に伏せ、「空襲警報がなくても一人では動けず避難できなかった」と記している。米軍の次なる上

陸地点は日向灘と想定されていて、その場合はこのままここで死ぬこと必定で、母堂に助けられて佐賀関の会社宿舎に移された。大分の家は空襲ですでに消失していたのだ。だからあなたは戦後氏には会うことはなく、数年後一家が関西に移ることになり、挨拶にみえたご両親に、「跳べるようになりました」と自宅の玄関で跳ねてみせたという。以後長年にわたって交流はなく、七歳年少の弟の雅章氏がわが家を訪ねてきたのは、『ヒロシマまでの長い道』を書いていて、それが大分県でも新聞記事になっていたためのようだった。

あなたは和男氏がいかなる人物になっているかをまったく知らなかった。しかし氏の方はあなたが被爆者活動家になっていることは知っていただけではなく、その学問も影響を被らないではなかった。その後の著書で力説されているところでは——「世界に冠たる平和憲法を持つ日本人の責務の遂行」であるところの「核兵器全廃に支障をきたすことのない合理的な核産業技術」、核エネルギーによる発電が「新しい酒」であるならば、それに適した「新しい革袋」(マタイ伝)——終章で説明する——であるトリウム熔融塩原子炉について、ただそれだけについて語るために、訪ねて見えたようである。

大分市中島小学校は三学級で、男女別々の二組と男女合わせた一学級からなり、あなたはこの学級、和男氏は男子だけの組で共有する思い出がなかったためだが、斜め向かいに住みながら、ほとんど外には出てこぬ男の子で、一緒に遊んだことがなかった、とのことである。「体が弱い」と噂されていた。こうして、あたかもそれが、またそのみが己の存在の理由であるかのように、挨拶もそこそこにのっけから専門分野の話、というよりは講義に入り、それが延々と続き、長く難しい話が終わって、ようやく発言できるようになったとき、あなたが発した最初の言葉は「外には出てきませんでしたね。家で何をしていたのですか？」だった。

「本を読んでいた。おかげで目を悪くしました」という返事。父親の蔵書を読みふけていたようなのだが、父君は化学技術者でありその専門書は有ったであろう、しかし加えてどうもそれ以外に漢籍書があったように想定される。著作に孔子と老子への格別な言及があるためだが、仏教にも関心があって「仏教は学問的であり、科学的だった。「文殊の知恵」とは「科学以外の何ものでもない」の記述が見える。しかし世界平和評議会に係わり深い『戦争のない世界』の著者、世界平和評議会の指導者、マルクス主義者バナー教授を慕ってロンドン大学に留学しており、それにも接しているか手ほどきを受けている。

あの折、私が挨拶しただけで外出したのは、全六回の季刊雑誌『早稲田・1950・史料と証言』の編集会議のためだった。1986年の文集『松尾隆』の延長・発展である仕事である。東大の『19会文集』と同時期に並行して製作刊行され、相互に交流があり、私は吉田嘉清に従ってこの年一回の東大国際派細胞OBの集まりにレギュラーとして招かれていた。双方ともに1950年を中心にしつつも、敗戦直後から60年反安保闘争直前までの戦後学生運動を総括する試みであって、影響は全国に及び、京都大学が51年の昭和天皇行幸事件五十周年を記念した集まりに先立ち、2000年に東京でその前夜祭的集

まりが持たれた際には、要望によりそのインターカレッジ的会合の記録集の編集制作にまで係わった。

天皇の来学を全学自治会の指導にしたがい学生たちが日本人の作詞作曲になる「平和の歌」を斉唱して迎え、これが「不敬罪」に当たるとして、自治会幹部が逮捕拘禁され裁判に付された。この時、同時期東京で、インターカレッジで歌われていた国際学連歌であることを知っている私は、京都がそうではなかったことが不思議で、代表者に電話を入れて質した。国際学連歌は同学連がプラハに本部を置いて設立されたとき、ソ連はまだ原爆を所有しておらず、それはソ連作詞作曲のこの詞に表れていた。

われらが友情は原爆あるも絶たれず、闘志は火と燃え、平和のために闘わん

その後にはソ連が原爆を所有しても歌詞は変えられず、モスクワ放送を通じて東京で知られ、東京の学生運動の歌となった。対するに、同じく全国型の大学ではあっても、京大の場合はより多く西日本的であり、原爆被害の实情は東京よりも知られており、したがって、歌詞に違和感をもった人々はいたのである。加えて、50年のコンフォルム批判を契機にして起こった党分裂に際して、東京は完全に国際派（統一会派）一色だったのにたいし、関西では徳田・野坂の書簡派（通称）が主流をなしていて、京大自治会は東京の国際派分派の歌をうたうのを好まなかったようなのである。

東京の国際派は中心部が逮捕拘留され、裁判闘争に移ったのに対し、主流派は全学連から国際派を追いだし、委員長を京大がとり、東京まで含め全国の各大学細胞は「主流派」に統一された。しかし主流派が51年新綱領のもとに一部でおこなった山村工作隊や火災瓶闘争などは、数年後には失敗が明らかになり、やがて党の分裂が解消された。分裂期間中に誤って入党し、その後に離れていた私も活動に戻り、宮本顕治と昵懇の松尾隆教授の指導下に就く。これは人的構成でも一貫して国際派の系統に属し、六全協後には主流派となった流れであった。

松尾隆のほうが一歳年長である。その非転向、すなわち取り調べの際に当人確認の書類に署名しなかったことを、賞賛していたが、その語り口はユーモアを交えたものだった。第二語学のロシア語の時間である。七歳年長の妻であり作家である宮本百合子さんについて触れながら、「あなたが顕治氏を見初めたことは、あなたの全文学を決定する快挙でした」と言ったら、「百合子さんは、まあ！ 松尾さん、たら！、と顔赤らめた、年配の女性顔赤らめる、いいですなあ」といった具合だった。私は百合子氏を見たことがない。しかし写真から色白の女性だったと想定している。そして常に顔を赤らめているのであるが、これは松尾の表現のためなのである。

そのような人に親愛した学生であり、その縁で早い時期に日本原水協から出されてソ連にゆく機会をえた。米川正夫教授をふくめ先生たちがだれもまだ戦後のモスクワに行っていない時期のことだった。そしてその旅で私は変わったのだが、それはどのような契機に

よってであつただろう。モンゴルに向かう直前、ユジノ・サハリンスク（豊原）へ向かう便の搭乗案内を聞いたのだったが、その時だった。私はこのとき引揚げて以来最も強く別れてきた樺太を思い出している。しかし私がおのれの故郷の地である樺太での友人知己に全面的に回帰したのは、それから二十余年を経て四十歳を過ぎてからであり、しかしそれが可能となったのは、あなたよ、私があなたによってヒロシマに到着していた（と信じていた）からなのである。

1957年8月のモスクワ、開会式と同じレーニン・スタジアムでの閉会式では、全行事が終了した後の電光掲示板には英語とロシア語で「1959年にウィーンで再会しましょう」の文字が明滅していた。東欧のソ連圏諸国の首都を持ち回りしてきた平和友好祭が、中立国に会場を持つことになった最初の告示だった。電光板の印象は強く、後にこれに参加することになった原因をなした。こうして私は百五十人のその団に加わり、そこではじめてあなたに会った。そしてどのようなことが起こったかは、そのあらましのいちおうのことは書いてきた。また結婚後のこともほどほどには書いてきた。しかしそれは二つの、異なったロシア関連の学的研究のあいまでの執筆であり、書きつくしたとは思っていない。

そして2011・3・11が到来し、私は激変した。私は増補改題改訂された古川和男『原発安全革命』を完全に正しいと確信し、思いがけなくも理科系でもある著書を公刊した。かつその帯に日本水協元代表委員の先輩・松尾の兄弟子であり、原水禁運動の生き字引、対立者たちからもその「顔」と評価される吉田嘉清の名の推薦文を掲げた。私はその作品を私たちが係わってきた運動への貢献であると確信していた。

それから数年して、吉田嘉清の喜寿を祝う集まりが、日本青年館で行われることになり、念のために実行委員の一人、後に『晴れた日に：雨の日に：広島・長崎・第五福竜丸とともに』（2020）を著す山村茂雄氏（1932）に質すと、故安井元理事長の息女侑子さん宛てには案内状はだされていなかった。私は出してくれるよう頼むとともに（それは追加として出された）、私も夫妻あてに葉書を送った。ご主人から返信があり、夫人の健康状態の理由で欠席することだった。

喜寿の会の会場は、1984年の日本水協分裂に際し、理事長の草野、副理事長の吉田らが追われる集会があった同じ会場であり、これに触れた吉川勇一元ベトナムに平和を市民連代表の発言があった。日共不破哲三代表の著書に「内通」の文字があり、「けしからん」との趣旨のものであった。取り寄せて見ると、ソ共による一連の日共の自主独立路線のかく乱の一つとしてその言葉が使われていた。また「内通」の助助者のロシア人には私がかつて交わったロシア人の名もあった。私は会社員になると同時に原水禁運動とは切れてはいたが、係わっていたならば同じようなことになっていたとみなされる出来事である。とはいえ私は会社員としてソ中領国と係わりつつ、同質の体験はしてきており、それなりに対処して生きてきていた。

人は様々である。兄弟であっても宮本委員長への忠誠心の度合いで、兄の上田耕一郎よりも不破哲三氏が上であったので委員長に抜擢されたのである。吉田とて、また吉田を支持して党を離れた古在由重さんともども、松尾隆存命当時は互いに一体の親密な関係にあったもの同士が、時代の流れのなかで変化したのだった。同様にその中にあった私はどううだったかを示す文章があるので、左に掲げよう。

雑誌『労働運動研究』復刊第13号（2006・4）

日本とロシア―出会いからの2000年

「二島優先返還」論が浮上し始めたとき、私は強い危機感を抱いた。ロシア側が仕掛けてきた異以外の何物でもなかったからである。それには体験に基づく強い確信があった。

貿易商社で主としてソ連を担当してきた私は1971年からKGB（ソ連国歌保安委員会）と接触をもってきた。近年「党が所有してきた国家」（下斗米）という言葉が流布しているが、その党は私の考えではKGBに所有されていた。これに逆らえば業務に支障をきたすので、日本で公安調査庁を拒否しなかったと同じように、定めを甘受するように私はほどほどに付き合って暮らしていたのである。

ところがある時期から彼らは、自民党内に知己がいまいかとしきりに問いたですようになった。事実として私はその党に知己といえるような人を持たなかった。しいて挙げるならば北海道五区（当時）選出の代議士中川一郎があるのみだった。樺太引揚後、十勝に住んだ我が家では、父（医師）が中川の父君（牧場主）と昵懇でその死を看とっていた。一郎氏は選挙の度ごとに挨拶に来ていたとのことであり、父に頼めば中川は会ってくれるはずだった。

私がそのことを話すと彼らはがぜん色めきたった。私は、名目は私のものであるが、利益が中川に還流する会社をもつよう執拗に繰り返しかえし要請された。かくて私はしかたがなく中川に会見しその意思の有無を打診した。幸い中川が断わってくれたので、彼らは落胆したが、それ以上は同じ要求を繰り返さなくなった。同時に私は彼らから見放された。

中川はその後農林大臣になり、漁業交渉のためにモスクワに行くようになり、やがて総裁選に打って出て落選、1983年一月に札幌のホテルで縊死した。私が、ソ連入国査証が出なくなるのを覚悟して最初の作品『樺太よ遠く孤独な』（1984、西田書店）の執筆に入ったのはこの年、この事件の後のことである。

当時すでにうすうすとは感じていたが、KGBの目的が奈辺にあったのかを明確に知ったのは、ソ連崩壊後1996年になってコワレンコの『対日工作の回想』（文芸春秋社が露文原稿を入手して翻訳出版）を読むに至ってである。対日工作のすべてを取り仕切っていたこのソ共国際部の要人、秘密主義の権化だったスターリン主義者は、ソ連崩壊で人が変わったように赤裸々に己が仕組んだ中川工作を告白していた。

第二次世界大戦後のソ連が対日政策で一貫しかつ変更することなく追求してきたことが

あった。それは占領し自国領に編入した土地は絶対に返さず、かつ日本が資源小国であることを見越し、シベリア極東開発に引き込む（金を出させる）ことであった。しかしそれを成功裡に遂行実現するためには、日本側の政権党に強力な協力者が必要だった。中川を首領とする青嵐会は自称していた対米自主による以上に、その親台・韓そして反北京であることによって、ソ連にとってまことに歓迎すべきグループであった。いわんや中川は総理・総裁候補なのである。彼を総理にし、総理決断で北方四島を放棄させ、あわせて対ソ全面経済協力を取り付けようとコワレンコは念願した。そのためにはどんなことでも敢えてする用意があったのであり、事実ある程度のことではした。しかしそれが中川の自殺で潰えたのである。

ショックによりコワレンコはぶっ倒れ、数年間寝込んだと伝えられている。夢に描いた対日政策を実現して中央委員への昇進を狙っていたのに、それが吹っ飛んだからだ。手記のうちで彼は中川の死をCIAによる謀殺と恨んでいる。（ついでながら彼らがもつとも嫌っていたのは宮本顕治とその側近の理論家たちだった）。

ソ連の中川工作をその傍らに在って知悉してきた人物がいた。「中川への献金を全部着服し、彼を錯乱から自殺に追い詰めた」――中川夫人およびそれに依拠する加藤昭の著書・評論による――秘書の鈴木宗男（敬称省略、以下全人物についても同様）がその人である。彼は中川が実現しえなかったことを実現しようとした。ロシア側にもそれにも対応するコワレンコの継承者たちがおり、今や地位をえていた。かくて彼らは合作し、夢よ今一度の蠢動を開始した。これが二島優先返還論といわれるものの実体だった。

自民党の外交委員長を勤め、小渕内閣の官房副長官になった鈴木は、外務省内で大臣呼ばわりされていたという。東郷欧亜局長を傍らに立たせ、「いずれ駐露大使になってもらう人です」と外務大臣きどりだった。「鈴木宗男を総理大臣にする会」を立ち上げていて、それを対露的にも宣伝していたはずである。クレムリンが期待したのもむべなるかな、だった。しかしその、野心は小渕の発病、森の退陣、小泉（＝田中真紀子）の登場によって潰え、やがて外務省内から逆襲的告発をうけ、議員の地位を失った。野合していたパノフ駐日大使らの失意は甚大だった。

昨2に005年ジャーナリズムで脚光をあびた人に外務省内での鈴木腹心のロシア語専門家の佐藤優があった。彼によれば自分たちは「国家の罨」にはめられたとのことである。小泉の同意があつて行われた逮捕であり、一理あることだった。しかし同じ佐藤が、選挙での小泉圧勝を「改革と守旧という二項対立を創りだし、時代の流れに乗った」（『正論』11月号）小泉の明と称賛しているのを見ると、精神分裂者と思わないわけにはゆかない。「異能の人」の論理は矛盾撞着しているのである。

11月に来日したプーチンは、二島優先返還論にかけるロシアの思惑がなへんにあるかをあからさまに示し、鈴木＝佐藤がロシアの傀儡だったことを明らかにした。「四島は第二次世界大戦後ロシア領であり、国際社会も認めている。しかし小さな二島だけは差し上げてもいいよ」と言ったのであるから、四島論者もまた切って捨てられたのである。政府も

民間も舐められっぱなしで、反撃せず、またできなかった。(完)

拙著『日露領土紛争の根源』(2003, 草思社)はこの四島問題についても言及しているが、中心に据えているのは樺太とサハリンである。日露国交樹立の前夜の1984年シールボルト『日本』の露訳が国費をもって完成された。しかし間宮林蔵の海峡発見の業績は完全に抹殺削除されていた。そしてこの事実に気づいたチェーホフは、シールボルトのドイツ語原書に依拠して『サハリン島』を執筆、林蔵の業績を正しく記述、「サハリンの処女探検の権利は疑いもなく日本人に属し、日本人が最初に南サハリンを領有したのである」と明記した。私はこの二つの学問上の発見を基礎に、およそ200年にわたる日露関係史を概括したのである。

2004年はチェーホフ没後百年にあたり、私はメリホヴォで行われた科学アカデミー国際学会に出席した。私は事前に「チェーホフ没後と日露戦争勃発からの百年」という報告を提出しておいた。しかし短縮を求められ、それを要約し、『サハリン島』に寄せて」と改題して報告した。シールボルトについては何も知らないロシア側には、私に二つの発見は寝耳に水の衝撃であり、狼狽を露わにした。報告集に掲載された私の報告は本意な要約を蒙っているが、『サハリン島』にはロシア人が愛好しない諸頁がある」という文言、および「日露の平和条約が締結されるためには、ロシア側のチェーホフの全面肯定が不可欠である」という結語は保持されている。以上すべての関連文書は拙HPに掲載されている。

帰国後北大のスラブ研究所の国際会議に出席。また8～9月日本近代文学館で行ったチーホフ展でサハリン・コーナーを担当した。

引きつづいて12月17日私は法政大学大原社研国際セミナー「日本とロシア——戦争の100年と平和の150年」傍聴の誘いをうけることになった。中心的テーマは日露戦争の評価であった。

レーニン(および歴史家ポクロフスキー)は、メンシェヴィキのマルトフおよび社会民主党(エスエル)の戦勝祈願を「史的唯物論を知らぬものの妄言」として退けた。日本は圧迫されているアジアを代表して開戦したとして支持、敗戦主義を宣揚した。しかるにスターリンはこれに逆らって、中立条約侵犯の口実を見出すべく、日本による侵略戦争と歪曲したのであって、大江志乃夫はこれに引きずられて、結果的にはレーニンに敵対する日清・日露戦論を公刊している。私はこれを批判した。

問題はアムステルダムで片山潜と握手を交わしたプレハーノフであった。セミナーの一人の講師はプレハーノフについて、同じくメンシェヴィキに属しながら、マルトフとは異なってロシア愛国主義に反対した、と主張した。

しかしこれは私がより深く叙述していることであった。プレハーノフは「ロシア・ツァーリズムの外交政策」(1980)を己が主催する雑誌に掲載しており、当然のことながら戦争の評価ではレーニンと同質の敗戦主義の文章を残している。彼は苦い思いで片山潜の握手に応じたのであり、これを戦後喧伝されてきたようなインターナショナルイズムの発

露と認めるわけにはゆかない。

セミナーのまとめのコメントーターとして登場したのは和田春樹先生だった。鈴木Ⅱ佐佐藤と相関関係にあり、私が目次で小見出しにその名を掲げて批判した今一人の人物だった。「ブレハーノフはレーニンとマルトフの中間に位置しました」と批判的にコメントしたが、拉致問題での発言とは異なって傲慢不遜は影をひそめ、自信なげな口調だった。

数日たって私は大衆運動家として高名な先輩（吉田嘉清、私はかれの命令で傍聴した）から電話をうけ、「セミナーはどうだった？」と質された。申し込み制だったので彼は私がお場に來ていることを知り強く意識して話をしている、という印象を受けていた。それでこのむねを伝えると、先輩は「当然そうだろう」と言った。或る会合で会ったさい、彼が近づいてきて挨拶抜きでいきなり「長瀬さんにヤラれました」と言ったというのだ。この人とは私は付き合いがなく、彼は私の顔を知らないはずであって、この言葉は私に伝わることを想定してのものだった。

ブレハーノフを巡っての応酬の際、和田は突然幸徳秋水の名をあげ、「歴史家としての私の原点でした」と同様な口調で告白した。そしてその瞬間に私は彼が私を意識していると確信したのだった。幸徳につき勝野金政は「肺病で余命いくばくもなかったから歴史に名を遺すつもりである事件を引き起こした」という片山の言葉を伝えている。その反戦を過大に評価しては、レーニンの敗戦主義は否定する以外になく、彼はマルトフとエスエルのロシア愛国主義の擁護に陥った。それは避けがたくプロレタリアートの過小評価と、ナロードニキとロシア農民の世界の過大評価につながり、彼のロシア史はそれへの跪拜に貫かれている。

在日の韓国人学者が日露戦争当時韓国大衆に日本に加担する動きがあったと証言した。こうしたことを考慮せずに、併合批判を過大に評価し、日本を糾弾してきた彼は、北朝鮮による数々の蛮行を遊撃国家のそれとして容認し、はては拉致まで擁護するに至った。私は幸徳を圧迫されているアジアの立場を忘却した書生の理論として否定した。今般彼の口からその誤った歴史学の成立が何に起因するかを、聴く機会をえたのである。

『サハリン島』は三種の邦訳が流布しているが、正しいのは帝政時代のテキストを使用した岩波版だけで、他の二種はソ連時代の改ざんを被っている。また手紙や証言などで今日でも公開を禁じられているものがあり、研究上だけではなく、日露の相互理解にとって大きな障害となっている。

サハリンはコルサコフ（大泊）で日本領事と親しく交わったチェーホフは、1804年のレザノフ來日以来の日露関係史について簡潔にして正鵠無比な記述を残した。レーニンが1855年の最初の下田条約を日本にとって平等なものとし、1975年のいわゆる樺太千島交換条約」をロシアによるサハリン侵略と規定したのは、チェーホフの影響もあつてのこととみなされる。死の床で日露戦勃発の報を聞いた作家は、ロシアの勝利を望んだ義弟を叱責し、最後の手紙（作家ブーニン宛）に「奇跡の国日本を思つて身悶えしてい

る。ロシアが蹂躪するの」と記し、広瀬武夫についてうわごとを発しつつ息を引き取った。中本信幸著を引き継いで拙著がより深い説明を行っていることである。

ソルジェニツインは、ソ連が保ったのはダイヤモンドがあつたからであり、社会制度が優れていたからではないと宣した。その代表的産地は酷寒の極東コルイマであり、強制収容所の囚人たちが充てられた。それを解消したところ、国は崩壊し、その後10年におよぶ大混乱が生じた。同じく地下資源である石油と天然ガスの高騰によってようやく息をつき、鼻息の荒くなったプーチンの一党は、東シベリアの石油開発をちらつかせ、高笑いを残して帰国した。わが経済界が指摘するように、安心できる法整備がなされなければ（そのためには平和条約が必須）容易に踏み込めない巨大プロジェクトである。かくて私たちは今や何を為すべきか、考えなければならなくなった。まだソ連時代だったが、或る高官が教えてくれた言葉があるので紹介しよう。

「四島を返すのはいとも容易だ。日本が南サハリンを保障してくれさえすればよい。サンフランシスコで放棄しただけでは不十分であって、ソ連に帰属させるべくアメリカを説得してもらいたいのだ。そうすれば我々は泣いて喜び、礼を言って返すよ。日本人はどうしてこのことに気づいてくれないのかね」

今から数えれば18年前の文章を書き写しながら、被爆者であるあなたに触れたパラグラフ、すなわち『ヒロシマの狂女』という表題で作品を企画しているとする記述は割愛した。事実としてそれは書かれず、私が取り掛かったのは、『ドストエフスキーとは何か』（2008）だったからである。だがチェーホフの影響はこれにも及び、序文を「チェーホフと比較する」とした。

「ドストエフスキーは何か」の問題は、繰り返すことになるが、ドヴォイニクの一語の問題であるが、しかしロシアを超えて西欧全体の問題であることが、その仏訳、関連するフランス人の諸評論から明らかになることを、私は同著書の12章「全西欧精神解明の鍵——分身という邦訳仏教語」で明らかにした。

ドヴォイニクは仏語ではdoubleであり、ロシアではドストエフスキーによって知られ、普通はあまり使われない言葉であるのに対し、こちらはきわめてあるふれた日常語である。形容詞と名詞の用法があり、最新の仏和辞典によっても「二倍」「二重」の訳語はあるが、「分身」は見当たらない。露和辞典においても、米川の訳例が広く知られるようになってから付け加えられており、日本で「分身」の語が日常会話で使われるようになったのは戦後しばらくたってからのことである。ドストエフスキーが仏訳されるまでは、doublという語はフランスで格別に文学的・思想的意味をもつ言葉ではなかった。

フランスのレネ・ジラルは『Dostoevski, du double à l'unité』『ドストエフスキー——二重性から単一性へ』（鈴木晶訳）の著者であるが、本文の邦訳では名詞doubleはすべて分身と訳されている。米川＝江川訳の踏襲とみなされる。その派生語に*dedoublementがあり、これも頻出しているが、二重性と訳されていて間違っていない。ただしこの本

(邦訳)では第一章の冒頭の節に「二重の創造行為」また「二重の贖罪」と訳されている箇所があり、この形容詞「二重の」が、原文ではともに *double* である。その *double* が名詞の場合は分身と訳されていて、翻訳だけに当たった人は、この事実が見えず、分らないわけである。しかし名詞 *double* が二重性(人)の意味で使用されている場合があり、その時は二重性と訳しわれている。見えなく分らないことでは同じである。

鈴木訳を検討しよう。「われわれはすでに恋愛の二重性 (*dédoublement*) や感情の二重性(同)について論じたが、これらはすべて父親殺しのテーマが隠しもっている本質的な二重性(同)から派生したものである。しかしこれでは副題の「二重性から統一性(単一性)の二重性が *double* の訳語であることとの、整合性に問題が出てくる。すべてはドヴォイニク *double* の両義性に起因しており、訳者に罪はない。ただし鈴木訳を正しく理解するためには、手元に仏原文を置いておかねばならないことになる。次の文も似ている。

「この両義性は、いわば父親の二重性 (*dédoublement*、以下同様) によって正当化される。ここでも、客観的な二重性が、主観的な二重性を堅固にし、激化させる。二重

(*double*) の存在である父親は、その二重性を息子に伝えるのである」。

いまひとつ鈴木訳から。ここでの「分身 *double*」は「二重人」と訳されても誤りでないだけではなく、より明快なはずである。

「分身のテーマは、じつにさまざまな形で、時には、それとはわからない形で、ドストエフスキーの全作品に現れているが、その枝はじつに数が多く、細かく枝わかれているので、少しずつしか、われわれの前に現れてこないだろう」(同訳書9頁)

しかし *double* のもつ両義性のために訳者に混乱もしくは迷いが生じ、二重性と訳されたほうが良い箇所で分身が使用されているのに遭遇する。たとえば「悪魔の個性は、分身の個性と同じく、出発点ではなく、結果である」(143頁)と言われるとき、それはまったく理解できる。しかし続く訳文はいただけない。「分身があらゆる分裂の発症地であるように、悪魔はあらゆる強迫観念やその他の悪魔的な現象の発生地である」。こちらの *double* は二重性(人)と訳された方が良いケースである。しかしそうすると原語が同じ *double* であることが見えなくなってしまうのである。これらのことからドストエフスキー問題とはまさにこの一語の問題であり、それ以外はすべて副次的、従属的な問題であるという結論がでる。一枚の葉の水一滴一つに全世界が反映されているように、この一語には全西欧精神が反映している。

ヘーゲルは『論理学』において、ドイツ語ではしばしば一つの言葉が「対立した意味」(たんに「異なった」意味だけではなく)持っており、それを「思考にとって一つの喜びである」としている。レーニンは『哲学ノート』のうちでそれらの言葉を抜き書きしつつ、さらに続けた。「弁証法とは、対立したものがどうして同一であることができ、それらはどんな条件のもとで、互いに転化しあいながら、同一であるのか――なぜ人間の頭脳はこれらの対立を死んだ、硬直したものと見ないで、生きた、条件的な、動的な、互いに

転化しあうものと見なければならぬのか、ということの学説である」と記し、その『論理学』の理解なしには「マルクスの『資本論』、特にその第一章を理解することができない。だから、マルクス主義者のうち誰も、半世紀もたつのに、マルクスを理解しなかった！」と喝破した。まことに重大な『資本論』冒頭の「商品と貨幣」と題された篇の各章であり、そこには「商品に表された労働の二重性」の表題が見られるのである。続く第二章「交換過程」ではそこにこそヨハネ黙示録の関連箇所が掲げられ、貨幣の発生が説明が行われている。私は次章でこの問題を再説することになる。

欧米における翻訳とは異なって、ドヴォイニクの邦訳では二重人（格者）と分身という二つの訳語をもった。後者はサンスクリット語の仏典の言葉 *atomabhava-nirmita*（化作された身体）に由来し、「衆生（大衆）を導くために化作され、分かたれた釈尊」の意味。漢訳されて『法華経』第十一見宝塔品に「ガンジス河の砂の数のように幾千万億という、これらすべては余の肉体の分身」の例がある。つまり同質なのだが、ドストエフスキーの場合は異質かつ対立的である。きわめて便宜的な訳語だった。しかしこれがドストエフスキーの西欧把握に多大の示唆を与える。私たち日本人は西欧的唯一絶対信を持たず、したがってそこから派生する問題と無縁であるにもかかわらず、避けがたくそうした存在に相對しているのである。

ミッシェル・フーコーはドストエフスキーから多大の影響を受けており、『言葉と物』でもそれは見られる。「分身は人間から生まれたものでもなく、脇に、同時に、同一な新しさ、どうにもならぬ二重的存在として生まれた、**兄弟で双子の〆他者**である」。それは「ヘーゲルの現象学では〆対自〆にたいする〆即自〆であり、マルクスにとつては疎外された人間である」と主張されている。この語に全西欧の思想問題が凝縮していると見ているのである。

私はソ連作家レオノフのインタビューでの「アインシュタインはドストエフスキーを愛好しました。これがドストエフスキー研究の課題でなければなりません」の発言に注目していた。実際ユークリッド幾何学を狭隘と批判するイワン・カラマーゾフの言葉には、相対性理論への期待が感受されなくはなく、アインシュタインはそれに気づいたとも考えられなくはなかった。私はこれへの言及をもって自著『ドストエフスキーとは何か』を閉じている。

問題は、しかし、ヘーゲル、マルクスとともに日本に入ってきた弁証法という言葉に於て概念でもあるものにも及ぶと考えられる。しかしこれは別な言葉で東洋にはすでに在ったものだった。中国の古代思想についてそれを解明・論証したものに、蔵原惟人氏の『歴史のなかの弁証法』（1984）があり、またそれよりもずっと早く1975年に、これも非転向の共産主義者林田茂雄（1907〜？）執筆の『般若心経の再発見』（1975）がある。

色不異空、空不異色 （色は空に異ならず、空は色に異ならぬ。）

色即是空、空即是色（色は即ちこれ空にして、空は即ちこれ色なり）

「色不異空」空は、色と区別された単純な抽象的な空であり「色即是空」の空は色との対立を止揚した、複雑な具体的な空である。般若哲学では、言葉の分化発展が十分ではなく、そのどちらも空という言葉で言い表している。ヘーゲルは「有は無に異ならず、無は有に異ならず、この有と無を止揚したものが成である」と言っている。色即是空の空はヘーゲルの成に当たる。「空」では紛らわしいので、インドのナーガルジュナはこれを「中」に代えて『中論』を執筆した。ヘーゲルにはるかに先立って「弁証法」について語っていたのである。これについては私は最終章で再説する。

「父殺しの文学」といったような皮相愚劣なドストエフスキー把握を正す意図をもっての『ドストエフスキーとは何か』の公刊から三年たって、2011年3月11日福島で原発事故が起き、あなたも私も衝撃をうけた。古川和男その人は半生をそのただけに費やしてき、しかし日本での実現は不可能と見定め、軸足を国外に移しつつ、研究啓蒙のための法人と商業化のための会社を発足させていた。事故は古川が予言していたものであり2001年刊行の『「原発」革命』は増補改訂され『原発安全革命』と改題されて再版された。帯には「全く発想の違う「液体」「トリウム」「小型」この原発であれば福島もチェルノブイリも起きなかった」と記された新書本の出版である。当時氏はすでにガンで余命いくばくもない状態で、私は二度お会いして話す機会に恵まれた。まことに偉人と称されねばならないこの方は、この年の12月に他界。

葬儀に向かう私を、「わたしからもよろしく」と言って送り出したあなただったが、後には「よくまあ、八十四まで生きたものだ」とつぶやいていた。外出しないので体が弱いと見なされていた子供の頃を想っての回想であった。もともと古川さんのほうもあなたが長生きするとは思っていなかったに相違ない

私は精力的に勉強し、『トリウム熔融塩炉革命——古川和男・ヒロシマからの出発』を2014年に上梓した。帯には吉田嘉清氏からの一文が記された。

それから三年してあなたが亡くなった。長い人工透析の末の衰弱死だった。

あなたは1959年夏のあの旅の間日記をつけていた。しかし私はそれに関心を持ったことは無く、また見せてくれと言ったことはなかった。没後数年して開いて見ることになったのであるが、往路のモスクワのキエフ駅で安井郁子さんに見送られている記術があつて感慨深かった。彼女はそのすこし前空路プラハに入り、日本からの最初期の数人の一人としてモスクワ大に留学していた。

百五十人のあの団には計十人の英独露の通訳団が加わっていて、ロシア語は二人のうち一人が専属に付いた。したがってあなたの通訳はしたことがないとか当人が言っているの

だが、その残る一人に東京外語大研究科の学生だった城田俊氏がいた。一年後に日ソ協会のルートで留学、侑子さんとともに学んでいる。彼女はモスクワでイタリア人の留学生と結婚、その際ソ連の法律による立会人をつとめている。

城田氏の東外大での同級生で私が商社に勤務後、親しく交わることになった若村氏と親しく、ウィーン平和友好祭の思い出として閉会式の夕べのフィナーレ、ウィーン市庁舎前広場の仮設舞台には、五大陸の女性代表が花束を抱えて並び、黒人歌手ポール・ロブスンが中央に立って歌った。そのロブソンに一番近くに立っていたのが日本代表のあなたであって、「その姿が記憶に焼き付いている」と話している、そのことを私は氏からくりかえし聞かされていた。見た位置こそ違い私も見ていた光景で、書きもしてきたことである。年月がたち、私も若山氏も前後して退職、ある集まりで皇居お濠での月見を誘われ、彼を誘ったところ、城田氏もということになり、あの旅から数えれば五十四年ぶりに会い語り合うことができた。氏はロシア語学が専門、北大スラブ研究所教授を定年退職していた。

それから程なく吉田嘉清氏が亡くなった。あなたの葬儀のころはすでに独りでは外出できない状態で、丁寧な弔電をいただいていて礼を兼ねながら訪ねると、「辛島さんを被団協代表に推したのは俺だよ」と言われた。初耳だった。正しくはその一人だったということだろう。そして程なく、その吉田氏が亡くなった。最後の電話は私宛だったようで、ベ平連の創始社だった数学者、樺太出身の福富節男氏について触れ、「カラフトには日本人はどれほどいたのかね」ということで、「四十五万です」と答えると、「そんなに」と明瞭だった。その二日後の死であった。

そしてまた一年とはたわずに、安井郁子さん、イタリア人の夫とは別れ、それから数年して後に七歳年少のロシア語教授と結婚、母親になっていたロシア文学者であるひとが亡くなった。そのことは人づてに聞いていたが、再会のさいにはまったく話題にならなかった女性である。にもかかわらず、近親者だけの葬儀で氏が読んだという弔辞がメールで送られてきた。留学時、空港にバスで迎えにくれたことから始まり、勤勉な学習が賞賛され、「あなたの幸せは渡辺さんに出会い結婚したことでした」と移るものであった。その中間に有ったものに触れずまた語らないですますために、文書化したと読めるものであった。全員が語った中でただ一人の朗読者で、「浮き上がった」と自省して記していた。

一カ月後、大きな人数を予定した会場での偲ぶ会の案内が私にもあって、私は出向いた。当然といえば当然なのだが、喪主である渡辺氏中心の集まりで、城田氏は欠席、渡辺氏が葬儀での城田文を読み上げた。話すと余計なこと言いそうなので、それを避けるための話をすまいと思つての欠席のように感受され、その旨をメールにしたためた。すると侑子さんが雑誌に書いたモスクワ友好祭の文章が送られてきた。二十歳とは思えないしっかりとした文章だった。

それにしても私、長瀬隆はどうしてこの集まりに案内を受けただろう。そして私はどう

してそれを受け、出向いたのだだろう。明らかなのは息女の享年八十歳の死とともに、私において長く続いていた何かが終わった（と思われた）からであり、その確認のためだったことである。

それは物心つき育った樺太の美しく豊かな鹹水湖、その畔の遠淵村との十四歳の年の別れに望んだ自然の佇まいに見出したもの、すなわち永遠と絶対、そのようなものとしての真実であり、私はそれを記憶し続けて生きることを誓って去っており、私はそれが常に眼前に揺曳してものとして成人となった。私はあなたと暮らしながら、樺太の真実とともにあるとも思ってきたのである。

顧みるに真理というものはすぐ身近にあるのに、それに気づくためには、人はしばしば大きな回り道をするということである。ヨッポイマツの記憶喪失など樺太が日本領として存続していたならば、早期に解決されていたのであって、私の前半生この「失われた記憶を求めて」のものになる以外にはなかった。ヨッポイマーチの正確なロシア語の意味が解っても、樺太は書けるようにはならなかったのであって、次なる冒険を試みることとなった。

ドストエフスキーはロシア革命に先立ってマルクス主義によって解明されていた。ペレヴェルゼフの業績はマルクス主義の勝利なのである。戦時下その全訳に取組み、しかしそのことについては語らず、早く死去した教授がいた。私はその人には語らぬ何かがあることを薄々とは感知していたにもかかわらず、没後その遺稿を調べることを怠った。しかしまことに遅ればせながらも方はつけた。

しかし教授が、そのためにはそれを後回しにしてよいと考え、取り組んだヒロシマ哲学の問題は残されており、それを一身に担ってきたのは吉田嘉清だった。『原水協で何が起こったか』また『わが戦後行動』といった著書もある人だが、それらに収められず、しかし一読してその人柄がわかるという意味で、貴重な文章があるので掲げる。

ソ連で1980年に42歳で没した演劇出身の反体制的なシンガーソングライターにヴィソーツキイという人がいた。レコード会社から吉田が相談を受けて、私が同級の演劇人宮沢俊一を訳者として推挙、四面のレコードが製作発売されたのだが、それに添付されたパンフレット掲載された「ヴィソーツキイの詩と歌は、草の根からの抵抗の芸術」という見出しのものである。

ヴィソーツキイは強烈である。抵抗詩人であり、平和と自由、人権の確立を求めてやまぬ不出生の民衆歌手である。

核戦争は、文明の破壊と人類の滅亡でしかない。東、西、南、北、どこに住んでいようと、人間として、戦争のできない、抑圧のない社会をつくり出す以外、核時代に人間が生き残る道は残されていない。

西側では平和運動を進めている人たちがクレムリンの代弁者だとのしられ、東側で市民的自由のために闘う人たちが帝国主義の手先だと指摘される。――ヨーロッパの自律的

な民衆の反核運動は、長いあいだ東西の世界に引きさかれてきた。平和と市民的权利という二つの大義をようやく分かちあえないひとつのもとしつつある。

官許されざる録音版として残され、フランス経由で日本に入ってきたロシア・ソビエトの詩人ウラジーミル・ヴィソーツキイの歌を聞き、私は激しくこころをゆさぶられた。たとえば「マガダン」(極北東の貴金屬鉱石採掘地)、あるいは「マイクの前で」。あとになって訳を見せてもらったが、前者は要するにその名の土地に私は行ったというだけのものだった。そのまた後もなつて、マガダンは流刑地だと教えてもらった。そうしたことを知る前に、私は彼の歌にうたれたのだ。「俺はマガダンの友達のところへいきゃあいいんだ。かまうもんか……俺はただなんとなく行ったんじゃないぜ」

平和と人権が不可分であるという意識は、戦後40年たった今でも日本ではまだ十分瀕熟していない。反核運動の歴史的高揚の後、運動の継続発展を巡って論争が起きた。意見違いを社会発展に資するのではなく、論争の対立意見を敵対矛盾に転化させ、自分と異なる意見者に市民権を与えるという排除の論理が、おおっぴらに出ている。平和を希求しし行動する権利は誰にでもある。存在それ自体の否定。その行きつくところは何か。そういった風潮は、意見の異なった者を排除抹殺していったスターリン主義の「亡霊」ではない。人権の感覚を欠いた論議を聞くたびにヴィソーツキイの歌の重みに圧倒され、私の脳裏にさまざまな思いが去来するのである。

ヴィソーツキイの詩歌は、めくるめくばかりに人を魅了するロシア語独特の詠唱のなかでも最高のものだという。苛烈な自然と人文のなかで生まれた古謡に根をおき、それぞれの時代に苦悩を見事に歌いあげてきたロシア歌曲の伝統が、新しい表現のなかで息づいて衝迫してくる。彼の死にあたっては、口伝えだけで20万のモスクワ市民が葬儀にあつまつたという。

ヴィソーツキイの詩句は、戦争と平和についての、順応と犯行についての嘘のないきらめきにみちている。「純な文体」を残してヴィソーツキイもまた夭折した。しかし、このようなものを「異端」とせざるをえない精神風土は、彼に続く異端をその血液としてうみださずにはいないというのが、もうひとつの私の感想である。

「もう大地に種子をまいても無駄だと誰かが言った。」(大地の歌)

ヴィソーツキイの死と歌は、無関心や諦念が織りなす厚い表皮の下に流れている私たちの熱い人間としての平和、自由、人権への初心の血を騒がせてくれる。それは非人間的なものにたいする草の根からの抵抗の芸術である。

こうして宮沢と吉田の間に付き合いが生じ、一緒に関西に行くことがあり、再婚し夫妻で当時関西に暮らしていた安井侑子さん夫妻と会うことになったようだった。そして宮沢からある時、「たいして親しくもないのに」と前置きして、「(彼女が)頻繁に電話してくるので困る」という苦情を聞かされることになった。それも再度にわたり、「もとはと言えば、あんたのせいだ」と言われ、「どうして?」と質すと、昔、荻窪の駅で二人連れ立

っていたとき、電車を降りてきた彼女と出会い、私が紹介したらしく、彼女の方でそれを覚えていたためであるということだった。「(夫の) 渡辺君はじつによく(彼女に) 尽くしているのに(なぜ?) ……」ということだった。

渡辺氏が良い人物であることは吉田からも聴いており、お子さんもあり、ロシア文学者としての活動も順調でまったく幸せであるはずの安井息女が、精神に障害をきたしたかのように頻繁の電話でわが友人を苦しめるのは、あるいは遠く私のせいなのかもしれないなかった。こうして私は1959年夏のプラハからモスクワ宛てのものに続く、その後二十余年の空白のある手紙を書いた。「ご主人は立派な人だとは吉田さんからも聴いております。あなたは立派なご両親をお持ちではありませんか。もつとしっかりしてください」といった短いものであり、すぐに「反省しております」という内容の返信をいただいた。わが友人からの苦情も無くなった。

代わって吉田氏からの電話で彼女のことが伝えられる度合いが増えた。私のほうから尋ねることは絶えてなかったわけだから、氏に何か考えがあつてのことらしかった。彼女の代表作とみなされるものに、1989年刊の評伝『ペテルブルグ悲歌——A・アフマートワの詩的世界』というものがあり、その仕事で「疲れました」と語っていたとのことだった。相手から聞かれもしないのに、私の近況なども伝えていたようだった。「よく電話があるのだが、躁のときと鬱の時とはつきり分かれていて」ということで、精神的に安定していないようだった。私が彼女と直接話すということは絶えて無かった。なにしろ私はこのひとは会わないように生きていたのであり、そのためにロシア文学界からは距離をおいていたのである。

その吉田嘉清も2018年に亡くなり、翌年にはその方も亡くなったという次第なのである。

原水禁運動の黎明期、全国的に名を知られることになった活動者が輩出した。その一人に比較的地味だが、草野信男さんがいた。被爆者の医学医療上の諸問題をまとめ上げ、初めて国際的に発表した東大医学部教授(当時)であり、1964年にソ連の核実験再開をめぐる紛糾があり、分離独立した勢力が原水禁国民会議を結成し、安川郁氏が理事長を退いた時、代って原水協を引き継ぎ理事長になった方だ。1977年に両団体は、一旦は統一を回復したが、1984年に草野、吉田ら日共黨員だった人々がその党を追われる事態となり、統一は解消された。このとき二人に同調した古在由重らとともに平和事務所をつくった。

これとは別個に、時期的にはもっと早く、文学団体の党からの分離の動きがあり、その一つに小田切秀雄氏を中心とするグループがあった。私は機関紙を購読しその研究会きに出ていた。氏は戦前の断片的にして難のある翻訳からベレヴェルゼフの包括性を見抜き、文章化していただ一人の人であり、かつまた松尾隆とは面識があった。『ドストエフスキーの創造』の翻訳で私を知っており、それらをテーマの一部とする『微笑の沈黙』を書

評で褒めてくださったので、そのお礼に参上したところ、同じ法政大の教授である安井郁氏が話題となった。仔細は同氏没後に刊行された全集所載の文章に明らかであるが、要するに、法政大理事会の教員側理事の定数の増加についての事前の打ち合わせを、安井氏が履行しなかったことに対するいら立ちの表明だった。1963年広島での原水禁世界大会で安井氏にソ連核実験再開への態度の表明が求められたにもかかわらず、「待ってください」を連発してしぶりに渋り、これがさらに紛糾を拡大した。雑誌『世界』の特派員としてその場にあった大江健三郎はこれを揶揄するように描いており、小田切氏は大江に共感していた。

事務局次長としてこのとき安井氏に寄り添っていた吉田はこの渦中にあり、小田切評を伝えた私には、安井氏を弁護した。「文学者であれば自己の良心に忠実であればそれで満足できようが、統一と団結が肝要な大衆運動においてはそうはゆかない」が彼の見解だった。

繰りかえすが安井氏は東大法学部の国際法の教授だった戦前、大東亜戦争に共感・擁護する学的行動により、戦後は辞職を余儀なくされたひとである。しかし同じ学部先輩であり、戦後総長となった南原繁は必ずしもそうとは見ず、同情していたようである。であるからこそ、第一回の原水禁世界大会では、安井の依頼を快諾して、その基調演説を引き受けている。しかし往時を知る人々は批判的だった。中野好夫氏などは原水協機関紙への寄稿依頼に対し、「東大構内を国民服を着て歩いていましたからね」と不快を表し、当初は断わっていた。また岩波書店は吉野源三郎氏が中心となって安井氏を執筆者から外している、と伝えられていた。

戦時下その反戦的編集により、部員たちが一網打尽に逮捕された『中央公論』事件があった。その一員である黒田秀俊氏が事務局長の事務局での安井氏への全体的な評価は、心服からというよりは、「能力がある人だから」というものだった。

毎年八月の原水禁世界大会は、数百の外国代表を交えた数千人を収容した全体会議の冒頭での、理事長の基調報告が成否のカギをにぎる。つくられた演説原稿を持って安井氏はホテルの一室にこもり、入念に練習をするのであるが、吉田嘉清は田鶴子夫人とともに必ず同室した。夫人の意見は「なかなかなものだった」と称賛していた。「演説家の天性の持主であって、代れる人はいなかった」と吉田は言っていた。「代わって小田切さんや大江ができることはなかったよ」。

小田切秀雄さんは文学者だから当然だったのであるが、安井氏の場合以上に、憲法学者の平野義太郎氏の場合にもっと激しかった。マルクス主義は、講座派の理論家の一人として著名であり、小田切氏としてはその論文はかつては襟を正して読んだ関係にある。ところが大東亜戦争の勃発とともに、その擁護に走ったのであり、その迎合の派手さかげんは安井氏の比ではなかった。そして戦後はまたもや一転して講座派の過去にもどり、左翼の平和運動では大山郁夫のあとを継いで日本平和委員会の理事長になったのである。

安井氏には後に、創価学会池田大作と並べて「虚人」呼ばわりした評論まで出ることに

なった。しかし旧東ドイツでの学会に参集していて、同行の平野氏が「平和運動への多年の功績」により名誉学位を受けることになり、それを皆で祝うことになったときの状況を、居合わせ小田切氏は強い不快感をもって書いている。なにしろ、その輪の中には当の平野氏までいで、全員が不快のために流会となる祝いの記述なのである。

後に平野氏は自発的に平和委員会を辞任したが、吉田によると「宮本（顕治）の指示による」ものだったそうで同情的だった。亡くなるまで原水協（ということは、吉田のところには）には遊びに来ていた、とのことである。平野氏は主催していた「大東亜」関係の団体は、出所した若い日共黨員たちを積極的に雇い入れており、その人たちが感謝していたことをもって、吉田は平野のそれを偽装転向と見なしていた。

安井氏自身は戦中の「大東亜戦争」支持を、カーなどの日本評価に依拠しつつ、正しい一面があった、それは歴史が証明するだろう、と思っていた。不可解なのは北朝鮮の金日成への傾倒であり、その思想をマルクス・レーニン主義の最高峰と称賛していることである。日朝協会との親密な関係は最後まで続いたと観察されるが、これについて私は吉田氏と話し合ったことはなかった。

原水禁運動も、とくにその初期のそれを担った人びとが次々に他界され、当時は若かった吉田も長老となつて、若い研究者たちからインタビューをうけるようになり、呼ばれて私もそれに同席するようになった。そして今やその延長であるかのように、同時並行するように行われていた世界青年学生友好祭について、拙著がそれに触れていることで、私からすれば息子の世代に相当する若い研究者たちに直に問われることになった。その人々が城田俊氏の弟子筋で、都合がよかったので、城田氏にも一緒に拙宅に来てもらい、長時間話し合うこととなった。弟子筋のひとり私は私が見たこともない私たちに関する新聞記事をも携行していた。〈Love in Vienna〉という表題の英文紙のものである。

快い質疑応答の会談の後、数日後城田氏から添付文を付したメールがあった。その添付文から紹介しよう。優れたロシア語学者であり、しかしそれだけと思っていた人には、ご本人が「専門外」と称するテーマがあった。中世にロシア南部にあったハザールというトルコ系の人種でありながら、なぜかユダヤ教を奉じていた国であり、周囲から孤絶していて、新興のキリスト教国家キエフ公国（ロシアの前身）に滅ぼされ消滅した、資料のきわめて乏しい国であるという。それについての研究をまとめたが、「出版は断念しています」とされる原稿の、それも「後書」だけが添付送付されてきたのである。

この半ば幻の国への関心はどうもソ連崩壊後に目覚めたらしく、それは「どうしても我々の目の前で崩壊したソビエト連邦のことが思い出させる。この国はマルキシズムを国是としたために、二十世紀の世界で恐れられ、孤立し、多大の犠牲を払って作りあげた国はあえなく崩壊してしまった」という文言に示されている。その意味を探るべく始めた研究で、リトアニア（ハザール人の一部が移住）に資料が存するのを確かめ、モスクワ大時代の学友を頼って行き、複写して帰国する。リトアニアは、私はソ連崩壊直前に訪ねて

おり、書いてもきた国である。

ハザール学の権威が米国にいるのを発見、北大定年退職後、講師として勤務していた大学から依頼の手紙を書き、受け入れられてニューブラウンズウィックのラトガーズ大学に研究遊学をする。そこで「ポール・ロブスン文化センター」という建物に出会った。中にいる学生に、ポール・ロブスンとは誰か聞いてみたが、だれも知らない」。そして行を変えて記す。

「私には記憶がある。1950年代の末、ウィーン市庁舎前の仮設舞台で、この名の人物が右耳に手を当てて、ドヴォルザークの「わが母の教え給いし歌」を歌った姿と声を鮮明に記憶している」

ここには世界青年学生友好祭の名はしるされてはいない。しかしその理由はしるされている。ロブスンが大学の四人目の黒人学生だったこと、全米で知られたフットボールの名選手だったことを紹介し、「あらためて感じる。アメリカの大学は懐が深い。親ソ容共を疑われ、非米活動委員会で喚問をうけた人物の名を建物に与える。私のようなものにも一年の遊学の機会を与える」。そして私宛のメールの本文であるが、次のように始まっていた。

「長瀬さんの奥様とポール・ロブスンが同じ舞台に立っていたなど奇蹟に近いような気がいたします。あの夜、私はかぶり付きにちかいところで奥様の着物姿、お持ちの花束のゆっくりした振りよう、ポール・ロブスンの顔まで今も鮮明に思い出すことができます」云々。

コロナ禍はすでに始まっていたが、またクリミヤの併合はなされていたが、ウクライナへの「軍事進攻」が始り、この国のマスコミの論調が、米国の多大な影響をうけてロシア批判一色に染まったのはその翌年である。その少し前から、崩壊後の新興財閥（オルガルヒ）——その多くはユダヤ人である——のプーチンによる「粛清」を、私は肯定的にみていた私は、日本のマスコミの崩壊を感得した。こうして私は評判の現代フランスのエマニエル・トッドの『我々はどこから来て、今どこにいるのか？——民主主義の野蛮な起源』（2022邦訳）を手にすることになったのだが、しかしその表題は、「我々」が「私」に代っただけで、それは私がこの作品の表題として一度は考えたことのあるものだった。

同氏が説くのは、ロシアの侵攻により第三次世界大戦はすでに始まっているが、これは米英二つのアングロ・サクソン国家が仕掛けたものであるということであり、その根源をホモ・サピエンスに遡って説明しているのである。民主主義の本家本元のように自己宣伝しており、それを真にうける国々もあるが、実情は相違しており、米国を例にとれば、それが曲がりなりにも建前とされてきたのは白人のあいだけであって、原住のインディアンと労働力として家畜のようにアフリカから連行されてきた黒人には適用されなかった。南北戦争をへて時とともに改善されてはきたが、まだいまだしの国なのである。

これに代って不問に付されているだけではなく、擁護されているのがロシアであるが、私見では、ロシアは全体としてまだロシア第一主義からは解放されていない。ロシア史

上、真に人類的な天才を選ぶとすれば、第一に詩人にしてロシア文学の父であるプーシキンであるが、この人は皇帝の飾りものだったアフリカ黒人とロシア貴族を母親にもつ。髪はちぢれていて画家たちはそれをかならず描いてきた。しかしプーシキンを称えるひとで、この黒人の視点からアプローチした人は皆無である。ドストエフスキーは晩年、プーシキンについての講演でその全人類性を強調しているが、作品「エジプトの夜々」を取り上げているにもかかわらず、ロシア人の全人類性を強調しただけだった。第二に挙げられるのはレーニンであるが、これはカザンうまれのタタール人の血をひく人であり、絵画と彫刻ではすべて両目は細く切れてつくられていた。その血筋は思想にも色濃く反映されていた。しかしこの側面からのアプローチは不敬にあたると見なされていた。そして最後にチエーホフがいる。最西の仏教民族であるカルムイクかいずれかの東洋系の少数民族の血を受け継いでいる。その日本好みについてはすでに触れた。

いずれにせよ彼ら三人に共通するのは無神論者であることで、ロシア正教の十字を切るプーチンが彼ら先達を引き継いでいるとは思われない。彼はまだソ連崩壊の思想的整理ができていない。しかし第三次世界大戦になりかねない原因はアングロ・サクソン国家にあるとするトッドの説は正しく、それは挙げた著作では米国の黒人問題の解明によって裏付けられている。

ポール・ロブスン（1898～1976）は歌手、俳優、社会活動家であり、人種差別に抗して闘い、それゆえに迫害を受け、三十年代のソ連―スターリン時代に入っていた―を訪れるようになり、ソ連に人種差別が存在しないと確信、スターリンを敬愛するようになり、1952年にはスターリン平和賞を受賞した。半ば亡命的に東欧に滞在していた、初めての中立国開催となったウィーン平和友好祭で、フィナーレのセレモニーでドルザークを歌った。

参加国112、人数18,000（2024、ウィキペディア）の開会式よりはぐっと少なくなった人数での閉会式だったが、日本の一五〇人は全員留まっていた、個々ばらばらに会場に入っており、私は離れたところにいたのだが、城田氏同様に舞台のすぐ真下で見っていた人に日本画家の朝倉摂さんがいた。歌に感動して駆け上がり、握手させてもらい、その時にスケッチしたものを元に帰国後「ポール・ロブスン」を仕上げた。それが女史の最後の日本画となり、翌60年の安保反対闘争では文化芸術界の組織で精力的に活動、以後は舞台芸術家に転身した。

私はロブスンには格別に関心がなく、城田氏に刺激されてネットで調べ、その「ケンタッキーのわが家」を聴き、また朝倉さんの絵をも取り込み、彼女自身も出演している2010年製作、日本で生まれで初等教育を受けた米国人女性リンダ・ポーランド監督のドクメンタリー映画《ANPO》を知った。ドキュメンタリー映画であるのは、六〇年安保反対闘争に関連して、朝倉作品もその一つである諸ドキュメントを収集・追加・構成してつくられたものだからである。女性監督は「十歳の年に原爆について知り、アメリカの犯罪

と認識、日米関係をハヒモと娼婦Vの関係としてとらえ、その実相をとくに米国民に知らしめるべく映画を作成した。安保反対闘争はこれを打破するためのものであり、「五〇か国に730以上の基地をもつ自国の実態を知らない米国人に沖縄と横須賀の米兵たちの行状を写して示し、そうしたマトモならざるアメリカ人の対極として朝倉の絵が提示され、それは米国黒人内で大きな反響をよんだ。日本公開後のトーク・セッションで朝倉はロブソンから行動するエネルギーを触発されたと告白している。

2011年のフクシマ原発事故はウラン軽水炉を中核とする日本の核エネルギー政策が根本的に誤っていたことを暴露した。と同時にそれは原水禁および被爆者の運動に内在してきた弱点と誤謬をも明らかにした。

福島県が広島・長崎からは離れており、被曝医療の専門家がいなかったためであろう、出張してきた長崎大の医学者の発言が目についた。「心配はありません。気の持ちようです」というもので、変なことを言うものだ、と思っていた。すると所属するトリウム熔融国際フォーラムの代表、原発訴訟での原告側証人の吉岡律夫氏から一連の文書が送られてきた。執筆者は当の発言者とは同じ長崎大医学部で同級であった医者で、当該医学者ののでたらめな発言は同大の教授であった永井隆にまで遡るもの、と告発するものであった。すなわち戦時中は徹底した軍への協力者であり、愛国を鼓舞していた人物が、カソリック信者として原爆（投下）を神の思し召し肯定したのである。すなわち投下国の責任を問わなかったのではなく、罪の隠ぺいを擁護したのであって、これが占領軍によって歓迎され、印刷用紙の手配までうけて、一連の書籍が出版され、歌にも歌われて長崎の「聖者」に祀り上げられたものなのだ。占領軍によって原発報道が厳禁されていた時代のことである。

長崎市は北部にクリスチャンが集結している。北九州の小倉市を目指していた米爆撃機は視界不良のため変更して長崎を目指し、その北部浦上―その内には東洋最大のカソリック寺院がある―の上空で投下した。教会は破壊されキリストとマリアの像は痛ましい傷を負った。もしも投下者がキリスト教徒であるならば、キリスト教の冒涇であるどころか、キリスト教の自殺と言うべき破壊であった。広島のアトムにならってこれをそのまま残そうとする動きは存在した。しかし市長が招かれてアメリカに行き、帰国してとりやめを指示、今日に至っているのである。写真は撮られていて、私も見る事ができたが、反核運動が被った損失ははかり知れない。

エマニエル・トッドは、自身が明言かつ宣伝しているように、第一次世界大戦に学んでおり、その立脚に立ち、「第三次世界大戦はもう始まっている」とセンセーショナルに広言する。だが第二次大戦が軽視されていて言及が皆無である。この大戦においてこそ質的にも前例のない二つの大量殺害があったにもかかわらず、である。ヨーロッパに限定すれば、アウシュヴィッツに代表されるユダヤ人の組織的殺害があり、この最初の芸術的告発

はフランス人アラン・レネの映画『夜と霧』（1956）であった。これがCD化されて輸入されたのははるかに後年で、日本人がアウシェヴィツについて知ることになったのは、1961年霜山徳爾訳のオーストラリアの精神医学者V・フランク著『夜と霧——ドイツ強制収容所の体験記録』によってである。1959年の私はもちろんそれらを知らなかったわけであるが、ウィーンでその一つを見る機会があった。というのは、アウシェヴィツは数ある強制収容所の最初にして最大のものであり、それゆえにポーランドの南西の僻地にありながら全体の代名詞となったのであって、フランク氏の場合はウィーンで捉えられ両親妻女ともどもアウシェヴィツに送られた後、ひとり隔離され、行き先を上げられずに列車で移送されてウィーンに近づき、すこし北のガス室のあるマウントハウゼンで降ろされずに安堵する。その先の南ドイツのそれが無いダッハウで降ろされて生き延びたのであるが、友好祭ではこのマウントハウゼンへの見学行が日程に組まれていた。

ドストエフスキーの『死の家の記録』からの援用もある死の恐怖と隣り合わせの「絶望との闘い」の記録であり、「絶望との闘い」が同書の「八章」の表題となっている。自己暗示の「トリック」を使って楽天的に生き切ったのであり、それを「コペルニクスの転換」と命名したことが語られている。フクシマ後私が身をおくトリウム熔融塩炉の世界が、今日このホロコーストの場合以上の転換を迫られている。

2021年、過去十数回にわたって繰り返して申請されてきた右関連の技術がようやく認められて、経済産業省から交付金がでるようになった。関係者たちはあと一息と期待し、私も同様だった。最もはやく稼働するはずだった中国上海の同炉が、コロナ禍のために大幅に遅延したことも起因していた（2025年初頭に実働開始）。またそれら以上に、旧原発ムラの理性とは無縁の生き残りをかけた死に物狂いの策謀があった。

事態が進行して明らかになったのは、英国の巨大原発製造メーカーを買収したため、フクシマで倒産状態に陥ったトーシバが先例だったことである。ウラン軽水炉五十四基の操業停止は融資した金融・銀行筋の巨額の損失を招来し、日本資本主義は壊滅するのである。かくて経済界は、既往路線の継続のために、2014年には自民政権を復活させ、これを継承した2022年の新内閣は、フクシマ以後の抑制を百八十度転換し、全面復活継続させる決定を下した。つまりはフクシマ以前に以前に逆戻りしたのであり。事故はなかったものとされたのだ。もっとも失望落胆したのは、TTS社長の古川雅章だったろう。

自害者まで出した徳川幕府水戸藩の出身である古川家の家系図とともに、社のHPにフランクルの言葉を掲げた。フクシマはヒロシマから何も学ばなかった者たちが引き起こしたのであり、今またそれが継続されている。

ウィーン友好祭ではマウントハウゼンへの見学行が日程に組まれていて、私は行くつもりで原爆被爆者女性を誘ったが、彼女が強く渋ったので行かなかった。またそれが影響してその後度重なったモスクワ行の際も、立ち寄ろうとすれば行けたのにアウシェヴィツをはじめとするナチス収容所はどこにも行かずにきた。

あなたが見ようとしなかったのは何故だったろう。

第六章 マルクス「ユダヤ人問題」の今日

ユダヤ人問題ではかなり以前から、私はマルクスとドイツチャーに依拠して考え、また書いてきた。前者は確かなことは不明であるが、後者はポーランド生まれであることによつて、アシケナージのユダヤ人（つまりはハザール人）、自身を「マルクス主義者」と定義しており、その『スターリン』は、私は最初の作品『樺太よ遠く孤独な』（1984）でも、多大に依拠して書いた著作である。『非ユダヤ人的ユダヤ人』（岩波新書）があり、自身をそのような存在と定義・主張し、イスラエルの建国には激しく反対し抵抗した。マルクスはまた南ドイツ生まれのユダヤ人、ラビの家の生まれというからスペイン経由のスファラディの、正統なセム族の系統に思われる。その思想の出発点は初期論文の『ユダヤ人問題』に鮮明であり、これが大著『資本論』に発展している。この間の機微を最も深く正しく解明したものに平田清明の「マルクスにおける経済と宗教」と「キリスト教とマルクス主義」（ともに『市民社会と社会主義』岩波書店に収録）があり、私はこれらに多大に教えられて『ドストエフスキーとは何か』を執筆した。

城田俊はロシア語・比較言語学者であるが1996年に『プレトニョーヴァ「ハザール―謎の帝国」』の訳書があり、2023年12月に『ハザール 幻のユダヤ騎馬民族国家』（水声社）を著した。これに多大に刺激されて、私は『ユダヤ人とは誰か ー第十三支族・カザール王国の謎』（1990年邦訳）から始め、『ホロン革命』に至るまでのケストラーを読み、ハザールの重大性を知ったわけだが、ここで振り返って考えさせられるのは、マルクスもドイツチャーもそれにはまったく言及していないことで、その理由は奈辺にあるかということだった。私の結論は、「知っていて言（書か）わなかった」ということである。

マルクスは西欧に諸民族国家が成立し、相互間に対立抗争が生じた結果、それおれに住むユダヤ人に災厄が及ぶのを予測・危惧、ユダヤ人がその宗教を捨て、キリスト教から脱却する当該国のプロレタリアートと提携し、インターナショナルなコンミュン（公共）社会の実現を目指すよう促がした。ドイツチャーはこれに共感、ポーランド共産党に入党、トロツキー問題により離党し、イギリスに移り文筆に従事、しかし実父はアウシェヴィッツで失っている。彼は西欧でのユダヤの人の大量虐殺への冷淡を批判しつつも、これに便乗するかのように強大化したシオニズム、すなわちユダヤ国家イスラエルの建国には強く反

対した。それは「時代錯誤」であり、アウシェヴィツから何ものも学ばなかったに等しく、「新しいユダヤ人の悲劇」と定義した。

ユダヤ教の基礎はモーゼの十戒にあり、その最初は「われを信ぜよ、われ以外を信ずるな」であり、姿と形の無いこの「われ」唯一神」をマルクスは貨幣（的なもの）と解説し、新約のヨハネ黙示録に貨幣発生の際緯の解明があることを示し、それを基礎に約束の地「新しいエルサレム」なるものが、人類が貨幣から解放されたコミニズムの社会でなければならぬとしたのだった。シオニズムはこれとは真逆なのである。しかも聖書のセム族とは異なつたトルコ系のハザール人、ユダヤ教を受け入れてユダヤ人を自称するにいたつた民族による、暗い尋常ではない真逆なのである。

第二次世界大戦後のイスラエルの誕生には、米英とくにアメリカ国籍のユダヤ人の強力な後押しがあつた。しかしすべてのユダヤ人がそうだったわけではなく、アインシュタインなどは当初から反対だったが、904頁におよぶ大きな著作をもつて反対を表明した人にA・M・Lilienthal(リリアンソールと邦訳)とがあり、著者によってダイジェストされたものの邦訳名『ユダヤ・コネクション』が1991年に出ている。この書には結に「イスラエルはほんとうにユダヤ人の故郷なのか」という題の一節があり、この数年後に出版された書としてケストラーの『第十三氏族』(原題)が紹介されている。

『ユダヤ人とは誰か』の名で、同じ訳者宇野正美氏によって、それより早く1980年代に邦訳されていたもので、知る人には知られていた。すなわち今日のウクライナから南ロシア一帯にかけてトルコ系遊牧民で国教としてユダヤ教を受け入れていた国があり、北方のロシアに滅ぼされ、一部は留まったのだが、多くは西に向かつて離れ、ハンガリー、ポーランド、ロシアなどで少数民族として生きることになった。前135年(諸説あり)ローマにより滅ぼされて後、北アフリカを経由してスペインに移つたスファラディの氏族が真正正銘の旧約に記されているユダヤ人(少数派)であるのに対し、アシケナージを自称するハザールのユダヤ人(多数派)は、イスラエルは故郷ではないにもかかわらず、故郷と主張する奇怪な存在であり、しかしこれがシオニズムの主力なのである。その時まで主観的には親シオニズムだった日本人宇野氏は仰天し、ケストラー書を翻訳紹介しつつ、以後反イスラエルの著作家・行動者となる。しかしながらこの書は全体としてそうした内容のものであるが、結論の部分でイスラエルが国連で承認されていることをもつてその存続を肯定しており、疑問の余地を残した書だった。

城田氏はケストラー書を読んだ後に、最初のハザール関連書を出しており、その後二八年を費やして大部の書を出した。フルシチョフ時代の戦後最初のモスクワ大留学生の一人であり、ソ連の崩壊をも「眼の前で倒れた」と印象的に述べる人である。その依つて来るものが何であるかを見極めるべく、ケストラーが断定的に述べている諸点を、中国まで含む資料を集めて解析している。ユダヤ人問題以外に氏が引き付けられたのは、日本の天皇制を想起させるハザールの「二重権力制」であつて、象徴天皇制の肯定とみられる政治学者丸山真男晩年の「日本の古層」の評価である「執拗低音」が近似なものとして言及され

ていた。これは最初の本の解説にすでに現れていたものであった。

戦前思想弾圧にもかかわらず抵抗の姿勢を鮮明にし、戦後は「超国家主義の論理と心理」で時代をリードし、天皇制批判を続けてきたが、チェコ事件のころからそのトーンが変り、西欧を受容しつつも失われることのなかった日本的なものが評価されることとなった。時期的にハザールを知っていたわけではない以上、研究の結果であるが、また丸山は明言してはいないが、これは平田清明に学んだためと私は推測する。すなわち平田は西欧の社会と思想がいかに貨幣に支配されてきたかを解明しつつ、日本を振り返り、「モンズーン（米作）地帯のこの小世界では、**貨幣以上の神**が君臨してきたのでした。貨幣関係は下位の役割を果たすにすぎませんでした」と述べていた。逆に言えば、この視点があつたからこそ、西欧よく分析しえたのである。そうであればアジアと日本には別様な世界への貢献があるはずで、「執拗低温」の提唱はその丸山的試みと私は見る。丸山にはポール・ロブソンについての美しい文章があり、城田書のあとがきのロブソンと呼応していた。

ホロンとは全体を意味するギリシャ語の *holos* に「部分を暗示させる」添字 *on* をつけた全体と同時に部分を意味するケストラーによる造語であり、これを用いた『ホロン革命』が遺作である。『真昼の暗黒』の政治小説家として登場した人はここで科学評論家として終わりを飾っている。文系の著作家として生きながら、『トリウム原子炉革命——古川和男・ヒロシマからの出発』（2014）を著した私に似ていなくもなく、「人類にとってもっとも重大な日」を「1945年8月6日」と記すプロローグを持つこの書の結びに近い章に「トリウムCの半減期は六〇・五分」（13章「物質と精神の対話」といった文言を見て、心が和む。私の第二作、1950年の『ヒロシマまでの長い道』は89年の刊行であるが、出版社の提案で「核時代44年」が付記されている。

ケストラーのそれはデカルトの「われ思う、故にわれあり」の精神と物質の二元論に修正を迫る試みであるが、これに先行するものとして1957年米国刊のF・カブラ『タオ自然学』があった。タオとは老子の道教の「道」の中国音の表記であり、宇宙の道、自然の摂理を指し、人の道、世の道をも指す。インド思想、日本の仏教思想までまとめてタオイズムの言葉で総括し、現代物理学の思想がこれらの東洋思想に接近し、同一となつていくと論証される。こうして湯川秀樹の中性子の発見が東洋の空の思想に基づく指摘されると、湯川その人が中国古典学の家系の出であること、空海について著作のある人であることを想起せざるをえない。現代物理学の扉を開いたアインシュタインの相対性理論そのものが深く「タオイズム」と通底するものである。

学術論文はたくさん書いてきたが、一般向けとしては『原発安全革命』（2011、初版は『「原発」革命』（2001）で知られる古川和男は、この書の第10章に「核兵器完全廃絶への道」を掲げている。己の発明がプルトニウム消滅に寄与することをもって「世界に冠たる平和憲法をもつ日本人の責務」を果たしていると自負しながら、老子の「無為自然」に自由への希求を見出し、これが保障されるためには「十分なエネルギーが必要」と述べている。仏教の「文殊の智慧」とは「科学精神」であり、その結実がトリウム熔融

塩炉であるわけで、古川はこれに加えて己の研究に「魂を入れてくれた」存在として米初代原子力委員長D・E・リリエンソールの名をあげている。先にあげた『ユダヤ・コネクション』の著者A・M・リリアンソールと同じスペルの人物であり、同じくハザールゆかりのユダヤ人である。同一人であるはずはけしてないのだが、また専門は異なるが、同一思想の持主と見なすとき、今日の世界の中心的問題が明確となる。

D・Eが管轄するTV Aは原発発明・製作のためのオークリッジ研究所ためにつくられた施設である。その所長はアインシュタインに働きかけて大統領に原爆開発を進言した人であるウィグナーで、原発の開発も視野にあつて、その場合の炉は従来の個体とは異なつて液体となると予言していた。その弟子筋の次期所長ワインバーグは、軽水炉を開発するが、ほどなくトリウム熔融塩炉にとりかかる。D・Eの著書はこれを支援するものであり、古川が多額の共感をもって邦訳した。ウィグナーに示唆されたワインバーグが発明したのは「核燃料を溶かし込む核反応媒体・反応熱を運び出す熱輸送媒体・反応生成物を処理する化学処理媒体」の三機能のすべてを一液体が果たす芸術品のような炉である。古川はオークリッジを訪ねこれを目撃した。スリーマイルで事故が起こり、軽水炉の欠陥が明らかになって、これは実現するかと思われた。しかしウランを独占していたユダヤ・コネクションの逆襲にあい、ワインバーグはORNLを追われている。

すでに述べたように、米で製造が禁止された軽水炉の受け入れ先として選ばれたのが日本であり、「第二の太陽」などと言つてこれに飛びついた日本の二人の政治家が現れ、最初の一基が買われ、その後にはみずから製造するようになり、2011年3・11の東日本地震のときには54基に達していた。この間、米ORNLのMSRを引き継いだAMSBが1981年に、FUIJが完成し、日本で実用化が試みられたが反対勢力に阻まれて顧みられず、古川は軸足を国外に移しつつあった。事故後文芸春秋社は「この原発であればチェルノブイリもフクシマも無かった」を帯に記して増補改訂版である『原発安全革命』を売り込んだ。それから十余年、2019年には実弟雅章氏が社長の（株）トリウム・テック・ソリューション（TTS）は経産省から「社会的要請に応える革新的な原子力技術支援事業」の指定をうけ、交付金を受けることとなり、それは今日（2024）も続いている。しかしこれに対しても電力会社とともに、またそれ以上に銀行筋が猛反対した。膨大な回収不能金が発生するからであり、2023年の自民・公明党政権による再稼働加速の決定もその要請に基づくものだった。

ウラン軽水炉を、ゲートに依拠して「ファウストの（悪魔メフィストフェレスからの）買物」と否定したワインバーグは、古川の勧めもあつて広島を訪ね、その印象記である一章「ヒロシマの聖化」を含む自伝『最初の核時代』を著した。トリウム熔融塩炉がウラン軽水炉に全面的にとって代わることを願ひまた確信しつつ、「残念なのは、私がその日を見られることである」と結ぶ著書である。古川和男は近い将来での実現を予感しつつ、フクシマの年に亡くなり、以来十余年が経過、事故などなかったかのような事態の推移である。期待された中国上海のFUIJ型炉もコロナ禍のために遅滞、自民党内閣は延期されてい

た原子炉の再開を加速化させる決定を行い、東電は汚染水を希釈して海洋放出を開始した。豊芦原の瑞穂の国の言葉が泣くというものである。

世界的なコロナ禍が起こり、ウクライナで武力紛争が起こり、またイスラエルのパレスチナ（ガザ地区）への侵攻が起こった。こうした中で私は旧知の城田氏のハザール関係の著書に接することになったのであり、そこで挙げられている、また挙げられてはいない関連書をも読むこととなったわけだが、その最初がケストラー『ユダヤ人とは誰かー第十三支族・カザール国の謎』であり、続いてはリリエンソールの前掲書であった。ともに「ハザール・ユダヤ人」といわれているものが血統的にはトルコ人であり、それがハザール滅亡後東ヨーロッパに四散、一千年にわたりユダヤ人を自称して生き、強奪的なイスラエル建国に至ったものであることを明らかにした。これは欧米中心主義の世界史の見方を根底から変える問題提起である。

ユダヤの名称は、新約のキリスト教が成立後、その立場からつくられたものなそうので、その思想は旧約にある「モーゼの十戒」に見られ、その冒頭は、「神」がモーゼの口を借りて語る「われを信ぜよ、われ以外を信ずるな」である。「われ」が貨幣（的なもの）であることをマルクスは見抜き、その観点を発展させて、新約の「黙示録」から貨幣の発生を説明した。

十戒の冒頭に続く第二は偶像否定であるが、平田清明氏はこの言葉に括弧して（抽象崇拜）と説明を加えている。「ヤハウエ」エホバに姿形がないこと、他の宗教と異なる重大な特徴であります」。

ヘブライ、ギリシャ両語では数字には対応する子音があることから。「獣の名あるいはその名の数字666」が皇帝ネロと解読され、さらにその像を刻んだローマ貨幣とする発見が存在した。しかしヨハネにはいま一つ「竜」の語で表しているものがあり、それは商品（複数）なのである。その認識を基礎に『資本論』は成立しており、そのことの西欧にもみられない深い解読・解説として平田氏の著作があるのであるが、これが日本（だけではないが）では共有されておらず、長く続く混乱の原因となっている。

新訳聖書の主要部を形成する三編は、黙示録より後代に制作されており、また福音書ヨハネ書のヨハネは黙示録のヨハネとは別人で、前者はこちらの黙示録を読んで執筆しており、「初めにロゴスあり。ロゴスは神とともに在り、ロゴスは神であった」と始めている。多義的な言葉であるが、初めてドイツ語訳を作ったルソー（ルッター）は「言葉」と訳していた。しかしゲーテは『ファウスト』において主人公にこれに代えて「行い」と訳させた。そうでなければならぬのは、モーゼ十戒で貨幣が神であることが言われているからであり、『黙示録』には、商品として流通している無数の品物のなかから、金銀が貨幣になった経緯をあかす記述が存在するからだった。「彼ら（諸商品すなわち竜）は心をも一つにしておのがちからと権威を獣（貨幣）にあたえる。この印をもつもの、あるいは獣の名をもつもの以外には、買うことも売ることもできないようにした」。

商品所有者が意識して貨幣をつくりだしたのではないことをマルクスは説明しているの

であるが、ロゴスの多義性、および交換その他の語の両義性（二重性）に阻まれてよく理解できない日本人に平田氏は説明する。

ひとはいったい、意識することなしに行為するだろうか。はじめにロゴス（意識）があったのではないか。〴〵はじめにゴスありき〴〵なのか、それとも、〴〵はじめに行いありき〴〵なのか。結論は明瞭にして疑問の余地がない。「排除」のロゴスなし。しかし、注意せよ「交換」のロゴス〳〵意志あり。そして「交換」の行為あり、この「交換」のロゴスのうちに「排除」の行いあり。商品所持者が、交換しようと意識して、交換関係のなかにはいつていつたとき、そのときすでに、排除の行いを実践していた。つまり商品の本性に固有な、かの**潜勢的な力を顕勢化**していたのである。それゆえ貨幣は、人類のある晴れた日に突如として発生したのではなく、ものが商品として生産されて交換にはいるとき、つねに生みだされているのである。（『市民社会と社会主義』216）

『資本論』には初版（独語）があり、それに依拠するのが正しいとされている最終版（仏語）の「交換過程」に上記関連箇所があるのであるが、そのパラグラフの冒頭には、**すなわちこれを枕にして**。多数の商品の交換（行為）のなかから一般等価としての貨幣が生み出される経緯が長い文章で説明される。そして、その発見がヨハネ黙示録にもとづくことを明示すべく、「黙示録」の「彼らは心を一つにして」云々と始まる当該箇所の長い引用があつて、一個の長いパラグラフが閉じられている。

わが平田氏はその説明を解説し、補足して（はじめにロゴスありきというギリシャ語の福音を、ゲートは、あえて行いありきとドイツ語に訳したのであるが、私が説明したことを理解しない経済学者がいるとすれば、彼は、力みかえって、ゲートは誤読誤訳の張本人だと言ふことであろう」と注記した。

ところがこれに完全に該当する人物が現れた、鎌倉孝夫・佐藤優『『資本論』を読破する』（文芸春秋社、2023）の佐藤の方である。この人物は、先の五章で掲げた鈴木宗男問題に触れた「日本とロシアの200年」執筆の2006年当時、外務省側の協力者として名前が上がっていただけの存在で、私もそのように記述していた。しかしその後急速に有名人になり、『資本論』を主題とした対談書にまで登場することになったのである。

さて佐藤は『ファウスト』第一巻のこの訳語を指して「行為とは歴史なのです」「論理では説明できないことと、歴史的にそうなってしまった」と主張、「歴史」を「外部」と言い換えつつ、「外部の理屈でしか説明できないことを現代神学では神と呼ぶのです」と述べている。この神学の信奉者だそうである。ゲートの文を冒頭に掲げて始まる一個の長いパラグラフ文の結びが黙示録の当該箇所の提示で終わっていることの重要性については、鎌倉ともどもまったく触れることが出来ず、黙して通過している。『資本論』の全編が黙示録の読解のうえに成立していること黙殺している。

述べたように黙示録は隠語で書かれており、それに通じていない者には読破できない。キリストの命により、現在の地上の大きな都バビロン（ローマ）は崩壊し、未来に聖なる都エルサレムが出現する。これがこの書を貫いている一本の赤い糸である。まず大淫婦（ローマ）がその上に乗っていた獣（貨幣）と十の角（諸王）ともどもに滅び、獣と「にせ言者」（貨幣のイデオログ）および竜（商品）は「生きながら硫黄の燃える火の海」に投げ込まれる。勝利した忠臣者たちによる支配が千年続く。西欧における中世とルネッサンス、そのフランス革命への進展は、この千年が近づいているのに、約束のエルサレム到来の気配がみえないことに触発されたものであった。黙示録によれば千年後、竜（のみが）がいったん「獄から解放」され、迷いの生じた群衆とともに聖都を包囲し、黙示録の神はこれらを罰し、天からの火で彼らを呑み込み、火の海に投げ込む。人類がまだ萌芽の形でしか見てはいないこの過程を、貨幣による支配であるところの資本主義として解読し、新しいエルサレムの到来をコンミュン（公共）社会の到来として記し、『共産党宣言』で世界に呼びかけたのだった。しかしソ連が崩壊してその理想は潰え、資本主義は勝利したと信じた人々がいた。しかしそれから三十四年を経た世界の現状はいかがなものか。

私はかつて原水禁・反核運動と係わりがあり、また現にある者である。この運動の思想的性格は広島平和公園の碑文に示されている。

安らかに眠りください

過ちは

繰り返されません

日本人は犠牲者たちを追悼するとともに、災害が自分たちの戦争協力 of 過誤にも起因することを自覚していた。対するにユダヤ人のホロコーストにはこれに対応するものが欠けている。悪かったのはナチスであり、黙認した欧米各国のキリスト教徒であった。ユダヤ教とは、貨幣が神であることで宗教ではなく、悪徳商人の処世訓である。600万の数字はそれを利用してイスラエルを実現しようとした宣伝用のもので、実際ははるかに少なく半分以上と推定されている。ユダヤ人の悪を指摘・批判したのはマルクスよりも早く、評論集『作家の日記』におけるドストエフスキーであるが、そのドストエフスキーにしても己の記すユダヤ人が、ハザール由来の自称ユダヤ人であることに気づいていたかどうかは、分明ではない。

最初のハザール本の後、研究のためにリトアニアを訪ね、さらには米東海岸のラトガース大学に遊学し、本書は成った、と長文のあとがきに城田俊は記している。そこで「ポール・ロブソン文化センター」なる建物に出会い、本の主題とは係わりのない「私的思い出を一つだけ」と断わって、「1950年代末ウィーン市庁舎前の仮設舞台」でこの黒人歌手にして民族運動家であった人物の歌う姿が描出されている。読者は知りえないのだが、これは1959年8月9日夕べの世界青年学生平和友好祭のフィナーレでの情景であって、書の刊行に数年先立って城田氏がこの「あとがき」だけを送ってくれたのであって、

そこには書かれてはいないのであるが、ロブソンと並んで立っていた日本人の原爆被爆者女性があり、彼女はその後半年後に私の妻となっていた。追加するように、二人が並んで立つ姿を「奇蹟」として記憶してきた、と伝えてきている。それから二年して私はその書を読むことになったのであり、読了し、これがケストラーらの説を実証的に裏付けていることを確認したうえで、立ち返るのは氏の云う「奇蹟」なのである。このことに触れずには、私の城田書への評価は成立しない。

ユダヤ教が極端な民族宗教であって、この最大最高の否定者はマルクスであった。しかしこれに先立ってドストエフスキーが『作家の日記』収録の評論「ユダヤ人問題」（1877）において、イスラエル国家の出現から今日のパレスチナ（ガザ）攻撃までも予見していた。

石油を支配するものが世界を支配することを予見して、ロスチャイルド家に発するユダヤ資本が睨みをきかすべく、ユダヤ人を自称するハザール人、この「ユダヤ人」を使って強引かつ陰謀をもって建設したのが、イスラエルという国なのである。しかも核エネルギーが主流になると見越すとウランを買い占めた。彼らこそが、一次、二次の世界大戦の、はたまたその後の冷戦の張本人であり、また安全にして経済的な、核兵器の廃絶を視野に収めたトリウム熔融塩炉の実現を阻んでいる元凶、と見なさなければならない。

若かったドストエフスキーはユダヤ人に対しては同情的だった。『罪と罰』には、我意の人でありながら、己の金で悲惨なソーニャ一家を救い、自殺を決意して今や温順な人に変ったスヴィドリガイロフ、その眼に映ったものとして「その顔には、一人の例外もなくユダヤ民族のあらゆる人々の顔に悲しくもくつきりと刻みつけられている、あの永遠の、氣むずかしい悲哀の色がほのみにていた」の文言が見える。しかし後に英仏を旅し、「かれらが金融界を動かし、国際政治全体の支配者である」のをつぶさに見てきて、ユダヤ人の強い否定者となった。もっともそのなかであって肯首されるべき人々がいることは気付いていて、それに期待しつつ、「新しい立派な人々が果して多くのことをうまくなしとげられるかどうか。そして自分とは信仰と血を異にする人々と真の友愛的団結を行うという、新しい、すばらしい事業に対して、彼らが果たしてどれほど能力をもっているかということである」と結んだ。

時代はくだるがマルクスがその代表者として登場し、その影響でロシアに社会主義革命がおこる。注目すべきはドストエフスキーがロシアのユダヤ人が「国家内の国家」をつくっていると指摘しつつ、その内部に「秘儀に属す掟」があると指摘していることである。「ハザールのユダヤ人」の虚構の臭いを嗅いでいたとみなしてよいかもしれない。『作家の日記』のそれは序論的な「ユダヤ人問題」に始まる全四回の連載であって、2では言われている。「歩けば歩いたで、口を開けば開いたで、自分の運命を訴え、自分の屈辱を自分の苦悩を、自分の受難を嘆いている民族は、世界中探しても確かに他にはいない。まったく、ヨーロッパに君臨しているのは彼らではない、というのであろうか」。口とは裏腹で、黒人への蔑視が白人以上であることを批判する。「アメリカの南部諸州でユダヤ人が

一斉に、解放された数百万の黒人に襲いかかり、例の先祖代々受けついだ「金貸し業」で、解放された種族の経験不足や弱点につけこみ」云々。3は「Status in stau（国家内の国家）四千年の生存」と題されていて、記されている。「宗教的教義と呼べるほどの孤立化と孤絶化、非融和性、さらには、世の中に存在しているのはただ一つの民俗的個性、すなわちユダヤ人だけで、他は存在しているにしても、存在していないかのように見なさなければならぬ」「ヨーロッパの至るところの取引所をユダヤ人が牛耳っているのも、やはり偶然ではないし、彼らが資本を動かしているのも偶然ではない。彼らが金融界を動かしているのも理由のあることだし、繰りかえすが、国際政治全体の支配者でもある」。十九世紀にこれだけのことが言われていたのであり、私たちは今日その赤裸々な露出を、今日のイスラエルの動きに見るのである。

混迷し腐敗した時代には、そのような「思想家」が現れるもので、佐藤優の登場したのは「原発ルネッサンス」が飛び交っていた時期であった。もともと当初はまだ殊勝で、こんなことを言っていた。

「日本国家、キリスト教、マルクスの言説は私にとって絶対的なものとして並存している。この三つのものをつなぐ、何らかのメタ論理が私の中に潜んでいるはずなのであるが、現時点の私にはまだそれを言葉で表現する力はないのである」（2007年『国家と神とマルクス』）

時がたつてこの人物は今日のイスラエルのパレスチナ侵攻の擁護者として現れることとなった。

「我々は全世界に同情されながら死に絶えるよりも、全世界を敵に回してでも生き残るために戦う」が、ホロコーストを経験したイスラエル国民の総意です。（略）私のインテリジェンスの恩師は元モサド長官エフライム・ハレヴィです。彼は〈根本的解決をはかるには、（ハマスの）完全なる殲滅以外に方法がない〉と断言している。」（「ハマスとイスラエル 悪魔はどっちだ」（池上彰との対談における佐藤優 2024年文芸春秋 一月号））

イスラエルのガザ攻撃が佐藤優の「メタ論理」の由来を明らかにしたわけであるが、佐藤自身は、イスラエルの実体がハザール由来の自称ユダヤ人であることをまったく知らないのかもしれない。しかし師匠筋のモサドはもちろん知っているどころか、そもそもそれは、その暗い秘密の防衛が主要な任務である組織にして機関なのである。佐藤優はその走狗として登場しているにすぎない。

七章 1959年夏 ウィーンの奇蹟

第六回世界青年学生友好祭の日本代表团一五〇名の一人、日本被団協代表だった辛島和子は東京発の前日から、帰路のナホトカ港での客船乗船の二日目まで日記と手記を残していた。自身のためである以上に、帰国後の各種の報告に備えてしるされており、実際使用されていた。私はそうしたものが有るらしいことは感じていたが、彼女自身「見てちょうだい」とは言わず、没後、それも城田氏の「奥様がロブソンと並んで立つ奇蹟」云々の言葉に接した後、時機的にもその必要があつて彼女の遺品の整理に入り、「発見」したものである。なお辛島の姓は別の表記に唐島があり、彼女の父方の大分県宇佐地方に多く、先祖は朝鮮半島百濟からの帰化人と目されている。

1959年7月14日

ソビエト連邦ナホトカ市民歓迎会（ナホトカ港客船岸壁広場）にて

ソビエトの皆様 ナホトカのお出迎えの皆様、私は心から感謝のご挨拶を申し上げます。私は、日本全国四十万の原爆被爆者を代表いたしまして、ウィーンで行われます第7会世界青年学生友好祭^{フェスティバル}に参加するところであります。

私以外にも広島の高橋昭博さんが参加することになっていたのですが、途中で白血球が2、800に減少いたしました。そのため東京の病院に入院しましたことを残念に思っております。

この夏、私たちは東西で世界という冠のついた二つの平和大会を持ちます。一つは広島で開かれます第五回の原水爆禁止世界大会でございます。私たちはこの二つの大会の成功のために全力を尽くしております。にお伝えして、世界の人々が二度と原子爆弾の惨害を受けることがないように訴えます。

この二つの大会の成功は、原水爆の永久の禁止と恒久平和の実現をめざす私たちにとって輝かしい道標となるでしょう。一昨年のモスクワ・フェスティバルに参加した永田尚子さんは、ソビエト政府と国民のご厚意でモスクワの病院で優れた診察を受けていますが、このご厚意にたいしても私たちは深く感謝いたしております。

原水爆の永久の禁止と平和のために！

日本とソビエトの友好万歳！

団に五つの班があり、彼女は社会文化班に属し、この班に属する東京原水協の代表が彼女の担当に充てられていた。挨拶はその校閲をへて通訳団に渡されるのであり、その意向の反映もあった。私は個人的に相談を受けつつ、「郷に入っては郷に従え」といったようなアドバイスをしていた。何しろ大分では担当課長（県原水協事務局長を兼務）から「アカくなつては帰らないで」と忠告されて出てきていたからである。

永田尚子についても同様である。伝えられる原爆後遺症がどの程度であるかをソ連医学界は実物に当たって確かめたかったのであり、この側面は無視できないと思われる。またこれに関連して思いだされる例に、1900年の広島大原医研所長だった佐藤功氏の場合がある。氏の実兄はシベリア抑留生活の苦難で半ば精神障害者になって帰国しており、恢復しなかったことをもって、当初はロシア不信の人だった。しかし頼られてチェルノブイリ支援に従事、重ねて現地に行くうちにロシア好きに変わっていた。もともと同じロシアでも崩壊以前と以後では、日本の敗戦以前と以後の場合と比較できる激変があったのである、相手のロシアの変化に起因してもいる。ただしわが妻について言えば、旅が終わった後では、ソ連好きに変わっていた。もともと好きの度合いではウィーンの方が優まさってはいた。

ソ連側から提供された専用列車のモスクワ時間による日程時刻表があり、これを補足するように団事務局により作成された現地時刻との対照表がある。14～15日のハバロフスク時間から始まり、16～17日のチタ時間。18～19日のイルクーツク時間、20～21日のオムスク、そして22日のモスクワと、それぞれの調整時間が指示されてある。食堂車での食事時間は現地時間による。日数で足掛9日の長旅であり、後に私は口に出して人に言ったことはなかったけれど、「一度も乗らぬバカ、二度乗るバカ」と回想することになった。事実その後何度もモスクワにいったがすべて直行便であり、新潟からハバロフスク経由が一度あったきりである。停車時間は最大24分、最小3分と様々だったが、その数は実に85駅という多いものだった。それぞれの土地の青年共産同盟委員に日本代表団を歓迎させるための処置だった。バイカル湖畔に達した地点で停車、湖畔に降りる機会が与えられた。イルクーツクではモンゴルからの団が連結され、車内で交流した。

車中で、用意していた日本製の航空用便せんに手紙を書いており、そのほとんどが両親あてのものであり、帰国後回収してノートに張り付けられたもので当然だが、勤務していた大分県庁秘書課宛のものも収められている。写しではなく実際のものである。

お懐かしい秘書課の皆さん、お変わりございませんか。とくに原水協の事務局におかれましては、世界大会を前にして、何かとご多忙のことと拝察いたします。私は非常に元気に旅を続けております。ナホトカで乗車以来、今日でちょうど一週間たちました。私たちを乗せた特別列車は二十二日モスクワ着までに八十六か所の駅に停車いたします。その度に、朝であろうと、真夜中であろうと、町や村の人々が、素手で摘んだ花束や、絵はがき、バッチなどを持って心から歓迎してくれます。

ナホトカでは歓迎会場では、日本の被爆者代表として挨拶をいたしました。十七日にチタに着きましたが、冷たい雨のなかで出迎えの婦人が自分はぬれながら私に傘を貸してくれたり、バッグのなかからブローチを取り出して留めてくださったり、「ザ ナーシユ ドルージブウ（私たちの友情のために）」「スパシーボ（ありがとう）」と、言葉

「はあまり通じなくても相手の言うことを体で感じることができるのです。食事、「平和と友情」、討議、そしてまた「ミール・イドゥル・シバ平和と友好（駅のホームに出ること）」、また食事と同じような状態が一週間も続くと、何となく疲れが出てきます。

ナホトカの駅名はチホオケアンスカヤ（太平洋）であったが、モスクワの到着駅はヴァアストーチナヤ（東方）である。「岡田嘉子さん、永田尚子さん、安井侑子さんが出迎えるに見えられた」とあり、このうち永田さん以外の二人は初対面だった。「侑子さんは（プラハ経由で）モスクワに着いて一四日目だとのこと、家のことが気になるらしく、ご両親のこと（会ってきたか、どうか）を訊ねておられた」とある。永田尚子は「おむすびと卵やき」を持参した。

巨大なローマ風呂に入った後、三台のバスに分乗、市内見物の後、夕刻にキエフ（方面行）駅でナホトカ以来の列車に戻り、ウィーンを屈指したが、私が通訳だったバスは彼女たちとは別だったので、この時の三人を見ていない。ずーっと一緒に「キエフ駅で見送ってくれた」と記されている）。モスクワ放送の対日放送をも予定したインタビューを受け（通訳は岡田さん）、その録音について大分宛ての手紙には「私の声をお聞きなつたでしょうか」とある。

ウクライナを通過、国境の町チョップでインド代表团と合流、ナホトカ以来の列車をおり、軌道が広軌から普通の単軌となってハンガリーの電車で代わり、一晩中走り続け早朝のウィーン到着となった。翌々の26日夕刻に競技場で開会式の大行進。「観客席に、日の丸を振る人々を見た」とある。29日中国代表团主催の「日中交歓会」があり、ここで彼女はウィーンでの最初の挨拶をしている。終わって品見物をしたらしく、ウィーンフィルの会場前での越劇の主演女優との写真が残っている。

その二年前のモスクワ友好祭でレーニンスタジアムに向かう通りの横断幕で、その多さで目立っていたのは、「偉大なソ中両国民の永遠の兄弟の友情万歳！」の文字であった。またフルシチョフ党書記長以下のお歴々が見守るスタジアムの来賓席の一角にあつて見るようになった入場行進で、最大の外国団は中国であり、そのフィナーレの小学生によるマスキームは、平和を意味する欧州諸語の後を締めくくって、最後に登場したのは漢字の「和平」であった。招かれて総長と会談したモスクワ大学は、夏休みで人影はまばらだったのだが、図書館は「帰省しない」中国人の学生であふれていた。帰路の北京行きの際は東独の対中支援の技術者家族と同乗し、大陸最後の広州では、迎えてくれた中国機関の人たちが夕食に先立って案内してくれたのは、中ソ友好会館であった。フルシチョフのスターリン批判の衝撃で動揺した東欧に周恩来が飛び、これを鎮めたことへの感謝であることは承知していたが、この年のソ連行で私が受けた驚きの最大のものは、このソ中の一体感だった。

それから二年たって、その余波はまだ続いており、中国はやはり大代表団を送ってき、日本との交流を重視し、中華料理の具材も列車で運んできているということだった。その席でわが被爆者はウィーンでの最初の挨拶をしている。

(前略)

本日は中国の兄弟姉妹の皆様とお話する機会を得ましたことをここから喜んでおります。

日本を出発するにあたりまして各地の被爆者団体の方々と話し合っていました、人々の一致した気持ちは常に変わらず私たちを支援してくださる中国の皆さまにたいする感謝の言葉でした。ここであらためてお礼を申し上げます。

(中略)

皆様の心からなる歓迎と友情を日本に持ち帰りまして、被爆者にお伝えいたします。
中国と日本の友好万歳！

7月31日 バイリツシャーホール 二十三ヶ国 250人

女子青年集会 (若い娘の社会的地位はいかにあるべきか)

8月1日 午後六時に代表团全員がシアッルベルグおよびブルグ・テャトの二か所に集結し、会場であるヘルテン・ブラツに向けてパレード。三〇四万人。五大大陸の女性代表五人が並び、その代表として挨拶。

平和集会におけるスピーチ

私は広島の被爆者として皆様の前に立ちました。

十四年前広島に投下された一発の原爆は一瞬のうちに二十八万の生命を奪いました。

この原爆によって私の体には一生消えることのない傷あとが残されました。

私の夫は、結婚生活二十日の思い出を残して、この世を去りました。

私があの時、焼けただれた体を引きずりながら、逃げ迷うなかで見たことは、今でも悪夢のようにつきまとい、忘れ去ることができません。

火傷の苦しみから水に飛び込んだ人々の死体で、みるみる埋められていった広島 of 七つの川――

――
大きなお腹をして苦しみのたうちながら道端で死んでいった、身ごもった母親たちの姿
――
知って気が狂った母親の姿――

た。

しかしこの悲惨はこれだけで終ったものではありません。ここに私とともに立つはずだった一人の被爆者は、出国発を目前にして、病状悪化し、入院する事態となりました。

日本で今なお一週間に一人の割合で生存被爆者の犠牲が生じているのでございます。また子供を産むことの不安に苦しむ女性、被爆者であるために職をえられない、また失う青年がたくさんおります。

皆さま

被爆者の生命と幸せが今なお危険に晒されているだけではありません。原爆により全人類の生命がおびやかされています。わたしたち被爆者は原水爆の実験がそして核武装が人類にとって何を意味するかを、誰よりもよく知っております。それゆえにここに参ったのでございます。

フェスチバルに参加した皆さんや、ここにお集まりのお客様を通じて、全世界の人々に訴えたいからです。

皆さま

原爆死に反対しましょう！

平和共存の道を切り開いてゆきましょう！

この後に両親に宛て手紙を書いている。

「毎日忙しくて睡眠時間は三、四時間なのですが、食事がおいしくて、それでもてているのです。ご飯など一度も食べたいなどとは思いませんし、生活の条件が私にはびつたりで帰りたくありません。集会と各国新聞社との対応で全く暇なし、市内見物もその合間を縫って駆け回っています。でも結果的にみれば、私が一番幸福者のような気がします」。

「二日の日曜日にはキャンプ（宿舎）を抜け出してチロルに行きました。学生三人と女二人で、この楽しさは一生忘れることができないでしょう」。

このチロル行のことは『ヒロシマまでの長い道』に詳しく記した。マウントハウゼンのナチス収容所行を誘ったが、「嫌です」というので、気分の転換になると思い私が、大槻義彦とともに企画したのであって、チロル州では一番近いキュツペーケルを選んだ。町に万国旗が飾られていて、何ためか不思議だったが、ずっと後年古川和男がらみで実績を調べていて、スキー場で有名なこの町が夏にはしばしば国際会議に使われていることを知った。世界平和評議会のウィーン・アッピールなどはここで討議され、ウィーンの名を冠して発表されていたのである。不思議な縁というべきなのだった。

「八月一日の平和集会はヘルテン・ブラツ宮殿の庭で三万人以上が集まりましたが、私はここで三分間の演説をいたしました。私の後に有名な黒人歌手のポール・ロブスンが独唱して盛りあがりました。この後、モスクワ・ニュースからカメラ撮影を申し込まれています。頭はもうくちやくちや（ママ）、顔は（日焼けで）黒くなりましたが、とにかく元気です！」

太平洋沿岸諸国集会における挨拶

8月3日 9・30〜14・00

場所 ソフィア

参加国 日本（主催国）、オーストラリア、アメリカ、ソ連、中国、インドネシア、ペルー、ベトナム、カナダ、メキシコ、ペルー、チリその他

私は日本全国四十万の被爆者を代表して、このフェスティバルに参加いたしました。今日はとくに同じ太平洋の波に洗われている太平洋沿岸諸国の皆さまに御挨拶できることを非常に嬉しく感じます。

十四年前広島に投下された一発の爆弾によって、二十八万市民の生命が失われ、続く長崎では十七万人の生命が一瞬にして失われました。

逃げまどう焼けただれた灰色の人々のボロボロの行進。建物の下敷きになって、生きながら焼け死んでいった人々。これらは一、二の例に過ぎませんが、これこそほんとうに生き地獄でございました。

広島、長崎の悲惨さは、これで終わったものではありません。さらに恐ろしいのは、十四年たった今日でも、根本治療がないまま、原爆病で死ぬ人々が後を絶たないことでございます。私知っている範囲だけでも、今年は六月末までに広島で二十八人、長崎で七人の被爆者が原爆症で亡くなっています。

一九五四年太平洋ビキニ環礁での水爆実験で、日本の漁船第五福竜丸が死の灰を浴び、乗組員久保山愛吉さんが犠牲になりました。原水爆保有国の実験により大気が汚染され、人類に危機が迫っていることは、国連の科学委員会やシュバイツァー博士らが警告していることです。

私たち被爆者が身をもって味わった原爆の怖ろしさ、広島・長崎の事実はだれもが否定できないものです。

世界の人々の上に再び原水爆の悲劇をもたらさないために、私はここで皆さまを通じて世界に訴えたいのです。

原爆死に反対しましょう、

太平洋を文字透りの平和な大洋に！

こうして翌四日の夕刻、市庁舎前の広場の仮設舞台を中心とした閉会式があったのであり、開会式の行進とはことなっており日本団も自由行動で三々五々で集まったのである。

その三日前の「平和大集会」では、わが被爆者女性がみずから「演説した」と記すスピーチを行い、続いて各国語による「原爆ゆるすまじ」の大合唱がおこなわれ、締めがポール・ロブソンの独唱だった。

第六回友好祭のフィナーレは、それを継承・反復する形で行われた。すなわち五大大陸を

代表して五人の女性に囲まれるようにしてポール・ロブスンが再び登場し、ドヴォルザークの「わが母が教えたまいし歌」を歌って終わったのであり、その隣に並んで立つように着物すがたの日本女性がいたことから、演壇のすぐ下で「かぶりつくように」見ていた城田俊氏から「奇蹟」と記憶・回想されることになったのだった。つまり人類の規模で何事かを啓示している一幅の絵とみなされていたのである。

ベルリンに壁が築かれたのはこの翌年のことであり、この友好祭には西ドイツは個人参加の形をとっていた。三十年の後、その壁の崩壊と西による東の吸収的統合が起こった。これに刺激され1989年ベルリンに立ち寄るスケジュールを立てた私は、旧東のマルクス・エンゲルス公園で、二人が並ぶ銅像の台座に「われらのすべてが誤りだったわけではない」の大文字をみてカメラに収めている。

ヘルシンキに飛び、エストニアから「人間の鎖」の名で呼ばれることになった道を南下し、ラトビアに立ち寄りトニアに至ったのだが、そのすこし前にソ連KGBの流血の弾圧があり、ビリニウスでは通訳者として「ロシア語で話してよいですか」と問わねばならない雰囲気が存在した。同国のチエルノブイリと同型の原発に案内してもらい、ロシア人所長の「この原発なしにはリトワニアの経済はなりたちません」の説明をうける。帰路、同乗を求められて隣に座り、案内者の女性国会議員から「ロシアに固有の領土拡張欲」について持論を聞かされた。私がサハリンからの引揚者であることはまったく言わなかったにもかかわらず、「サハリンだって日本のものでしょう。どうして日本は返還を求めないのです」と言われ、黙して答えなかった。私はそこが原住の少数民族をもふくめた日露の共有の地になればと思っている。世界全体としては、国境は撤廃され、国家は消滅されるのが望ましい。（「私はもう祖国などもたたくない。私の子供たちには、他人たちの祖国と悪意を、叡智と愛とを、死ぬまで教えるわ」M・デユラス）。

8月5日ウィーンで団を離れた私は、その後の彼女を私は見えてはいない。団は往路と同じルーとを通り、キエフで遊覧し、モスクワで買い物をし、同じ列車に乗り換えてから、両親にあてて長いまとめの手紙を書いている。キエフを奈良のような古都と評し、モスクワの赤い広場の土産物店では、「思い切って、どんと皮のジャンパーを買いました」と書く。大分木下知事の計らいで彼女は海外出張の手当てをもらって来ていたので、金はあるていたのだ。なにしろウィーンでは私に饞別をくれたほど彼女だったのであり、余っていたドルを使ったものようである。

あなたとの出会いから求婚に到る経緯については一応のことは書いてきた。しかしそれは、私の立場からのものであり、あなたの立場からのものではなかった。あの旅のあなたの日記を読んで、ウィーンでの別れの後の、とくにモスクワを離れた後の、すぐ隣の車区の、私が起居していた車区のベッドが空白になっている列車の日々についての記述を読んだと、私はそれを痛感した。列車はやがてナホトカに着き、往路と同じ客船に乗船

するが、岸壁を離れてすぐに停泊した。友好祭の後、世界民青連のプラハでの拡大評議会に出席した人々があり、その帰団を待たためと説明を受けていたようで、そのことを記している。しかし同様にブタペストでの国際学連の拡大評議会に出席した私については、何も記していない。これは往路においてすでにそうであり、あなたは旅で最も強い出来事であった私については、ロシア語の質問をした以外のことでは、なにも記していないのだ。明らかなのは帰路のあなたは私が帰ってくるとは、まったく予想していなかった。あなたの旅日記は私の帰還の前日で終わっている。

ウィーンであなたに別れを告げて背を向けて歩き始めた時、私を捉えた或る思いがあった。それは「あの人とともに在るならば、到着する稀有な地点があるのかもしれないのに、それを逃したかな」という疑いだった。結婚し最初の子が生まれ、一年後に重症の心不全であることが明らかになった時、「このことだったのか」と思った。その男子の四歳二カ月での死の後、私は別人となっている。私の書いたものはすべてあの子に指示された捧げられている。

これが2011・3・11のフクシマ以降に再び変った。もっともその予感、すでに述べてあるように1988年以降漠とは感じられていたものだった。なにしろあなたの大分市での幼なじみである古川和男博士の核エネルギー炉、すなわちトリウム熔融塩炉のフクシマ正しさが明白になったからである。

ロシア人のヴィソーコフは「小なりといえども世界史の不可分の一部としてのサハリン」と記し、札幌での国際学会ではチェーホフの『サハリン島』について「この書をどのようなジャンルに入れるべきでしょうか」と問題提起した。まことにこれは、私に言わしむれば、航海術までも含む、多くのジャンルの問題を取り込んだサハリン樺太に関する小百科事典である書物であり、医師にして作家であったチェーホフはこの書によって大変身し、後期の戯曲『かもめ』以降の創造に入るのである。サハリンが多面性を要求したのであり、チェーホフはシーボルトの巨大な多面性をも取り込んで、それに応えた。

すなわちサハリンは人に多面性をしいるのであって、私も一念発起し、出身学部学科からみれば門外となる分野に挑戦し、『トリウム原子炉革命——古川和男・ヒロシマからの出発』を著した。

一方で全世界的に、既存のウラン系軽水炉の原発があり、他方にこれに反対し再生可能エネルギーを目指す勢力がある。それらを見据えた上で、古川和男は自らの原発を**第三の道**と定義していた。ただしこの道こそが、遅れて登場したために第三と自称せざるをえなかったに過ぎず、真正な道であり、フクシマによって立証されたのであって、氏は安堵して他界されており、この年事故直前に氏が設立していた研究啓蒙団体と営業会社の双方に加入しつつ、私は著書によって支持の態度を表明した。

1979年スリーマイル島事故以来原発の新増設が禁止されていた米国であったが、2018年に新型原子炉のベンチャー企業を支援するようになり、これに対応してわが経産省も「社会的要請に応える革新的な原子力技術開発支援事業」に乗り出すことになり、T

TSをはじめとするトリウム熔融塩炉関係の三社が選ばれた、多年にわたる申請がようやく受け入れられたのであり、関係者一同は喜んだ。古川の発明になるFUIIは中国上海で建設されつつあり、これに遅れることになったが、日本でも建設の見込みが立ったのである。

しかしその後、トリウム禍とこれに続くウクライナ戦争の勃発のなかで誕生した自民党岸田内閣は、あたかも福島事故などはなかったかのように、その時以来停止されていた原発の全面的再稼働の方針を打ち出した。これはフクシマ以降鳴りを潜めていた「原発ムラ」と蔑称される体制のなりふり構わずの復活であった。

生じた事態をもっともよく説明するのは、マタイ伝9章にある「新しい酒は、新しい革袋に入れよ」であると思われる。新しい酒とはアインシュタインの発見に基づく核エネルギーであり、革袋とはそれを用いて発電する炉である。既往のものがすべて物理工学的なものであったのに対し、核分裂という物質の化学反応によっておこなうまったく新しい発電であることで、ユージン・ウィグナーは、それは化学工学のプラント、つまり炉になると予言した。原爆開発以前のことである。

戦時下であり、原爆の開発が優先され、製造された二つが広島と長崎に投下されて大戦が終結。冷戦の始まりとともに、潜水艦のエンジンのために最初の原子炉、冷却に水が使用されることで軽水炉と呼ばれる炉が、オークリッジ研究所のワインバーグによって開発される。しかし彼は陸上での公共施設としての発電では、師匠筋のウィグナーに多大に示唆されて、液体炉である熔融塩炉の開発を目指した。

1927年生まれの前川和男は精錬所所長の長男で幼時より父君を継いで化学技術者になると決めていたようで、京大の化学科卒、東北金属材料研究所に入る。1955年已最初の広島での原水禁世界大会には宮城県の代表で参加している。1959年留学先のロンドンでオークリッジ研究所の研究を知り、「生涯のテーマとした」。なにしろ軍事施設であるところで、訪問できたのは1968年になってであり、「熔融塩炉MSRE」が1865年に臨界に達し、無事故で運転されているのに「驚嘆した」。

自伝『最初の核時代』で記すところによれば、同時にワインバーグは、陸上に上陸し、全米に広まりつつあった軽水炉を、ゲーテの『ファウスト』に依拠し、「ファウストの買物」と批判しはじめる。日本では部分訳でこれを「悪魔の買物」と訳されているが、この方が分かりやすくもある。内輪での発言であったが、繰り返されて、当の悪魔に取りつかれた人々の反感を招き、1976年にORNLの所長を解任される。

古川著ではこの思想は全面的に継承されており、「革命」の語が表題に使用されているが、破壊ではなく建設を、「悪魔からの買物」からの180度の転換を呼びかけるものである。わが「原発ムラ」は反感をもって迎えたが、すくなくともひとり全面的支持を表明した人があった。東電の技術部門の総元締めであり、全国技術者の教科書でもある『原子力発電の歴史と展望』（2010、改訂新装版）の執筆者にして編集責任者である豊田正敏氏であった。氏は、安全性、経済性、利便性のすべてにおいて、トリウム熔融塩原子炉

が欠陥皆無の原発であることを承認した。これは己の過去の全否定にたどり着くものであったが、氏にはそれを敢えてする学的良心が存した、

繰り返えすが、古川著のフクシマ後の増補改訂版である『原発安全革命』は帯に「この原発であれば、チェルノブイリもフクシマも無かった」と記されて出版された。

これを受けたかのように最も早く『週刊文春』の新刊案内で立花隆は「驚く」を連発して絶賛し、古川をホテルに缶詰めにしてインタビューを行っている。また上司だった堤堯は『正論』に「正しい原発は何故葬られたか」を発表。私は古川氏からそのコピーを手渡されて読んだのだったが、氏は「ここまで書いてくれるとは」と感激していた。この人はスカパー・テレビに「著者に聴く」という連続番組を持っていて、これに古川を招いて語らせ（私は同室して傍聴）、さらに同氏は古川自宅で長時間のインタビューをおこなった。これは前後二回にわたって放映され（私は録画した）が、その二か月後に亡くなった古川の貴重な記録となって残っている。氏自身己を語り切っており、結びでは堤に強い謝意を表明した。

強調されねばならないのは、右事実とともに、両者のその後の変化である。前者については沈黙であるが、後者は同じ『著者に聴く』番組においてだった。『それでも日本は原発を止められない』の山名元を登場させ、その後に沈黙して今日に至っている。しかるべきまたフクシマ後豊田正敏のトリウム推奨文を掲載していた朝日新聞も沈黙するに至った。強力な圧力があつたと考えられる。その延長もしくは帰結として岸田政権下での原発再稼働が起こったのであり、しかしこの傾向は、大局的には「原発ルネッサンス」が高唱交渉されていたフクシマ以前から生じていたものであり、早くから指摘されていたことでもあった。その代表的ひとりに辻井喬（堤清二）氏がいる。

私はしばらくぶりで2007年刊の同氏の『新祖国論——なぜいま、反グローバリズムなのか』を開いてみる。氏が「祖国」という言葉を使うのは「敗戦以来初めて」とのこと、表題の「新」はそのためのものである。それを敢えてすることになったのは、序文によれば、「時代が悪い方に傾きはじめているという危機感」のためであり、それは「戦争の方へとか、主権在民でない方へとか、社会に格差が広がる方へ」を意味する。あるべき日本へのあらたな回帰のためののだが、そのきっかけとなったのは、講演に招かれて初めて訪れた北海道北端の稚内で、そこでの公園で見た石碑だった。

彼女たちは日本が連合国に降伏した五日後、樺太（現サハリン）で最後まで任務を果たした後、ソ連軍が上陸して来るのを知って自害した九名の郵便局の年若い電話交換手であった。碑には、

「皆さん

これが最後です

さようなら

さようなら」

と彼女たちが死の

直前に発信した言葉が刻まれていた。

不勉強でこの事実を知らなかった。碑の前から動けなくなって（後略）

氏はこの石碑の文によって日本を再発見したらしい。この言葉を最後に掲げる長い詩を書き、それを収めたこの評論を書いた。「グローバリゼーションなどという動きは、世界を均質な市場にしておもうとし、そのリーダー格のアメリカのもっとも忠実な従者は今の日本の権力」という観点から、真のあるべき日本を構築する試みであった。

年齢も四歳上であり、大学も違う私が氏と面識を得たのは、吉田嘉清に従って主席していた東大の氏らの旧日共細胞の集まりである一九会においてであった。樺太遠淵会に盛岡に住む女医であり病院経営者の遠山美智さんがおり、リトアニア領事杉原千畝のユダヤ人救事業の縁で辻井氏と親しく、そのことを話すと食事に誘ってくださって、じつくりと話をうかがうこともできた。1950年10・16の第一次早大事件の際には早大構内にあって、警官隊の構内出動に際しては、とっさに銀杏の樹によじ登り、捕縛を免れている人でもある。

「汚職、腐敗、醜い駆け引きをそのままにしておいて、法律で国民に愛国心を強制しようとするのは、悪しきナショナリズムの域を通り越して、国全体を強制と嘘、偽りの社会にしよう」と記した辻井氏は、トリウム熔融塩炉については知らなかった。しかしフクシマによって暴露された事態には衝撃をうけ、事態が『新祖国論』の当時よりも悪化していることを感知しており、民主党内閣が倒れて後の、自民安倍内閣の成立には由々しい事態の到来を認識していた。すでに病魔に侵されていて、そのため口述となった雑誌発表の最後の経論は「こんな日本では死んでも死にきれない」の表題となっていた。買って読んでみたが、東大細胞の先輩であった渡辺恒雄氏について、おのれの対応を「甘かったかもしれない」と述べていて、『新祖国論』に「自戒をふくめて」とあることの理由の一端が明かされている。

くりかえすが日本の原発問題は、1950年代の中曽根康弘・正力松太郎兩人による発意に遡ることができ、今日の混乱の事態はその結果なのである。正力の部下であり、中曽根との連絡役を務めた自認する人に渡辺氏がいる。いわんやウラン軽水炉路線は、米側と結んだ読売新聞の社をあげての後援のもとに実現したのだった。

日本にこそもっとも相応しいと信じ、古川のF U J Iを推挙したワインバーグの中曽根宛の手紙は打ち捨てられた。

疑いもなく古川の誘いもあってワインバーグは1991年広島を訪ねている。「かつて」核兵器の開発に携わった者」として「ヒロシマ（広島への原爆投下を指す）は正当化されるか？」という疑問に取り組んできた者としてであった。そして8月6日のヒロシマを見かつ体験して「ヒロシマは必用だった」の答えを見出す、「核兵器を使用しない」という伝統を永続化させる」として、であった。しかしナガサキについては、必要は

なかったとしている。

ロシアから移住したユダヤ人を両親にもつ（つまりハザール）といわれるこの人は、ヒロシマをキリストの十字架上の死にたとえ、「核兵器の禁忌」を「イスラムの断食やモーゼの十戒」のような「永遠の禁忌」と人なすべしと説く。仏教が抜け落ちていると見えるが、その知識が無かったからであり、「ヒロシマの梵鐘（伝統的な鐘）、平和公園を訪れた人々が鳴らす梵鐘の厳粛な響き、連れてこられた子供たちでさえ静かにふるまっている様子」の文言で補われているだけではなく、オークリッジの財団に働きかけ、自らも出資し、広島のもの三倍の大きさの梵鐘を発注し、「国際友好の鐘」と命名し同市の公園に据えた。

たゆまず努め励む者を われらは救いうる

著書においては、右の『ファウスト』中の文言を掲げ、己の努力が第二の核時代のものであったとし、「残念なのは私とその実現をこの目で見られぬことである」と記して全文を結んだ。

ウラン軽水炉とトリウム熔融塩炉とは、おなじく原発ではあっても、抛って立つた技術思想が根本的に違っている。したがってTTSは部分的改造とでも云うべき方法を提案し、原子村の一角である通産省の助成を受けた。しかし実際に個々のメーカー各社に当たってみると、部長クラスまでは理解しても、その上には進まないとのことで、既存の路線の壁につき当らざるをえなかった。財界全体としては、投資した巨額の金の回収が優先するのである。

私は専門外の理科学系の問題にのめり込んでしまった。しかしこれは専門の文学に用意されていたことでもある。たとえばドストエフスキーの文学は世界的な規模での最初の小市民の文学である。ロシアに限定しても貴族地主文学のみだったところにウクライナ出身のゴーゴリが現れて、ロシア語でロシアの都市の小市民を描き、これを継承して大成したのがドストエフスキーである。文学の内容が新しくなったために、それを盛る形式が新しくなり、対応して文体も新しくなった。その経緯をペレヴェルゼフはマタイ伝9章17からの引用をもって説明したのだった。ガラス瓶などは無かった時代のこと、ワインは動物の革袋に容れていて、「そんなことをすれば、革袋は破れ、酒は流れ出し、袋もだめになってしまう。新しい革袋にいれる、そうすると両方とも保たれる」の言葉が語られた。私はこの格言の方が、「悪魔の買物（に違いない）」よりも包括的であると考えた。日本の政府主導による原発路線は根本的に間違っていたのであり、それは今日断末魔の様相を呈している。

辛島和子よ、あなたのおかげで私は古川和男とそのトリウム熔融塩炉FUIIを知るこ

とができた。それは私の人生の到着点である。あなたと夫婦になっていなければなかったことであり、かつそれが今のところ文系の世界では孤立した珍しい現象であることで、あなたとの出会いが何であつたかの省察を迫る。

二つの被爆県以外でその数が多いのは近接する諸県であり、また東京、大阪等の大都市である。いずれも当時たまたま両都市に在って被爆し、その後元地に帰った人びとである。あなたの場合も親同士の話し合いで婚約が決まった時、相手の商科大出身の陸軍経理将校は満州にあつて、それが本土決戦の部隊移動により広島に移動、宇佐で挙式するも、部隊のさらなる移動が決定して、それまで一緒に暮らすべく、広島に移り住んだのだった。夫は部隊で起居し食事していて夕方に来て朝に戻る一週間があり、8・6をむかえたのである。

下宿暮らしをしていて、食事が粗悪で腹をこわし、近くの内科女医にかかつており、夫婦関係はなかったも同然だった、と語っていた。ともどもに収容された戸坂の小学校で会い、しかしその人にはほどなく全身に斑点が現れ、隔離されて死没。遺骨が届けられて、泣きじゃくるあなたに、隣に起居していた中将の老夫人は「あなたはまだ若い（満一八歳）、結婚する機会があります」と慰められ、「結婚なんかするのですか」とか言っちゃってね」、と往時の自分を茶化しつつ、泣きつづけたことを笑って語ったものだった。そこでの十数日をふくめての総計二十日の「初婚」であつた。かかつていた女医とは大分で再会、それぞれ会長、事務局長になって大分被団協を結成した。

生来明るい性格で、冗談を言つて、人を笑わすのを好んだ。被爆体験を語るスピーチも感情を交えない淡々としたもので、強調するようなところはない。しかし悲しみが全身からだよってくる性格のもので、後にテレビで、被爆者たちが力をこめて証言するのを見つつ、あなたを不思議に思つたものだった。しかしその語りの平静さは、企まらずして演技にもなっていたのであつて、ソ連でもまたウィーンでも、日本代表団は被爆者を演技させるために女優を送り込んできた、と思つた人たちがいたはずである。

しかし両手足と襟元の火傷は相当なものであり、一度皮はつるりと剥けおちて後に再生した顔面でも、よく見ると鼻梁の付け根には打撲とおもわれるものの痕が残っていた。

「格別なひと」の評が出てくる所以であつた。

小さな県であるにもかかわらず、別府に九州大の温泉研究所があり、ここで被爆者の放射線害に温泉水が有効との発見があつて、木下郁知事が全国の被爆者が利用できる療養センターの建設を決定、本家本元の両県にもない施設で、これが大分の名を高め、平和友好祭代表の一名の女性枠が大分に与えられることになった。その開所式が友好祭の翌1960年二月に行われ、同月に大分で結婚。四月の北海道十勝の我が家で血縁者だけの祝いの集まりを済ませ、五月に東京で披露宴が行われた。安保闘争が始まっていて、一週間後、出席者に加わっていた前の全学連委員長が電話で、一人の女子学生の死を告げてきた。

被爆から十四年目の夏の外国への一カ月近い旅で、あなたは健康だった。よく食べるよ

うに努めたので、多忙だったのに、体重は増えて帰った、と笑っていた。大分県立第一高女という才媛校の出身だが、勉強よりもテニスに熱中して全九州大会に出場している。

木造家屋の二階にあつて、爆風で吹き飛ばされ、髪と衣服の焼焦げる臭いで気絶から覚めたのだか、「一時は死んでいたのかもしれない」と言っていた。とはいえ恢復し健康に生きてきたのだったが、1984年に最初の乳がんで片方を切除され、1987年に残る片方が同様になり、すでに入っていた人工透析の通院生活も週二日から三日に増え、一人では通院できなくなつて、私は会社を辞めて付き添い、また所有して二年の一戸建てを売り、クリニックに歩いて行けるところの集合住宅に移った。

無病息災できた私に胃潰瘍の疑いが生じ、大学病院に入院検査をうけた。胃壁の異物を採取しすぎたのが原因だったとかで、出血が生じ、夜半小用に立っていて眩暈が生じて倒れ、一両日意識を失った。回復したがまだものが言えない状態で、在京の同学科の男女の友人六、七人の見舞いを受けた。最近よくその時の友人たちが心配げに私を見つめる顔を思い出すのだが、そのほとんどがその後にくなくなつており、同級の男子で残っているのは、札幌のテレビ局に就職したひとりだけである。

生まれた年に満州事変がはじまつており、国民学校五年生の年に大東亜戦争が始まつた。日本は常にどこかで戦争をしており、生涯でもっとも思い出したいくないのは、敗戦前の、勤労動員で明け暮れた数か月である。

安らかにお眠りください 過ちは繰りかえされませんから

広島平和公園の慰霊碑に刻まれた碑文の後半は戦争に諸々と従ってきた己一人一人を指すと理解してきた。国を挙げての戦争協力、しかしこれに協力せず反対した少数者がおり、殺された者があり、獄に捕らわれたものがあつた。私が入学することになった露文科という学科は1931年に創立されたのだが、日共が弾圧により壊滅せしめられた1934年には閉鎖されており、敗戦まで卒業生がいない。

しかしこの間、ロシア語・文学の講座は第一回の卒業生である助教授の岡沢秀虎によって維持されていた。「私が学科を護つた」と称していたが、朝鮮戦争を控えての占領軍の政策の激変、レッド・ページ、反対する学生運動、第一次早大事件、学科閉鎖を怖れ、面接諮問で受験生に「政治運動をしない」誓約を強要するようになった。

対するに松尾隆は病床にあつたにもかかわらず、レッド・ページ反対闘争の学生運動に鼓舞のメッセージを出し、逮捕された学生たちの「建造物侵入」の公判では大山郁夫とともに特別弁護人になつただけではない、東大出隆教授の選挙応援演説で逮捕拘留された東大学生たちの特別弁護までもおこなつた。ペレヴェルゼフどころではなかったということもできる。戦前・戦中の木寺黎二時代のドストエフスキー学者だった人の、本名に戻ることによつて実現できた変貌には驚くべきものがあつたのであり、その間の事情（の解明）こそ私が志していたものだった。

その松尾隆が人としてもっとも大切なものとして学生たちに求めたものは行動であり、それを文字どおり実践したのが「最愛の学生」だった全学自治会委員長だったの吉田嘉清である。裁判終了後、弁護士試験の勉強をしていたが、求められて日本原水協に事務局次長としてはいり、生涯をこの運動に捧げた。ということは初代理事長だった安井郁氏に仕えたということでもあり、同じく杉並区に住み、家が近く同家とは家人に近い立場にあった。安井没後の『道 安井郁 生の奇跡』が法学部部長だった法政大出版局から出されており、夫人による「あとがき」には、製作が吉田の提案によることが明記されている。また収録されている安井の1963年の原水協理事長辞任についての声明「国民運動の論理と倫理の確立を望む」と関連させて、日本原水協副理事長（当時）として「国民運動の論理と倫理」を執筆している。安井の「論理と倫理」を逆転させているのであるが、それは「この倫理とつくところが、先生の一つの大きな特徴」だったという独自の把握のためであり、こう結ばれている。

「先生の残された国際法と原水爆禁止運動とか、倫理と論理の問題はもちろんのこと、原水禁運動を不滅なものとし、そこに足跡を残した安井郁という問題を私たちの研究テーマとし、同時に、これを実践的な生きた運動を明日から続けてゆく私たちの糧として、非常に大きな前進を遂げて行きたいと思っております」

1963年に分裂があり、1981年に再統一があつて、1982年の国連軍縮特別総会に向けての全米横断の大作進を控えての執筆だった。そしてこれが大成功裡に成され、その翌年に再分裂があつて、安井後の理事長だった医学者草野信男氏とともに吉田は原水虚を追われ、またともに日共を除名されることとなった。松尾と昵懇だった古在由重氏が吉田を支持して離党。

私は一般の商社に勤務しつつ、主としてソ連に行き来してきたが中国にも行っており、日本共産党の自主独立路線を立派なものだと観察していた。吉田も、それこそ安井理事長にしたがつて何度も中国に行きながら、或る時期からソ連寄りだったようである。人に進められて不破哲三氏の本を読んだが、ベトナムに平和を市民連合の吉川勇一氏ともども、志賀義男に始まる一連のソ連への内通者の一人と断罪されていた。しかしながらこれ以上に衝撃だったのは、野坂参三氏の除名であった。50年党分裂の際の、当時は「主流派」と自称していた派は「徳田・野坂分派」と略称されている。一貫して正しかったのは、宮本氏に忠実な派だけである。しかし党自体は、その健闘にもかかわらず縮小しており、痛ましい。私は、左翼は小異を捨てて大同に就かねばならないと思い、再統一を願っている。

わが1957年の原水協からの訪ソの際、携行資料として広島市発行のガイド・パンフレットの露訳を作ったことがあるので覚えているのだが、「広島は近代日本の軍都として発展しました」と始まっていた。日清、日露両戦争の大本営がおかれた都市なのだから当

然だった。同市にはまだ英文のパンフレットは無く、その二年後被爆者代表が携行していたのも同じパンフレットだった。宇品港は大陸への出征部隊の玄関港であり、けして平和都市であったわけではない。「過ちはくりかえされません」が記されたのも、むべなるかな、なのである。しかし戦火の拡大に反対した勢力はあり、その代表として共産党があった。

転向者は続出したが、非転向を貫いた人々はおろ、繰りかえすが松尾隆はそのままも見事な例として宮本顕治を敬愛していた。吉田が百も承知のことだった。

マルクス主義にもキリスト教にも心ひかれること少なかった古川和男であるが、湯川秀樹同様に、仏教は科学的であると推奨していた。TTSの支持者には仏教関係者がおり、株主会で高野山に行く機会があつて、般若心経を精読することとなり、非転向の共産主義者林田茂雄（1907〜）の一連の著作に出会つて教えられた。インドの仏教者ナガール・ジュナ（竜樹菩薩）の『中論』にヘーゲル＝マルクスの弁証法が用意されていたとする見解であつた。「心経」は続く。

増不異減、減不異増 （増は減に異ならず、減は増に異ならぬ）

色即是空、空即是色 （増は即ちこれ減にして、減は即ちこれ増である）

増不異減と増減を使用するみちは、その社会全体のなかを細かく区切っているかべを取り払ってしまう以外にない。社会全体の富が、社会全体の所有になれば、「部分的な増減は単なる全体内部での移動にすぎない」ということになる。空とは積極的な、弁証法的な肯定であり、人生を生きぬく行動原理である。仏教で云うところの法は存在そのものの原理である。仏が法をつくるのではなく、存在そのものの中から法をさとることによつて、一人一人の人間が仏＝ブッダ（さとつた者）になるのである。（『般若心経の再発見』雪華社、52〜53頁）

ドストエフスキーの解説の鍵が二重人と分身の両訳語をもつドヴォイニクの一語の問題に帰着すると主張する私にとって、一神教のキリスト教とその逆の仏教を比較し、林田氏が私と同じく、法華経の「ガンジスの砂の数よりも多い」釈迦の分身を挙げているのは、喜ばしい。この一神教の起源はユダヤ教のモーゼの十戒の第一である「われを信ぜよ、われ以外を信ずるな」であり、この「われ」は姿と形のない抽象的存在である。後に貨幣に発展する観念を指すからだつた。これらのことについても先の章ですでに述べた。マルクス主義とはキリスト教の否定的超克、すなわち止揚なのである。

その初期の論文『ユダヤ人問題によせて』に明瞭に現れているように、西欧に民族国家が発展するならば、それらの諸国に少数者として所属するユダヤ人に内通者・内応者の嫌疑が生じ、迫害・排除が起こるのを、マルクス危惧した。それを免れるためには、各国のプロレタリアートに協力し、インターナショナルな革命を起こす以外にはなかった。そ

れが「共産党宣言」に込められた心情だった。その危惧は第二次世界大戦でナチス・ドイツの支配地域で広範に現実化された。ユダヤ人のガス室での殺害——ホロコーストである。

2011年にフクシマが起こった。それから十年すこしたって「ウクライナ侵略」が起こった。私がフランス国籍のユダヤ人であるエマニエル・トッド氏に注目したのは、とくに日本の大方の世論とは真逆に、氏が、この「軍事事件」を米英のアングロ・サクソン国家がロシアに仕掛けたものとする主張によってであったが、しかしそれ以上に、その両国を動かしたのが両国内のユダヤ系金融資本であることを、表には現わしていないことであった。「黒人／白人」問題を基軸とする氏のアメリカ社会の分析は鋭く説得的で、前大統領トランプ擁護は納得させられるが、とすれば、そのトランプが、民主党の背後にあり、かつてはジョン・ケネディ暗殺をおこなったユダヤ金融資本を指して、ディープ・ステートの語で呼んでいることを知らないはずはない。プーチンによるロシアの復活の承認もさることながら、ソ連によるナチズム打倒の激賞は、アウシェヴィッツの解放を念頭においてのものであるはずであり、しかしユダヤ人の名を出さないのは、それを敢えてするのが危険だからだろう。

スピノザとマルクスの普遍性を継承し、自らを「非ユダヤ人的ユダヤ人と自称したドイツチャー」は「ナチスによる六百万のユダヤ人の虐殺が、欧州の諸国民になんら不快な印象を、あたえなかったことは、疑いをいれぬ事実である。彼らはそれを冷然と見ていたにすぎない」と記し、オックスフォード英語辞典の「Jew」の記述を例に挙げている。それは「悪い金もうけ」と同義なのである。そしてこれに対応するように、当のユダヤ人の相当部分が、ホロコーストの悲劇にもかかわらず、その性格を変えなかったのであり、その現われがイスラエル国家の建設であり、これを支持支援した欧米のユダヤ人だった。ちなみにアインシュタインもイスラエル建国には反対だった。

トッド氏も心中ではドイツチャーと同じはずである。にもかかわらず隠すのは、自著『シャルリとは誰か——人種差別と没落する西欧』がその反イスラム批判のためにフランスで発禁となった事態のためである。代わって日本が、西欧以外で唯一西欧と似た社会発展の歴史を有することで、またその原爆被害にもかかわらず、投下国のアメリカへの批判を抑制した「内向性」によって、過剰な期待を寄せられることになった。

しかしこれには先例があった。ヒロシマの悲劇について、全世界に向かって、大声でかつ雄弁に語った最初の人は、デュラスの詩的な小品を除けば、米国籍であったフロイド学派の精神科医ロバート・リフトンだった。「祖父母が東ヨーロッパから移住」のユダヤ人（つまりハザール人）であり、結びの第12章は「生存者」となっていて、「罪の転嫁」ということが問題にされている。すなわち「原子兵器のもつ非人間性と大規模な破壊性が、責任者を指名することも、また罪を他に転嫁することをも妨げている」のにたいして、「強制収容所（アウシェヴィッツその他）の生存者においては、罪の転嫁を随伴する心的態度がはるかに強い」と比較・指摘されている。この差異の発見と確認が研究の基礎にあ

って、私から見ると、著者の内なるユダヤ問題がこの書を成立させているのである。

これを受け継ぐようにして、ツヴァイゲンバーグはヒロシマの「受け身の歴史」について「加害者のほぼ完全な欠落——ホロコーストの記憶との大きな逆対称をなす——は、事実、ヒロシマの追悼と記念のうちで最も目立つ要素である」と記している。

世代がぐっと若いツヴァイゲンバーグのほうが、イスラエルに生まれ育っているためでもあるのだが、ドイッチャーに顕著だったユダヤ人批判は皆無であって、「だれも攻撃していないユダヤ人のナチによる虐殺」と言った能天気な文言が頻出し、アイヒマンの逮捕と処刑も肯定されている。また、翻って逆に、ドイッチャーにヒロシマについての言及が皆無であることが注目される。また当然であるが、アウシエヴィツとヒロシマの接点の探求は無い。前者の執拗な探求と対を成している。

原爆体験が何であったかを最も深くとらえていた日本人はだれであったかと問うとき、それはトリウム熔融塩炉FUIの古川和男であった、と私は考える。あるいはまた、彼にとっては学恩のある学兄であるワインバーグ氏に加わってもらい、二人の *International Friendship* と言い換えてもよい。あるいはそのほうが精確であるかもしれない。

ツヴァイゲンバーグ書には日本での原発導入の黎明期、1956年の米文化情報局と読売新聞社長の正力松太郎による、ヒロシマ原爆資料館を使用しての原子力平和利用博覧会について頁が割かれている。「新しい人類の夜明けを告げる、第二の太陽」が歌い文句であった明らかにした。こうして1971年福島で東電一号機が運転開始されたのであり、2011年には全国で五十四基を数えるに至っていた。しかしそれが実際はいかなる代物であったかは事故が完膚なきまでに明らかにした。それから十余年、数々ある悪の最新のものとして政府&東電による「処理水」なるものの海洋放出がある。これについて元原子力委員会会長代理、長崎大核兵器廃絶センター(PECNA)副センター長鈴木達治郎教授が「**海洋放出を止めよ**」の長文の英文論文を発表した。ITMSF代表の吉岡律夫による要約を掲げる。

「科学(界)で決めるべき問題でなく、ワインバーグ博士が主張してきた「トランス・サイエンス問題」なので、一度放出を止めて議論すべきである。原子力推進機関であるIAEAでも、メリットが危害を上回る場合にのみ、そのリスクが許容される。ICRP(国際放射線防護委員会)も1990年の勧告で「1mSV(1mSV)」といった線量基準は、安全と危険の協会ではない」としている。そもそもリスクゼロは存在しないので、原発の電力源としてのメリットに比べて我慢できる限界という意味である。つまり、許容するかどうかは、科学の問題ではなく、市民社会がそれを許容するかどうかで決まる。ましてや、その基準以内だから安全、というのは間違い、ということ」。

フルトニウムその他の廃棄物処理は未解決のままである。

6章 未来への光

あなたは2015年8月29日に八十八歳で亡くなった。

それから四年して私は不整脈で甥が心臓外科の準教授（当時）を勤めるTH大病院でカテーテルの手術をうけ、それだけでは不十分で、心臓にペースメーカーが入った。見舞いにきた彼の母親であるわが妹の言うところによると、息子の心臓外科の選択は、同じ大学出身の亡弟の影響によるとのこと、しかしその亡弟の選択は、外でもなく私たちの最初の子、重症の心不全で生まれ四歳二カ月で逝った子が原因だったことを思い出した。私は父が開業医で医者になる選択肢もあったのだが、そうとは成らず、ロシア語による生活者に成った者である。またそれによって原水禁運動との係わりが生じたのだった。

あなたの没後、あなたにとっても因縁浅からぬ吉田嘉清さんが亡くなり、またそれから半年後に安井郁・田鶴子夫妻の息女、結婚して渡辺夫人である侑子さんの訃報をきくことになった。伝えてきたのは、すでに記してあるように、あのウーイン友好祭の団のロシア語通訳者の一人、北大スラブ研名誉教授の城田俊氏である。その半年前、月見の集まりで、友好祭以来六十四年ぶりで顔を合わせ歓談した人である。私とは異なり、翌1960年に日ソ協会のルートでモスクワ大留学を果たし、侑子さんとは同学であり、彼女のモスクワでのイタリア留学生との結婚では、ソ連の法律に基づく立会人を務めた人であり、再婚相手の良人の渡辺氏との関係では東大での大先輩である。

少数の集まりで葬儀が行われ、その際に読み上げたという故人への追悼文を添えたものであって、「どうしてわざわざ私に？」と思わざるをえない処置であった。参集者は全員一人一人眼をつぶるようになってお別れの言葉を述べたなかで、ただ一人用意してきた文章を読み上げたものだそうで、自らを「一人だけ浮き上がって」と形容していた。そして「侑子さん」という呼びかけで始まるその文を一読して、私は、間違っても「余計なことは一語も言わないように」、そのために文書化した「追悼文」であると読めた。

城田氏のモスクワでの安川侑子さんとの交渉については、彼の東大同級で親友のK社勤務の若村氏から聞いていた。氏自身彼女とは面識があった。「求婚したら、どうだ？」という誘いの問いに「（彼女は）おひい様さまだからな」と懐疑的だった、とのことだった。「ひいさま」が「お姫さま」であることは即座に分かった。父上の安井氏が、夫人のことを、妻ではなく「さい」と呼び、「さいが」云々と語っていた。自身はそうではないのだが、夫人は家系が男爵家、つまりは華族の家柄だから、のようだった。女中たちから「ひいさま」と傳（かしず）かれて育っているのである。戦後の激変はあったであろう、しかし保たれていたものは有ったはずであり、吉田嘉清は、夫人が自身でコーヒーを入れてくれたことがあって、そんなとき「今日は変わっている」と驚いた、と語っていた。

原水協勤務の時期、私は安井氏の評判の悪さに触れてきた。もちろんそれは原水禁での功績に係わってのものであるはずはなく、敗戦前東京帝大法学部の初代の国際法教授を時

代の大東亜戦争支持の言動、その結果としての戦後の辞任という形をとった出来事に関連していた。しかしそれから数年後、原水禁運動のなかで、たんなる進歩的文化人であるどころか、運動指導者として躍り出ることになったのである。違和感を覚えた人はおおく、中野好夫氏は、後には応じたが、当初は、原水協ニュースへの執筆を、安川氏への違和感を理由に拒んだのである。息女の留学が父君のレーニン賞と無関係であったはずはなく、ちなみにその少し前に国際学連関係で一組の夫妻が留学しており、彼女はこれにつづく三人目だった。

路線の対立に基づく紛争でより1986年に一度辞任し、1978年に顧問に退いた後、1980年に73歳で没。『道——安井郁 生の軌跡』が編まれ刊行されたのは、1983年で、これには冒頭に「戦犯視」もされた敗戦前の論文のうちの一遍も収められており、また1986年に杉並公民館で行い、しかし公刊されなかった二篇が遺稿として納められている。そのうちの一篇が『荒野の試み』とドストエフスキー」と題されたものである。「戦前の邦訳ドストエフスキー全集を愛読した」と記されており、事実そうだったようである。しかしその十年前の1976年の「生涯の重要な分岐点（私の八月十五日）」「法学セミナー」では戦時下にあつてレーニンの『唯物論と経験批判論』をゼミナールでとりあげたことを誇っており、あたかもその延長であるかのように「金日成主席の革命思想はマルクス・レーニン主義の発展史上にそそり立っている」（1972年「チエチェ思想の本質と社会科学の任務」）が続いている。

本業は国際法であり、1960年から始まった、五人の被爆者を原告とするいわゆる「原発裁判」では、原告側の要請で「非人道的、無差別的爆撃であり国際法に違反する」むねの鑑定結果を提出しているにもかかわらず、安井郁さんは毀誉褒貶の人だった。スターリン賞が廃止された後の無謬の人レーニンの名を冠した平和賞の受賞者となっただけではなく、後にはその国際選考委員にまで推されて就任。毛沢東もネールも礼をもつて会見し、日本共産党の党大会にも招かれて挨拶した。

時代は大きく変わり、ソ連全域でレーニン像までが倒され、その後に連邦国家は崩壊した。息女は、城田氏は「侑子さん」と呼び掛けて始まる追悼文で、モスクワ大での彼女の勉学を賞賛しており、その大部分はソ連の解体の流れに沿うものであったが、翻訳・紹介で注目されるべき業績を残して亡くなった。

葬儀と埋葬の後の偲ぶ会の集まりには、息女を生涯全般にわたってもっとも長期によく知る人である城田氏の姿が出席の百五十人なかには見えなくて、呼びかけ人である夫君が、日本一のロシア語学者と紹介して、氏の葬儀の際の追悼文の（全文ではなかった）を読み上げた。その後半には、息女の幸せとして渡辺氏との出会いと結婚を強調し、氏の人柄を賞賛したものであったが、「忍耐強い」の言葉が入っていて、それが、夫婦の逆の七歳の年齢差とともに、乳がんと説明されていたが、それに伴う精神的不調（吉田嘉清その他の人々による）の七年におよぶ介護を指すことは、明らかだった。弔文が代読されたのはこの一件だけで、私は考えさせられた。私は、氏の欠席は賢明だったと思い、そのむねを記

してメールした。返信は無かったが、その代わりのように、1957年のモスクワ友好祭について参加者の息女が当時の雑誌に書いた印象記が送られてきた。

ソ連が、スターリンの意向によってサンフランシスコ講和条約をボイコットしたために、その人の死が死んで、領土問題を棚上げして、ようやく1956年に国交回復宣言がなされたのだった。異なった社会体制の平和共存が強調され、青年学生の友好祭でも芸術芸能が重視されて、日本代表団の場合も、催しの一つ「日本の夕べ」のために、三十人もの芸術芸能人が参加していた。モスクワ以来のしきたりで、この刺激により、国内に全国組織ができたほどだった。そうしたことの調査を含めて、城田氏の教え子のなかからそれらを研究する若いグループ現われ、城田氏も同伴で拙宅に見えることになったのである。その一人はネットで調べた、私も知らなかったあなたの文章をまで持参してきていた。わが家の玄関には、あなたの作品である油絵があなた自身によって飾られていて、「奥さんの絵ですか」と問い、「あっ、KAZUの署名があるー」と叫んだ。

「長瀬さんの奥様とポール・ロブソンが同じ舞台にたっていたなど、奇蹟に近いような気がいたします」云々とまるメールを城田氏から頂いたのはその集まりの後だった。述べたようにウィーン友好祭の閉会式の最後の最後の場面のものであって、拙宅の仏壇前でああなたの拡大写真を認めた氏は、「あのときと変わらぬ美しさ」と書き添えていた。追悼文で息女の気品のある美しさを賞賛していた同一人の言葉なのである。

結婚し東京で同居するようになってからだったが、何かの折に息女が話題になって、私が「美人」を口にしたことがあり、あなたが「たいしたことはない」と応じ、「お母さんのほうが上だわ」といった。「まあ、あっちのほうが若いけれどもね」が言外に聞こえたものだ。あなたは自分のほうが上だと思ってもっていたようである。あなたたちは往路のモスクワ観光で、バスが同じで、ずっと同席して語り合い、キエフに向かう駅で別れていた。その間の親しみのこもった語らいが記述されている。

ほどなく、すでに始まって久しい地球の温暖化の延長と考えられるコロナ禍が起こり、マスクとZOOMの不自由な生活を余儀なくさることになった。そして続いて「ウクライナ戦争」が起こった。あなたも帰路には立ち寄って見物したキエフが首都の国である。もちろん私はクリミヤ半島、アゾフ海岸のチェーホフの生地タガンローグまで含めてよく知るところだ。そして少しだが知ってもいるパレスチナ。そして今日思うのだが、これらの「戦争」が啓示する解決の道筋は、1959年8月10日夕べ閉会式でのロブソンと日本女性辛島和子の一幅の絵が示しているということである。そのような意味で絵は今日私たちに於いてこそ教訓的な奇蹟となっている。

ロブソンについては不十分だがすでに述べた。ロシア歌曲も好んで歌っていて、そのソ連国歌には感慨深いものがあった。彼が啓示するのは黒人・民族差別問題である。あなたが啓示するのは核兵器の廃絶と古川和男博士である。すべては『原発安全革命』に書かれているので、私はそれには書かれていないことを補足することになる。

米国内でトリウム熔融塩炉が葬られたのは、ウラン軽水炉からは副産物として得られる原発をつくれるプルトニウムを産しないこと、すなわち冷戦に役立たず、なことにあった。私もそう理解し、記述してきた。しかし真相は、米国内に大量のベルギー領コンゴ産のウランの在庫があり、その所有者である金融資本が、冷戦に役にたたないと主張したためなのである。

それでは冷戦が終結したのにもかかわらず、なぜ「ウクライナ戦争」は起こったのか？これは、第二次世界大戦後も、小規模とはいえ絶えず戦争を続けてきた超大国が起こしたのである。エマニエル・トッド氏に従えばアングロ・サクソン国家だということになる。この両国の軍需産業、それを支配する金融資本は、トッド氏が明言を避けているが、ユダヤ系資本である。

古くは、そのためにこそマルクスは『資本論』を執筆、『共産党宣言』を発し、これを継承してドイッチャーは自らマルクス主義者、「非ユダヤ人的ユダヤ人」と定義し、ホロコーストの体験にもかかわらず、これに深く学ぶことなく、イスラエル国家の建設に走った同胞のユダヤ人たちの愚かさや邪悪さを批判した。彼が憂慮し予言した事態の発生なのである。

古川和男『原発安全革命』は傑出した科学技術書であるが、それに留まるものではない。その第10章は「核兵器完全廃絶への道」と題されており、これを現代文明の問題として、「世界に冠たる平和憲法をもつ日本人の責務」として考究しており、その結論は「プルトニウム・天然ウランの全面使用禁止を目指そう！」である。そのための必須の一步としてのトリウム熔融塩核エネルギー協働システムなのであるが、フクシマ3・11から十余年、まだ道半ばであるどころか、日本政府の再稼働促進政策によって遠のいたかのようにも見える。しかしコロナ禍で遅滞した上海のFUDが操業にいたれば逆転するだろう。夜明け前がもつとも暗いという。今はその時節にあると信じよう。

ファロー四徴症という先天的心不全で生まれた長子ツヨシは、体が出来上がる四歳を待つて手術が行われることになっていた。二度目の妊娠があり、次男が生まれ、あなたがその子に掛かりきりで、不満だった。気を引くためにわざと悪さをして叱られ、私が出張中だったので「パパがいなくて僕はサビシイ」と泣いたという。四歳十カ月で逝った。弟のサトルは兄の顔をしらず、仏壇の写真を見て育ち、ある日突然「ボクにはニイちゃんがいんだ！」と叫んだ。利発で、あなたがプレーヤーにかける「モスクワ郊外の夕べ」をロシア語で歌った兄。これに比べると凡庸だが、健康が取りえで、私たちはそれ以外は望まなかった。まああの大学からトリーバに入社。同時にあなたは彼に家を出て暮らすのを求めた。自分の傍にいと結婚に差しさわりがあると信じていた。後に判明したのだが、海外で原発製造会社を購入するなどの経営で、会社の雰囲気は悪いものだったようだ。当人の性格もあって調理師の資格をとって退社した。あなたの状態が悪化した時期のこと

で、家に戻ってきてあなたの最後の面倒を見たのは、依然として独身のこの子である。私は葬式の準備をしていた。あなたの深謀遠慮は効果がなかった。

営業目的で古川和男が3・11直前に設立したTTSの株主になるに当たって、私は名義をこのサトルの名で行った。トリウム熔融塩炉で始まる核の新しい時代をワインバーグは「第二の核時代」と呼び、その到来を確信しつつも、「残念なのは、私がそれを見るのがないことである」と記した。和男氏は、フクシマの年であり、盛りあがっていたので、あとを継ぐ四歳年下の雅章社長は「見る」だろう、と思っていただろう。

大学教授だった大槻義彦に質すと、大卒者で男女ともども二割が結婚せずにいる、とのことだった。かつてかれの提案で友人の息女と見合いし付き合ったことがあるのだが、実を結ばず、その女性も結婚していないという。

独身の原因に、あなたが被爆者であること以上に、私があなたについて、また私たちの最初の子の不幸について書いていることが原因でないかと思われるのだが、それを質すことはできない。それは私というものの本質にかかわってくる問題であるからだ。可哀そうそうだが、耐えてもらいたい。悪く罪深いのは原爆投下者たちである。

「引揚者」という「故郷喪失者」のよぎらない帰結として、私は到着地（点）において書くことを目指して生きた。幼時に起こっていたヨッポイマツの一語の記憶喪失のためだった。しかしデュラスが言うように、「忘却もまた記憶の一種」なのであって、私が「書かなければならない」と思い込んでいたのは、そのような「失われていた記憶」なのである。

私は言わなかったのだが、松尾教授は感じていたようで、「小説を書きたいのであれば、ゴーゴリを写してみるように」とアドバイスしていた。しかしこのゴーゴリに学んだドストエフスキーについては、積極的には薦めなかった。木寺黎二のペンネームを捨て、本名を名乗りつつ、教授が目指したのは政治的行動に邁進する学生の育成だった。それを絵に描いたように代表したのが吉田嘉清であり、それは彼の著書『戦後わが行動』の書名に表れている。

現代とは違って、戦後初期は演説の上手下手が指導者の選定の基準だった時代である。

吉田自身は「演説の仕方は松尾さんからじかに一対一で習った」と語っていた。そしてその松尾とは、そのパンフレット『雄弁術』に自ら記しているように、シエイクスピアの『ジュリアス・シーザー』のアントニウスの演説に学んだ人だった。要は聴衆を行動に駆り立てるものでなくてはならないのであり、松尾の場合それは戦後民主主義革命への呼びかけであり、「歴史を前方に推し進めよ」はエンゲルスから借用であった。

宮本顕治の演説はどうだったか。1956年衆議院選挙のさいに松尾家で茶を飲んでおり、その際、奥さんは「宮本さん、もっと笑わなくちゃ」と意見した。「分かりました」との返事だったと伺ったが、私は笑う宮本氏を想像できない。レーニンは分派をかたく禁じたが、同時によく笑う人だった。

体調は不良だったのだが、一人で外出できており、死は突然（と思われた）訪れた。当

時教授がもつとも気にしていたのは、東京都委員会を牛耳る武井昭夫の党中央宮本への反抗だった。「どうしてあまで逆らうのかね」と苦し気に語っていた。

原因は先に記したスパイ誤認事件にあったと思われる。デマを流した警視庁のスパイのその後の消息がまったく知られておらず、破壊のための謀略だったことは明らかだからである。

「もう少しドストエフスキーについて書き残してくれていたならば、己の人生はもう少し楽になったのに」と私は、教授の没後三日に一度は思いながら生きてきた。教授の遺稿に当たってみなかったのは不覚であった。しかしまさにその代わりのように、私は、辛島和子よ、あなたに、ということはヒロシマに出会ったのである。

しかしそのことを書くこうとして、どうしても書けなかった。樺太の物語を書き、加えてあなたが乳がんから人工透析の生活に入って、ようやく書けたのである。それからは生起する諸問題に追われ、それら进行处理しつつ、古川和男トリウム熔融塩炉FUIに到着した、という次第である。

歴史把握に欠かせないことに時代区分があつて、現代をアインシュタインの相対性原理の発見に始まる核時代としたのがワインバーグだった。広島への原爆投下を起点とする時代区分も成立しようが、とりあえず核時代に譲る。いずれにしても、その実存はありえず、「抽象的人間」(マルクスの定義)であるキリストの生誕を起点とする西暦よりは普遍的かつ全世界、全人類的である。

この最初の核時代の中心も問題が、核エネルギー炉である。その唯一無二の正解がワインバーグ&古川和男のトリウム熔融塩炉FUIであることが分かったと、それまで私自身が何をしてきたかを自問せざるをえなかった。それで私が原水禁運動にかかわってきた者であることを示すために、安井郁・田鶴子夫妻と吉田嘉清その他の人々について述べた。

吉田氏に続く、一回り若い息女の訃報は有る圧迫感からの解放であった。また城田俊氏から、「ただ一人であり、それ故にすくなくらず浮いた感じを与えた」と注記された、当の送辞の文章の送付をうけたのだった。一か月後に行われた「安井侑子を送る集い」では、原水禁運動と深い係わりのあった一家の出のひとであるにもかかわらず、その関係者といえるのが私ひとりであることに、寂寞を味わった。夫にして主催者である渡辺氏にしてそうである。ただしこの人は、安井郁その人について、義父とは呼ばず、父と呼んでいた。その娘婿であることを誇り喜んでいると見受けられる。

城田氏とて、私に言わしめれば、原水禁運動では外のひとであるが、何かを感得しており、それが、ハザールの「ユダヤ人問題」に向かわせ、Internationalではなく、Worldではあったが、Peace & Friendshipの大会のフィナーレでのポール・ロブスンとあなた、着物の姿の日本女性被爆者の並んで立つ姿について、「奇蹟」云々の形容の言葉となったのだ、と思われる。ユダヤとはキリスト教側からの名辞であるが、それを宗教と仮定しても、ユダヤ教は自身を神に選ばれた民であるとする極端な民族宗教あり、Peace & Friendship

とも無縁である。

マルクスが指摘するようにその神とは貨幣のことであり、戦争が金儲けに好都合なので平和（が続くのは）は好ましくない。冷戦はこの勢力によって仕組まれたものであり、その終焉と平和の到来またその継続は、危機である。かくて引き起こされたのがウクライナ戦争である。

杉原千畝に感動してその行動をオペラ化しようとしたことのある辻井喬氏であった。取りやめたのは、イスラエルの成立事情に、不審なものを知ったためかもしれない。ふりかえってみれば、すべてがドイッチャーが危惧・予言したとおりになった。強引に陰謀をもって建設されたイスラエルは、その翌日から原住のパレスチナ（アラブ）人と戦争状態になり、起伏をはらみながら延々と続き、2024年12月以後の今日の事態に至った。杉原に感謝し、賞賛していたユダヤ人およびその子孫が、ガザ攻撃（パレスチナの殲滅）をおこなっているのである。

聖書に記されているユダヤ人、すなわちステファラディであってもイスラエルの建設は許されるべきことではない。いわんやトルコ系のハザール国のユダヤ教信者が、国が滅びた後にユダヤ人になったかのように錯誤し、アシケナージを名乗る、「生まれた郷土」都僭称し、その「回復」を目指し、実現したのがイスラエルという国なのである。

ドイッチャーを読んできて、「資本主義がこんなに長く続くとは思っていなかった」の文言に驚いたが、ハザール・ユダヤについて言及しなかった楽天主義に通ずると言えよう。その多数派は、第二次大戦後の核時代の到来をも、資本主義の持続の好機ととらえた。これと植民地主義の継続を意図する米英支配層の合体がシオニズムの推進となり、イスラエルの建国となったのである。マルクスとドイッチャーは誤っていたのだろうか。否、彼らは正しかったのだ。ハザールが資料に乏しい幻の国であった時代的制約のためでもあった。しかし1992年の古都イティルの発見以来状況が変わってきたのであり、その実在を比較言語学的にも実証する城田俊書の発刊となった。それがイスラエルのかかえる論理的・倫理的矛盾が、かつてなく生々しく露呈した2024年のことなのである。その矛盾は資本主義の矛盾にほかならない。

何ゆえの**奇蹟**であるのか。あれは中国をふくむ社会主義陣営、旧植民地・従属国全体が日本の原水禁運動に注目し思想的に頼っていた時代のことであり、人類が向かうべき方向を示す一幅の絵であった。またそれ故に私は書いてもきたのであり、城田氏の定義はそれをも踏まえてのものである。そしてそれは今日、未来を照らす光となっている。

完

ま

マゴ（アムール河口の原木積出港、同行した長谷川四郎氏との現地写真）

マルクス主義（とはキリスト教の否定的超克、すなわち止揚） 118

『道——安井郁 生の軌跡』（1989、法政大） 123

モーゼ十戒（貨幣が神である、→貨幣） 99

や

ユダヤ人（マルクスによる定義）「世俗的な祭祀は、あくどい商売である。神は貨幣である」

「ヨハネ黙示録」 99～100（「獣」はローマ貨幣、「竜」は商品群）

『夜と霧——ドイツ強制体験記録』V・フランク著 94

ら

レッド・パージ反対闘争（1950） 117

「恋愛について」チェーホフ作 29、69

ロゴス (logos) 88～9、100

わ

『早稲田・1950年・史料と証言』全六冊(98～2000) 長瀬が「松尾隆」を連載。結語は「ビキニ後の原水禁運動は日本人が史上初めて己を人類の名で語り始めた運動だった。〈日本のコミュニンですのう〉、と島原言葉で語り、コミニズムをも新しくとらえなおすヒロシマ黙示録、その哲学の樹立を目指していた」同誌6号 露文関係知友追悼—小林勝（作家）・古林尚（現代文学史）・松岡信夫（環境問題・露語翻訳）・喜入眞（詩人、雑誌編集）別冊に長瀬編集「戦争と天皇制」（京大天皇行幸事件30周年記念の東京シンポ

ジウム）

『我々はどこから来て、今どこにいるのか？——民主主義の野蛮な起源』トッド（邦訳2022）91 「(ウクライナでの戦争は)米英二つのアングロ・サクソン国家が仕掛けたものである」

ソ連における社会主義建設（「ただたんにロシアのためだけに行なっているのではない」レオーノフ

総点検運動（1954、日共徳田・野坂派による）19

た

『タオ自然学』F・カプラ著（タオとは老子の道教の「道」の中国音の表記）97

『断層地帯』小林勝（→『早稲田・1950』誌5号）48

た一坊、たん瘤、十二瘤（幼時の囃し言葉）16

中産階級（→小市民、トッド説、或る程度までベレヴェルゼフと共有）70

『中論』（→ナーガルジュナ）84,119

チェルノブイリ（は『ヨハネ黙示録』の苦艾（にがよもぎ）26

抽象の人間（キリストのマルクスによる定義）78、127

遠淵村（樺太、中知床半島。ロシア名ブッセ）33、36、45（永遠と絶対、そのようなものとしての真実）

『東京アッピール（日本原水協、1956）

ドストエフスキーとは何か』（草思社）83

『トリウム原子炉革命—古川和男・ヒロシマからの出発』（2014、展望社）

な

日本原水協国民使節ソ連班（1957）68、72～3

『日本共産党私記』安東仁兵衛22、130

『日露領土紛争の根源』（2004）

は

『鼻』ゴーゴリ（ドストエフスキーのドヴォイニク・二重人の先駆）15

『般若心経の再発見』（→林田茂雄）

「広島・アウシェヴィッツ平和行進」99

「ヒロシマを見る」デュラス50

『ヒロシマまでの長い道』（1986～9、核時代45）57、

「物質と精神の対話」ケストラー97

『文化革命』蔵原惟人19

分身（仏典に由来する漢訳語）62（ドスト訳語としては誤謬）、81、83

文芸春秋社「全く発想の違う「液体」「トリウム」「小型」この原発であれば

福島もチェルノブイリも起きなかった—古川『原発安全革命』の帯

平和事務所（→行宗一）27、88

弁証法82（レーニンの）、83（マルクスと蔵原惟人の）、→林田茂雄

『微笑（ほほえみ）の沈黙』（1995、核時代50）

「忘却もまた記憶の一種」デュラス、（失われていた記憶）

ホロコースト（とパレスチナ殲滅ナクバ）99、126

2、事項および作品著作名、またそのなかの中の登場人物

欧語

Communism 共産主義と邦訳され中国が受容。→コンミュン

Die Tat(行い)ゲーテによるヨハネ福音書ロゴスの訳 100

Fausten Bargen (→悪魔からの買物) 112

ORN L (米オークリッジ研究所) 112

ITMSF(トリウム熔融塩国際フォーラム)

ДВОЙНИК=double の両義性・二重性(全西欧精神解明の鍵→分身) 82

Status in statu (国家内の国家、ドストエフスキーのユダヤ批判語) 103~4

TTS (トリウム・テック・ソリューション)

あ

悪魔からの買物(ワインバーグ「ファウストの買物」の邦訳名、現行のウラン軽水炉を指す) 112

イスラエル(の否定されねばならない建国) 66、101 (→ガザ攻撃)、128

永遠と絶対、そのようなものとしての真実(→遠淵村)

大隅講堂、1957 真冬の夜空の祝福の鐘の音 40

大泊(旧樺太)中学校 33、44

か

過去推量形(デュラスの) 53(宮沢賢治にも通底する)

ガザ攻撃のジレンマ 「イスラエル軍は非倫理的と非難される。だからこそ高い倫理性があると言い続けなければならない」(イスラエル学者、朝日24・5月) 102、126

貨幣(唯一絶対神の) 96、99~100

貨幣以上の神(「モンスーン(米作)地帯の) 83、97

『樺太よ遠く孤独な』(1984、西田書房) 26、49、76、同書のフランス・

ユダヤ人女性研究者 18、40

キリストとマリアの像の隠べい(長崎の米原爆に破壊された)

原水爆禁止第三回世界大会(1957、東京) 5

広州交易会(1967 春、文化大革命) 40

国際学連歌(われらが友情は原爆あれど絶たれず) 75

コンミュン(公共社会→Communism)

さ

作中作家(作中の語り手) 16、48

『桜の園』チェーホフ 表題の誤訳は優れた意識? 133

サハリン2天然ガスの液化日露貿易港(→大泊・コルサコフ) 33、

シオニズム(→イスラエル) 95~6,128~9、128

『死のうちの生命』() リフトン著 70

『資本論』(→平田清明) 94、100

『襲来』レオーノフ(文学とスターリン) 19

小市民(→中産階級) ペレヴェルゼフ「悪魔のヴォードヴィル」20、トッ

ド「マルクス主義は伝統的にプチ・ブルジョワをバカにしてきた」57

「すぐりの実」(チェーホフ作)は樺太ではグスベリ(goose-berry) 37

「早大露文科の閉鎖を惜しむ」中野重治 22

ドストエフスキー（『作家の日記』収録の「ユダヤ人問題」） 102
 トッド（エマニエル） 26、32、49～50、57～9、66、73、91、120
 トランプ米大統領（ディープ・ステートが指すもの、→Status in statu）
 67、

な

永井隆 94
 中川一郎（の死） 34、77
 中野好夫 88
 西鶴定家（『樺太の歴史』著者、樺太師範教授、大分出身） 28
 ナーガルジュナ（→竜樹菩薩『中論』） 84、119

は

林田茂雄（非転向者、→『般若心経の再発見』色即是空の空は、ヘーゲルの成）83～4、119
 フーコ（ミッシェル）『言葉と物』 83
 ペレヴェルゼフ（『ドストエフスキーの創造』みすず書房、長瀬訳） 14、
 1922年生誕百年祭での基調報告「ドストエフスキーと革命」19
平田清明（世界的規模で唯一にして最高の『資本論』学者） 40、99～100
 ブブノヴァ（早大講師） 62
 平野義太郎

ま

松尾隆（木寺黎二、早大教授・日本平和委員会常務理事、→『早稲田・
 1950』 18
 松尾衣子（隆夫人、宮本氏について）
 マヤコフスキー（叙事詩『ウラジーミル・イリイチ・レーニン』） 18
 丸山真男 96～7

マルクス（ハザール出自の自称ユダヤ人については、知っていたが書かなか
 った）

宮本顕治 14、38、77

宮本百合子 75

宮沢俊一（演出家、ロシア演劇） 87～8

や

安井郁 3、32、68、89、123（→『道』、「原発裁判」で正しく証言）、132
 安井田鶴子 26、28、89
 安井息女（侑子）27、84、87、122
 湯川秀樹 99
 行宗一（東友会、日本被団協。平和事務所を創始） 3、27、68
 除村吉太郎 38
 横田瑞穂 21
 吉田嘉清 3、56、58、72、84～6、88、98、123、126、130
 吉野源三郎 88

ら

レオーノフ 28、82（ドストエフスキーとアインシュタイン）
 レーニン
 リリエンソール・D・E（米原子力委員会、古川訳『岐路にたつ原子力』）
 68、98
 リリエンソール・A・M（『ユダヤ・コネクション』） 95、98
 ロゴス（ゲーテとマルクスの） 88～9
 ロブスン（ポール、黒人歌手）91～2、97

わ

渡邊正治（広大原医研、社会心理学）45、70

索引

1, 人 名

章名に名前が掲げられている場合には、その全てを掲げているわけではない

あ

朝倉摂（ロブスンを描く） 92～93

ヴィソーコフ（サハリン大教授）「小なりといえども世界史の不可欠な部分としてのサハリン」28、111

内村剛介 38

江川卓（外村史郎子息） 22、47、91

岡田嘉子

小田切秀雄 14、89

か

片上伸 14、57

辛島和子（の他界）84

蔵原惟人 22、83、91

ケストラー『ユダヤ人とは誰かー第十三支族・カザール国の謎』 99

香山健一（全学連委員長）5、111

ゴーゴリ（ウクライナ人、ロシア最初の小市民作家） 15、126

古在由重（→平和事務所。松尾隆について「あんな自由なひとはいなかった」） 88

コワレンコ（ソ連の対日政策を立案） 77～8

さ

佐藤優 78、103

城田俊 84～5、90～1（ウィーンの奇蹟）、95、122、128

杉本良吉（岡田嘉子との逃亡・脱出事件）

た

高倉三郎（高倉テル三男） 13

武井昭夫（全学連初代委員長） 22、127、

立花隆 113

チャーホフ 11、41、64、『サハリン島』80

堤堯 113

辻井喬（堤清二） 22、『新祖国論』113

ドイッチャー（「ナチズムは共産主義にたいする資本主義旧体制の自己防衛」、「女子供をふくめた六百万の人間が生き残って、ユダヤ人という概念が減びた方がよい」66

遠山美智（盛岡市病院長、日ソ親善協会役員、サハリン残留邦人一時帰国促進会代表、遠淵出身で後援者、→辻井喬） 34